アルティエル戦記

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルティエル戦記

【Ｎコード】
Ｎ０９６４Ｅ

【作者名】
秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】
この作品はまことに勝手ながら、中途半端な区切りで連載休止にさせていただきました。聖天使アルティエルと七英雄の活躍によって宇宙に追放された大魔王の魂が、永い月日を経てこの地上に舞い戻って来た。英雄の意思を受け継ぐものたちが剣を取り大魔王に戦いを挑む！
たぶん縦書きのほうが読みやすいです。

そして、新たな伝説へ

世界に文明が色付きはじめた頃であった――。
燦然と夜空に輝く尾を引く星に乗って、世界に災いをもたらす者がこの世界に舞い降りた。
星に乗ってきた災いは、自らを大魔王カオスと名乗り、この世界に侵略戦争を仕掛けてきた。
世界は大魔王カオスによって暗黒の渦に飲み込まれようとしていた。その大魔王カオスに戦いを挑んだ国があった。
大魔王カオスが現れる前まで戦争をしていたランバード王国とシオゥル帝国は一時休戦の条約に調印し、力を合わせ大魔王カオスに戦いを挑んだのだが、大魔王の力は強大であり人々は長い戦いの間に心身ともに傷ついていった。
多くの命が失われ、人々の劣勢は明らかであった。
――大魔王との戦いは数十年もの長い年月を経てもなおも続き、人々は大魔王の侵略に立ち向かう術を徐々に失しない、魔王の配下である魔物の恐怖に脅える日々を過ごしていた。それでも、人々は希望を捨てることはなかった。
当時ランバードの第一王子であったアベルは国王の反対を押し切り、戦場に自らの軍隊を率いて最前線で戦い、多くの戦果挙げて魔王軍を恐れさせた。人々はそんな彼のことを救世主と崇め称えたのだった。
そして、アベル・ランバード25回目の合戦の時、彼は魔王軍四天王の暗黒騎士ヤクシャと一線を交えることになった。
アベルとヤクシャの戦いは三日三晩の間続き、最後はアベルの渾身の一撃により、ヤクシャは息の根を引き取った。
しかし、ヤクシャの振るう暗黒剣で負わされた傷口は神官の回復魔法でも塞がらぬ呪いの剣技によるもので、傷が深まらぬように現状を維持することで精一杯だった。

そして、アベルは戦いの後、出血多量で意識を失い死の淵を彷徨った。
アベルが倒れたという痛手は戦力の大幅な減少を意味し、アベルの率いた軍隊は大魔王軍による猛攻撃に遭い、已む無く軍隊を引き上げることとなった。
死の淵を彷徨っていたアベルの魂魄は、聖天使アルティエルの導きによって一命を救われ、再び現世に戻された。
その際、アルティエルはアベルの魂魄を現世に戻すのと代わりにアベルに条件を出した。
その条件とは世界各地に未だ眠る英雄の力を持った5人を探し出しなさいということだった。
再び生を得たアベルは世界各地を旅して、1年という月日を経てついに5人の英雄を探し出すことができた。
そして、アベルとアルティエルを加えた7人の英雄はアルティエルの守護のもと魔王軍を次々と倒していき、ついに大魔王カオスとの死闘を迎えることになったのだ。
しかし、大魔王の力の前では英雄たちの力など取るに足らないものであった。
そこで七英雄の一人、天才発明家ダイダロスはパンドラボックスという邪悪なモノを封じ込めることのできる箱を発明し、大魔王カオスをこの箱に閉じ込めることを考案した。
七英雄は大魔王との死闘の末、見事大魔王カオスをパンドラボックスに閉じ込めることに成功した……かのように思えたのだが、パンドラボックスに閉じ込められたのは大魔王カオスの肉体だけで魂魄はこの世界に残ってしまった。
アベルと聖天使アルティエルは自らの命を投げ出し最後の力を振り絞り、大魔王カオスを倒そうとしたのだが、負けじと大魔王も最後の力を振り絞りそれに抵抗した。
そのため聖と魔の強大な力がぶつかり合い時空を歪め、大魔王カオスは聖天使アルティエルを道連れに時空の彼方へと飛ばされてし

まった。
……これによって長い戦いは終結を迎えた。
しかし、この戦いでアベルはその命を落とし、人々は七英雄と聖天使アルティエルを称え、そしてアベルの死を悲しんだ。
君主を失った大魔王の配下であったモンスターや悪魔たちは忽然とその姿を消してしまい、多くの人々が安息の日々を迎える時代が来た。

そして、月日は流れ――今ここに新たな伝説が初まりを迎えようとしていた。
この伝説に終わりは無いのか……？

Ｐｅｒｓｏｎ　ｏｆ　ｃｏｕｒａｇｅ
もう、誰も殺させはしない。そのためにぼくは戦うんだ。

Ｍｙｓｔｅｒｙ　ｍｉｎｓｔｒｅｌ
真の言霊は悪しき存在を貫かん。

Ｈｏｌｙ　ｗｏｍａｎ
全ての人に平和が訪れるまで私は祈り続ける。

Ｓｗｏｒｄ　ｄａｎｃｅｒ
あたしは、あたしはみんなを守れなかった。

Ｋｎｉｇｈｔ　ｏｆ　ｄｒａｇｏｎ
キサマら好き勝手やってんじゃねぇ、オレがブッ殺してやる！

Ｗｉｎｇ　ｍａｎ
貴女の魂が安らぐその日まで、私は戦い続ける。

Ｌｉｔｔｌｅ　ｇｉｒｌ　ｏｆ　ｄｏｌｌ

永遠の時間の中でワタシは罪滅ぼしをするの。

Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　ｍａｃｈｉｎｅ

悪い奴らにボクが負ける訳ないじゃない。

新たな伝説の歯車が今動き出す……。

闇の鼓動

アルティエル暦１０１８年ランバード王国――。
ランバード王国では早朝から国全体が騒がしく、兵士たちの活気で満ち満ちていた。
「バーンズ軍団長、出陣の準備は整ったか？」
「はっ、準備は整いいつでも出陣できます」
ランバード王の言葉にこう答えたのは恰幅のガッシリしていることが鎧に上からでもわかる今年四十六歳を迎えた、この国切っての剣の使い手バーンズ軍団長その人である。
兵たちは馬の手綱をしっかりと握り締めいつでも出陣の準備は整っている。ランバード王はそれに満足した。
「そうかでは、兵士たちに出兵を伝えよ」
「しかし、ランバード王、王自らが出陣するなど……」
バーンズ軍団長は言葉を途中で詰まらせた。
「お主の言いたいことはわかる、しかし、王が城に引きこもっていては兵士に示しが付かん。命の重さは兵も王も変わらぬ」
王のこの平等の精神は国民全員に伝わっており、そのことにより王は国民の絶大の信頼と信望を集めていた。
「しかし……」
バーンズ軍団長はまたも言葉を詰まらせた。バーンズも王の考えはわかっている、わかっているからこそ今までこのお方に長年仕えてきたのだ。
王は前国王が早くに亡くなったため王に即位するのが早かった。そのため王は今年でまだ２０歳になられたばかり、それに今は……。
「戦いではつねに戦陣を切ることでこそ英雄アベルの血を引し、我がランバード家のつとめだ」
「しかし、今はセリス様の御出産を間近に控えた大事な時期、やはり王は城に留まれた方がよろしいのでは？」

バーンズはついに自分の気持ちを言葉として紡ぎ出した。
「もう、何も言うな」
「はっ……」
王の言葉にバーンズはこれ以降何も言わなかった。言わなかったのではない、言えなかったのだ。
王は天を仰ぎ、一呼吸を付くと、馬の手綱を強く握り締め馬に合図送った。
「さぁ、いざ行かん！！」
王の掛け声とともに軍勢が一歩一歩大地を踏みしめ歩き出した。多くの軍勢が動き出す様は圧巻としか言いようがない。
こうして、王とその率いる軍隊は不死皇帝との戦に出陣して行ったのだ。

この世界には二大国家と呼ばれる強大な力を持つランバード王国とシオゥル帝国という国があった。
両国は聖戦と呼ばれる大魔王カオスとの戦争以前には、血で血を洗う戦争をしていたものの聖戦が始まってすぐに二つの国は条約を結び連合軍として大魔王カオスと戦ったのだった。
しかし、大魔王の力は強大であり、シオゥル帝国は滅亡の一途を辿ってしまった。
そして、聖戦が終わった後も帝国は再建されることなく、その名前を歴史に残すのみとなったのだが――。今から３００年ほど前突如現れた不死皇帝と名乗る男がシオゥル帝国を復活させたのだ。
そしてまたシオゥル帝国は聖戦以前のような侵略戦争を始めたのだった。
しかし、以前の帝国と変わっていたことがある。それは国が死んでいるということ、言葉を言い変えるならば亡霊やアンデッドの住む国なのだ。この亡霊たちは過去の聖戦により死んで逝った者たちだと言われている。
アンデッドはまだしも亡霊たちは普通の攻撃では死なない、その

ため魔法などで倒していくのだが、倒しても倒してきりが無い、なぜなら不死皇帝との戦いで死んで逝った見方の兵士たちはすぐにアンデッドや亡霊に姿を変え、不死皇帝の配下となってしまうからだ。
不死皇帝はその名の通り死の無い皇帝で切り刻れようが、炎で焼かれようが再び現世に蘇ってくる。
そのため不死皇帝の侵略戦争は着々と世界を制圧していったのだが、しかし、不死皇帝の軍にも弱点があった。
その弱点とはある一定の範囲から外には軍は攻め入ってこないということだった。その弱点を利用して人々は範囲外に逃げるように移住していった。
しかし、不死皇帝の軍は年々範囲外にもその魔の手を伸ばして来ている。いや、範囲が広がっているのに違いない、不死皇帝の力が月日をおうごとに強くなっているということなのだろう。
そして今その魔の手がランバード王国に伸びようとしていた。

ランバード王率いる軍がこの場所に辿り着いたのは城を出て3日目の晩のことであった。
もう辺りは暗闇に包まれ大地を照らす月の光を身体全身で感じることができた
緑溢れる草原がどこまでも広がっている。近くに建物や民家もなく戦争をするにはもってこいの場所だった。
この平原はかつて大魔王カオスと七英雄との最後の戦いで、山や谷だった場所がまっ平らな平地となったと伝説では言われている。
王はここで不死皇帝の軍隊を向かえ打つことにした。
突然冷たい風が辺りを吹き荒れたかと思うと、チリン、チリンという小さな鈴の音が……？
「バーンズ軍隊長、神官たちに呪文の詠唱を始めるように伝えろ！」
王の声からは緊張と緊迫が感じられた。
「はっ」
バーンズは手短に敬礼をして、すぐに神官部隊に聖魔法の詠唱をす

るように指示をした。
「神官部隊、呪文詠唱始め！！」
神官たちは手にもったロッドを両手で天に掲げ、一斉に呪文の詠唱を始めた。すると、また鈴の音が――今度は先ほどより音が大きくなっている。
「来たか……」
そう呟いた王の目線の先には、青白い炎が暗闇の中にぽつん、そしてまたぽつんと、徐々に増えていった。青白い光と月の光によって、暗闇の先にあるモノがはっきりと見えてきた。アンデッド兵だ！
「打てぇー！！」
王の張り上げた声と同時に神官たちの身体から光のレーザーがアンデッド兵めがけて発射された。轟音とともに辺りに砂煙が立ち込める。しかし、砂煙の向こうからはまた鈴の音が――。
「し、死の行進だ！！」
誰かが叫び声を上げた。兵士たちがこれを合図に一斉にざわめき始めた。
「静まれぇーっ！！」
バーンズ軍団長の怒号が辺りを静まり返した。そしてすぐに言葉を続けた。
「神官は魔法の詠唱をすぐの始め、剣士はアンデッド兵を向かい打つ準備をしろっ！！」
兵士たちはすぐさま攻撃の準備をした。そして、徐々に砂煙が治まっていき向こう側が見えてきた。そこにはアンデッド兵が何事も無かったように仲間のアンデッドの残骸を踏みつけながらこちらに攻め入って来るではないか！
「打てぇー、打て、打てぇい！！」
王の声が木霊すると同時に次々とアンデッドたちが残骸と化していく。しかし、アンデッド兵たちは次から次へと行進してくる、それも足音も立てずに――。聞こえて来る音は兵士の足並みに揃えた鈴の音だけであった。これが人々の間で噂として恐れられる『死の行

進』だ。
「……くっ」
王は唇を噛み締め、そしてバーンズにこう告げた。
「バーンズ軍団長、死の行進は不死皇帝を倒さぬ限り続くと聞いた……あとはまかせたぞ！」
そう言ってランバード王はアンデッド兵に一人立ち向かって行った。
「王に続けぇー！！」
バーンズ軍団長の声を合図にランバード兵とアンデッド兵が一斉に敵に向かって走り出した。そして、瞬く間に激しい殺し合いが始まった。
　ランバード王はアンデッド兵を次々になぎ倒していき、ついには不死皇帝の前まで辿り付くことができた。
「よくここまで来た、褒めて使わそうぞ」
ランバード王が顔を上げるとそこには巨大な身体にボロボロのローブを纏っている不死皇帝が宙に浮かんでいた。不死皇帝の身体はもう骨しか残っておらず、腰から下の骨はもう無く、頭には2本の角、額には赤い宝石が埋め込まれていて、目の奥から赤くゆらめく光がランバードを見つめていた。
　ランバード王は剣の切っ先を不死皇帝に向けた。
「アベルの血に架けてお前を成敗する」
「面白い、さぁ私を楽しませてくれ」
「ウォーっ！！」
ランバードは大地を強く蹴り不死皇帝めがけて飛翔した。
「受けてみよ我が秘剣」
ランバードの持っていた剣が激しい光を放った。その光はランバード兵たち、そしてバーンズの目にも届いた。
「……ランバード王」
バーンズはそう呟くと再び剣を構えアンデッド兵に向かって行った。
　ランバードは大剣を強く握り締め直し、不死皇帝の頭上めがけて振り下ろした。

「その程度の攻撃片手で十分ぞ」
不死皇帝は右手を挙げ、まるでハエでも追い払うかのようにランバードを手の甲で軽く叩いた。ランバードの身体は宙を舞い地面に激しく叩きつけられた。
「うぐっ……」
ランバードが不意に手を口やると、手は紅い血で見る見る染まっていった。
「英雄アベルの血も大したことの無い」
「それはどうかな？」
ランバードは剣を地面に突き立てながらよろめきゆっくりと立ち上がった。そして不死皇帝に向かってこう言った。
「自分の右手を見てみろ」
「何？」
不死皇帝が右手を上げて自分の顔の前まで持ってくると、あるはずの右手が無い。いや右手だけではなく、指の先から肩の付け根までが消滅してしまっていた。
「気づいたか？」
「いつの間に！？」
「お前の弱点は骸骨であることだ。痛覚がないため相手の攻撃がどの程度の力を持っているのかわからんのだろう」
「……あの時の攻撃がこれほどのものだったとは、アベルの血は凄まじいものだ。しかしその身体では」
不死皇帝は言葉の途中でいきなり襲い掛かって来た！
「ふっ、莫迦めが！」
ランバードは輝く大剣を力いっぱい横に振り払った。
「何！？」
不死皇帝の身体は二つに分かれ、そこに空かさずランバードは大剣を下から上に振り上げた。不死皇帝の身体は粉々の砂と化し、また動き出すことはなかった。
　アンデッド兵の動きが一斉に止まった。

「ふぅ……回復呪文ぐらい使える」
ランバードは一息を付き辺りを見回した。するとそこには目を覆いたくなる悲惨な光景が広がっていた。
「……！！」
ランバードは言葉を失った。自分が不死皇帝との戦いにだけ集中していた間にこんな事が……！　辺りに広がる光景は紅い血の海と肉塊と残骸でできた島……。
「うわぁーーーーっ！！」
ランバードは血の海に膝を付き腹の底から大声を出した。今まで幾つもの戦を経験してきた、しかしこんなおぞましい光景は初めてだ。
　ランバードは意外にもすぐに立ち上がった。まだ生きている仲間を早く見つけ出さなくては――。
　彼は生きている仲間を探し続けた、そして数人であったが生存者を見つけ出すことができた。しかし、ランバードが一番会いたい、せめて亡骸だけでも探し出したい人物は一向に見つからなかった。
　ランバードはそろそろ帰還命令を出そうと諦めたそのとき微かだが聞きなれた声が聞こえた。
「ラン…バ…お……」
「バーンズか！　どこだ？」
「ラン……ド…う」
肉塊の中から声が聞こえる。
「ここか、ここにいるんだな」
ランバードは死骸を無我夢中で掻き分け、やっとの思いでバーンズを見つけ出した。
「ランバード王、よくぞご無事で」
「お前こそ、よく無事であった……ん？　もしかしてお前」
「戦いの途中、目をやられてしまいました。しかし、ランバード王の気配は見えなくともすぐにわかりました」
ランバード王は涙を流し天に感謝の意を込めた。そして、
「さぁ帰ろう、みんなが待っている」

結局、生存者は１００人ほど見つかったのだが、最初にここに来た時の数に比べると１／１００程度に減少してしまっていた。見つかった生存者たちは皆重症であったが生き残った神官やランバードの回復呪文により傷を癒し元気を取り戻すことができた。しかし、バーンズの目だけは元に戻らなかった。
「やはり並みの回復呪文では駄目か……だが、城に戻ればきっと良くなる、それまでの辛抱だ」
そして、ランバード王たちはようやく帰路につき始めた……。

ランバード王宮では、王が旅立ってすぐにセリス王妃の陣痛が始まり、無事元気な男の子が生まれていた。
そして次の日、ランバード城内にある宮殿では、生まれたばかりの王子が王妃に抱かれ、多くの人が集まる中神聖な儀式を執り行おうとしていた。
白ひげに白髪の老人の水読み士と呼ばれる神官が人々の前に姿を現し軽く会釈をした。
「おほん、あーそれではこれから命名の儀を始める」
『命名の儀』とは王家に子供が生まれた時にその名前を決めるとても重要かつ神聖な儀式である。
水読み士の老人は水鏡に銀の水差しで聖水を注ぎ入れると呪文を唱え始めた。
「Ｙｋｅｓ　ｗｎ　ｎｋｎｋ　ｙＮＲＰＡ」
水鏡は優しい光を解き放ち、辺りは白の世界に包まれた。そして、世界が元の色に戻ると水鏡の中にある名前が映し出された。『エノク』という文字が――。
それを見取った水読み士は声高らかにその名を読み上げた。
「神のお告げにより名が決まった、王子の名はエノクじゃ！！」
ここに集まっていた人々から喜びの歓声が上がった。
「宴だ！　宴だ！」
人々は王子の誕生と王の帰還の宴の準備をして、王の帰還をまだか、

まだかと待ちわびた。
そして王が旅立って5日目の夜を迎えた。夜空は満天の星が空いっぱいに散らばり、瞬き輝いている。今宵の月はちょうど満月であった。
王妃は王の帰りを今か今かとテラスに出て満天の星空に思いを募らせていた。そんな時、空に輝く一筋の光が、そしてまた、そしてまた、幾つも幾つもの光の筋が――。
これは流星群に違いないと王妃は思った。話には聞いていたけれど、この目で見たのは初めて……王妃は急いで流れる星たちに願いを込めた。
「どうか……皆が無事に帰って来ますように」

同じ時間、ランバード王もこの流星群を見ていた。
「バーンズ、凄いぞ。こんなのを見たの……」
ランバードは言葉を詰まらせた。それを察したバーンズは、
「私の分までその目にしかと焼き付けて下さい」
「すまぬな」
ランバードがうつむいていると兵士たちがざわめき出した。
「おい、あれを見ろ！」
兵士の一人が大声を上げた。ランバードはその兵士が指差す方向を見た。そこには、他の流れ星より一層輝く流れ星が。
「……っ」
ランバードは驚きの余り息を呑んだ。それは流れ星の輝きではない、その大きさに――いや違う、大きいのではない、近いのだ。
「ここに落ちてくるのではないだろうな？」
次の瞬間流れ星はもう地上と１０ｍほどの距離のところにあった。
しかし、それ以上は落ちてこなかった。
「どういうことだ……？」
流れ星の光は徐々に治まっていき、ランバードやその他ここにいた兵士はすぐにわかった。――これは流れ星じゃない。

「な、何なんだあれは？」
兵士の一人が言った。そしてもう一人の兵士は、
「星の海に浮かぶ船」
形は海を行き来する船とは違い、金属らしい鉱物できた見たこともない形をしているが、宇宙から飛んできたことには間違いはなさそうだ。
　ランバードはある文献で読んだ記憶を呼び起こした。
「……星の船？」
古の時代、人々は星の船に乗って、星々を行き来していたという。実際にこの星にはいろいろな亜人たちがおり、それらの人々は違う星から来たという説もある。
「これは『星の船』に違いない」
「さすがはアベルの末裔、博識だな」
重厚感、そして威圧感のある声がどこからともなく聞こえてきた。
「どこだ、出て来い！」
ランバードは辺りを見回した。すると、星の船の扉らしきものが開き、中から赤黒い煙が出てきて、それはまるで生きているかのような奇怪な動きをしながら形を作っていった。やがてその煙は邪神と呼ぶにふさわしいおぞましい顔の形を作った。
「アベルの末裔、逢えて光栄だ」
「キサマ何者だ！」
ランバードは身を乗り出し大声を出した。バーンズはただならぬ邪気を感じランバード王を自分の後ろにすぐさま押し込んだ。
「ランバード王、こやつ並みのモンスターなど足元にも及ばない邪気の持ち主、お気を付け下さい」
「当たり前だ。我が名は大魔王カオスなり」
「まさか……！」
ランバードは自分の耳を疑った。そしてこの名前を聞いた数名の兵士が恐怖のあまり我を忘れて発狂しながら、走り出した。
「うるさい！」

カオスの重い声がするとともに発狂した兵士の身体は黒い炎に包まれていた火に包まれた兵士は
「ははは、あはははは……」
と笑い狂気の顔をしたまま死んで逝った。
「許さん！」
ランバードはカオスに向かって斬りかかった。
「ランバード王助太刀します！」
ここにいた全ての者がランバードの後に続いた。しかし、結果は悲惨なものであった。兵士たちは黒い炎に焼かれ次々に死んでいった。
剣を地面に付き、顔を曇らせながらも鋭い眼光で大魔王カオスを睨みつけるランバードは、そのまま目線を外さずにバーンズに声をかけた。
「バーンズ無事か？」
「はい、何とか……」
「どうやら私たち二人だけになってしまったようだ」
さっきまで１００名ほどいた兵士もたった数秒いや一瞬の間に皆殺されてしまった。
邪悪な笑みを浮かべる大魔王カオスは突然取引を持ちかけてきた。
「大魔王カオスに刃向かうなど無謀だ、我と取引をせぬか？」
「取引だと？」
「ランバード王、耳を傾けてはなりません」
「わかっている！」
「まぁ、そんなことを言うな。我は我が肉体を取り戻すためこの世界に再び舞い降りた。鍵はどこだ？　渡せば命を助けてやっても良いぞ」
「鍵など知らん」
「惚けても無駄だ、鍵はランバード王家の王が代々守ると聞いているが？」
「鍵を探すなら私を倒してからだぁーーーっ！！」
ランバード王は魔王に再び斬りかかった。

「ランバード王！！」
バーンズの静止にも耳を傾けずランバードは大剣を振りかざした。
大魔王カオスはそんなランバードのことをせせら笑った。
「ハハハ、ならば死ぬが良い」
カオスの顔を模っていた煙はたちまちカオスの手の形に変わりランバードを八つ裂きにしようとした。
「くっ……駄目か」
ランバードが死の覚悟をした瞬間、彼はバーンズに突き飛ばされた。それによってランバードは一命を取り留めたのだがバーンズの身体は八つ裂きにされ、ランバードが駆け寄った時には血だらけでもう息をしていなかった。
「よくも……よくも、バーンズ……くそぉーーーっ！！！」
ランバードはバーンズを抱きかかえ歯を食いしばった。
「鍵のありかを話す気になったか？」
「キサマに鍵は渡さん、鍵を渡せば多くの命が奪われる」
「そうか仕方ない。では……死ねぇー！」
狂気の相をしたカオスの顔がランバードに襲い掛かる。
「死ぬのはキサマだ……」
ランバードはバーンズをゆっくりと地面に下ろし、カオスを睨み付けた。
そして、大剣を構えると全エネルギーを大剣に集中させた。すると、ランバードの身体は黄金のオーラに包まれ、剣もまた黄金の輝きを放っていた。その光によってカオスは一瞬怯んだ。
「まさか、まさかその輝きは！？　アベル！！」
「滅びよカオス！！」
ランバードの剣はカオスを捕らえた。
「我は煙なり、剣ごときで……何！？」
剣から放たれる黄金の光によってカオスの顔を形作っていた赤黒い煙が徐々に消滅していく。
「ぎゃぁぁぁーーーっ！！！」

煙はカオスの断末魔の悲鳴と共に完全に消えた。
「終わったのか？」
「少し油断したが次は本気でいく」
ランバードは星の船の方を振り向いた。何とそこにはあの煙が！
「ふははは、あの程度の攻撃で死んだとでも思ったか？」
煙は星の船から止まることなく大量に出てきた。そしてついに全ての煙が出きったときその煙が形作ったモノは？
「……これが大魔王カオス」
大魔王カオスの全身は余りにも巨大なものであった。その全長は約４０ｍほどでこの大きさはキングドラゴンに匹敵する大きさだ。
「鍵はどこだ……と言いたいところだがどうやらお前は持っていないらしい」
「何故わかる？」
ランバードは首をめいいっぱい上に曲げてカオスに問いただした。
「おまえからはあの忌々しい箱の波動は感じられん、戦ってよくわかった。おまえが持っていないということは城だな」
「知らん」
「まぁ良いおまえを八つ裂きにしたあとにゆっくりと探させてもらうとしよう」
カオスの鋭い爪がまるで生きているかのように伸び、ランバードに襲い掛かる。ランバードは剣で応戦するが計８本の爪相手ではさすがのランバードでも苦戦を強いられる。
「我は遊んでいるにすぎんぞ」
「じゃあこっちも遊びだ」
「そんな強がりをどのくらい言っていられるか」
「キサマを殺すまでだ！」
カオスの爪は容赦なく襲い掛かる、蛇のようにくねくねと曲がりながら四方八方から攻撃をしてくる。
　ランバードの身体は徐々に傷つけられていき、着ている甲冑などとうの昔に砕かれ、今では着ている服が血で真っ赤に染まっている

そんなランバードを見ながらカオスは不敵な笑みを浮かべまるで楽しんでいるとしか思えない。
ランバードの身体は突き刺され、足を突き刺され、腕を突き刺され、腹を突き刺され、
「これで終わりだ……」
カオスに低い声とともにランバードの胸に鋭い爪が突き刺さった。
「ぐふっ……げほっ」
ランバードの口から大量の血が大地に零れた。瞳は虚ろでもう人形のようになってしまった。
肩の力、全身の力が抜け人形の瞳から涙が、涙が零れ落ちた。
「……セリス」
爪が身体から抜かれ、彼の身体はまるで糸の切れた操り人形のように地面に崩れ落ちた。しかし、彼は剣を決して手放そうとはしなかった、英雄アベルの血を引く者の誇りとして――。

ランバード落城

パリンという音とともに王妃セリスの愛用に鏡が割れた――。
「不吉だわ……鏡が自然に割れるなんて」
バタンというドアの開く音がしたと思って振り向いた瞬間、そのドアから赤い鎧を着た騎士風の若い男性が凄い勢いと血相で王妃の部屋に入って来た。
「王妃様大変です、敵襲です！！」
「何ですって！？」
それを聞いた王妃は急いで窓に駆け寄り外を見た。
　すると遠く離れた城の城下町が燃えているではないか、それも今まで見たことのない凄まじい邪気を放つ黒い炎で……。
「……はっ！？」
悲惨な光景を目の当たりにした王妃は思わず口を押えた。
「バロン、どういうことなのこれは！？」
「詳しくはわかりませんが、もう既に東地区は全焼、中央地区は半分が火の海に包まれて……くっ」
バロンはくやしさのあまり口を噛み締め下を向いた。
「国民はどうなの、みんな無事なの？」
「わかりません、城下町との通信が途絶えてしまって……。城に残っているほとんどの兵士は皆、町に出兵しましたが……やはり連絡が」
「こんなときにあの人がいてくれたら……」
王妃は未だ帰らぬ夫［ヒト］のことを思った。
　「モンスターだ、モンスターが城の中に攻めて来たぞ！」
廊下の向こうから男の大声が聞こえた。
「王妃様、早く逃げましょう」
「駄目です。私だけ逃げるなど」
「私に与えられた使命は王妃様をお守りすることです」

「でも……」
「さぁ、早く！」
「私はここに残ります」
セリス王妃はゆりかごに寝かせてあるエノクを抱きかかえるとバロンに差し出した。
「この子を連れて逃げて下さい」
「しかし……」
「この子は英雄アベルの血を引く、大事な子です」
その時突然、
「ぎゃーーーっ！！」
と、すぐ外の廊下から男の奇声が部屋まで鳴り響いた。
「部屋の見張りがやられたか？」
バロンは剣をぎゅっと握り締め、王妃はエノクをゆりかごに戻しすぐさま隠した。
「はいはい、この部屋からは誰も出させませんよ」
こう言いながら一人の男が王妃の部屋に入って来た。
「誰だキサマは！」
「ボクですか、ボクは魅惑の悪魔ジャッジメントですよ」
この男の容貌は中性的な美しい顔立ちに薄い青っぽい髪の毛、ここまではいいとして。黒いスーツに黒いズボン、中に着ているワイシャツも黒く絞めているネクタイは赤色で少し緩めてあり、白い手袋をした左手には大鎌を持っていた。この場には不釣合いな格好としか言いようがない。
「悪魔が何のようだ？」
「鍵を探しているんですが……知りませんか？」
こう言って悪魔ジャッジメントはセリス王妃に微笑みかけた。その微笑からは一見無邪気さ感じられるが……セリスにはそれが逆にとても恐ろしい微笑みに見えた。
バロンは剣をいつでも抜けるように構え、相手に敵意を見せ付けた。

「鍵などこの国にはいっぱいあるのでな、わからんなあ」
「ふ～ん、そっちのお美しい方はご存知かな？」
「知りません」
セリスはそう言いながら決して悪魔とは目を合わせないようにしていた。それが悪魔の不信感を仰いだ。
「ほんとうですかぁ～？　じゃあ調べて見ましょう」
ジャッジメントの姿が消えたと思った刹那、彼は王妃の腕を掴み彼女を捕らえベッドの上に軽く腰をかけていた。しかも王妃の首元には大鎌が今か今かと首を切る準備をしている。
「王妃様！！」
バロンは剣をジャッジメントに向け王妃を助けようとして叫んだが、ジャッジメントの持つ大鎌はしっかりと王妃の首元を捕らえている。これでは手が出せない。
「あぁすいませんねぇ～、今日は久しぶりに運動したもので疲れたのでちょっと座らせて頂きました」
「放して下さい！」
王妃は逃げようと掴まれた手を振り払おうとするが、ジャッジメントは鎌をより一層首に近づけ決して逃がそうとはしなかった。
「王妃様を解放しろ！！」
「ちょっと、待ってくれるかな」
そう言ってジャッジメントは王妃の腕を放し、自分のスーツの内ポケットから分厚い本を取り出した。
「ジャ～ン、審判の本！　はい、ここに手を乗せて」
膝に置かれた本の表紙に王妃は無理やり手を乗せられた。
「はい、これでボクの質問が終わるまで身体は動かないよ」
セリスは身体を動かそうとしたがジャッジメントの言うとうり動かない。
「私に何をしたの！？」
「今から質問をしま～す。では一つ目、鍵は何処ですか？」
「知りませ……か、鍵はエノクの下に……ゆりかごの中」

セリスの意思に反して口が勝手に喋りだした。
「王妃様！！」
バロンは王妃が人質に捕られている以上手も足も出せない。
「それでは二つ目、エノクって何？」
「私の……こども」
「これが最後の質問で～す、その子は何処にいるの？」
「バロンの後ろ……」
最後の質問を言い終えた後にすぐセリスの身体は自由になった。
　ジャッジメントは王妃を解放して、ベットから立ち上がるとバロンに近づいた。
「バロンって君でしょ、ちょっとどいてくれるかなぁ」
悪魔が鎌を構えてにっこりと微笑んだ。
「エノク様は私の命に変えても守りぬく」
「ボクに勝てると思っているの？　一様これでも大魔王カオス様に使える四天王のひとりベルフェゴール様の副官なんですけどねぇ」
「今何と言った？　大魔王カオスだと」
「ええ、言いましたけど」
「カオスは時空の彼方に飛ばされた筈じゃないのか？」
「無事戻って来られました。それも今日」
「何！？」
「いやぁ～長かったですよ、ボクらカオス様に仕えていた者たちはカオス様が帰って来られるまでひっそりと千年以上も待ちましたからね」
　赤い騎士バロンは剣をすばやく構え悪魔の腹に突き刺した。
「不意打ちは卑怯ですよぉ」
剣は確かにジャッジメントの身体を貫いている。しかしこの悪魔は平気な顔をして笑っている。しかも剣を片手で掴むと自ら引き抜き投げ飛ばした。剣をしっかりと握りしめていたバロンは剣とともに飛ばされ壁に叩きつけられた。
「バロン！」

セリスの声はバロンの耳に届くことはなかった。
「まったく、マナーがなってないなぁ」
ジャッジメントは自分の手についた自らの血をペロリと舐めると、エノクに向かって歩き出した。
「やめて、そのエノクに近づかないで！」
セリスはジャッジメントに後ろから抱きつき彼を止めようとしたがあえなく壁に叩きつけられた。
「お願い……」
セリスは声を絞り出すがジャッジメントの耳には届かない。
「その子から離れろ！」
部屋に突然男の声が響いた。
「誰だい君は？」
「私はランバード王だ」
「あなた……」
「ランバード国王……まさか、カオス様に殺されたはずじゃ……」
「回復魔法ぐらい使える、キサマの君主は読みが甘いな」
「回復魔法ねぇ、じゃあその身体はどうして治さないのかなぁ」
ジャッジメントの指摘は正しかった、ランバードの身体はおびただしい傷がついており、その傷口からは大量の血が流れ出していた。
「ここに来るまでにだいぶ苦戦してな、もう魔法は使えない」
「やっぱりねぇ……何っ！？」
ジャッチメントの顔が歪んだ。
「ランバード様、王妃様、早くエノク様を連れて逃げて下さい！」
バロンはジャッジメントの不意をついて見事後ろから捕まえたのだ。
「すまん、バロンここは任せた。セリス行くぞ」
「はい！」
セリスはエノクの入ったゆりかごを抱きかかえランバードとともに部屋から駆け出した。
　二人はある場所を目指して走った。その間いくどもなく魔物の襲撃に遭い、ランバードの身体には傷がひとつ、またひとつと刻まれ

ていった。そして、二人の前に強敵が現れた。
「ついに見つけたぞ、アベルの末裔」
「くっ……新手か」
二人の前に現れたのはサムライのような姿をした長身の男性だった。しかし普通のサムライの姿ではなかった、仮面を付けていたのだった。
「私はヤクシャ」
「ヤクシャ！？　……まさかあなたは」
「四天王ヤクシャとは私のこと」
「……！？」
ランバードとセリスは言葉を失った。なぜなら、ヤクシャは伝承では英雄アベルによって倒された筈だからだ。
「驚きの表情を隠せないようだな」
「なぜだ、キサマはアベルに殺されたはず！」
「アベルの血を絶やすため私は何度でも蘇る」
「では、何度でも殺してやろう、セリス下がっていろ」
ランバードは大剣を構えヤクシャの顔の前に突き出した。ヤクシャはすばやく刀を抜きランバードの大剣を弾いた。キンという金属音が決闘の合図となり二人の激しい攻防が始まった。
　ランバードは渾身の力を込め剣を振るうが全てヤクシャに軽々と振り払われる。
「アベルの血はそんなものか！！」
仕方が無い、ランバードはこいつと戦うまでに数多くの死闘を繰り広げて来て、身体はもうボロボロなのだから。
「……くっ、回復呪文さえ使えれば」
ランバードの体力はもうほとんど残っていない、肩が大きく上下に揺れ息が上がり意識が薄れていく。しかし彼はこのときセリスを逃がす為自分の命を投げ出した。
「死ねぇーーーっ！」
ランバードは死を覚悟でヤクシャに一直線に斬り込んだ。

「血迷ったか、我が剣技を知らぬのではなかろう」
ヤクシャのいう剣技とは暗黒剣のことで、暗黒剣とは剣の技の名前であり、その使い手に斬られた傷は治癒不可能と言われている。
　ヤクシャは容赦なくランバードに斬りかかる、ランバードは全てを防御しきれず、その身体は紅く染まっていく。そして、ランバードの剣がヤクシャをついに捕らえた。しかし、ヤクシャの頭上に剣が振り下ろされる、その瞬間剣の動きが止まった。
「ぐはっ……」
ランバードの口から紅い雫が零れ出す。
「さらばだ、アベルの末裔」
ヤクシャの刀はランバードの身体を貫通していた。
「まだだ！！」
ランバードは刀を身体に突き刺したまま、ヤクシャにしがみ付いた。その際、刀がよりいっそうランバードの身体に深く突き刺さったが死を覚悟していた彼には関係のないことだった。
「きさま何を！」
ヤクシャはランバードの不可解な行動に動揺した。それを見たランバードの顔は不適な笑みを浮かべた。
「セリス逃げろ！」
セリスはランバードの決意を感じ何も言わず走り出した。
「そうはさせるか！！」
ヤクシャはセリスを追おうとするが、ランバードがそれを許さない。
「放せ、死に損ないが！」
ランバードは決してヤクシャを放そうとはしなかった。
「ヤクシャ、キサマの負けだ」
「何！？」
ランバードの身体が赤く燃えるような光を発したと思った瞬間、辺りは一瞬にしてまばゆい光に包まれた。
　セリスはエノクの入ったゆりかごを大事に抱えながら、走ってい

ると不意に後ろで爆発音が！！
「何！？」
セリスが後ろを振り返ると来た道が跡形もなく吹き飛んでいた。セリスは何が起きたのかをすぐに察した。彼女はわかっていたランバードが『逃げろ！』と言ったあの時から、彼が今から何をしようとしていたのかが――。彼はきっと禁断の呪文を使ったに違いない、命と引き換えに莫大なエネルギーを放出する呪文を……。
　セリスはそれ以降決して後ろを振り向かず、走り続けた、あの人の死を無駄にしない為にも……。そして、ついに彼女はある場所にたどり着くことができた。
「はぁ…はぁ…」
セリスの体力はとうの昔に尽きていて、彼女をここまで来させたのは精神力だった。
「ここまで来れば……」
セリスのいる場所は城の地下にある隠し部屋で、この部屋には古の時代に使われた瞬間移動装置があった。この装置を使えば城の外に脱出することができる。
　装置は青く輝く水のようなものが張られた小さな池のようなモノで液体のようなモノが小さく渦巻いている。その中に飛び込むことによって決まった出口に瞬間的に移動することができる。
　セリスはゆりかごをぎゅっと強く抱きしめ装置の中に飛び込もうとしたその時、男の声によって呼び止められてしまった。
「やっと見つけましたよ王妃さま」
セリスの振り向いた先にいたのは悪魔ジャッジメントだった。
「……あなたがここにいるということは」
「バロンでしたっけ、剣の腕はなかなかでしたけど、弱っちいことには変わりないね。さぁゆりかごを渡して」
ジャッジメントはセリスの方に手を差し出した。
「あなたの言うことは聞けません」
そう言うと彼女はエノクをゆりかごごと装置の渦の中に放り込んだ。

「……っ悪あがきを」
ジャッジメントはゆりかごを追おうと装置に向かって走り出した。
しかし、それを王妃セリスは両手を広げ阻止しようとした。
「邪魔ですよ」
ジャッジメントは笑みを浮かべ大鎌を振り下ろした。振り下ろされた鎌はセリスの胸を切り裂き鮮血が噴出し、純白のドレスがみるみるうちに赤へと染まっていった。
　ジャッジメントはセリスを突き飛ばすと装置の中に飛び込もうとした……がそのとき、彼の身体を大きく揺れた。
「何だ！？」
建物が揺れている！？　それだけではない、今飛び込もうとした瞬間移動装置の光が失われている。装置が動きを止めた。
「ちょうどいいところに突き飛ばしてくれて感謝します」
「何！？」
ジャッジメントは声がした方を振り向いた、そこにはレバーらしき物を握った王妃セリスの姿が！？
「何をした！」
「装置は停止しました……そしてもうすぐここも」
建物がまた大きく揺れ天井が大きな音とともに地面に崩れ落ちて来た。そして、隠し部屋は轟音を立てて崩壊した。
　この時、ランバードは歴史の中に名を残すのみとなった過去の王国となった。

　エノクは新緑の森の中にいた。
「おぎゃーおぎゃー」
今まで深い眠りについていたエノクが目を覚ます。
　その赤ん坊の声に気づいた、人形タイプの魔法生物の一人がエノクに近づいて来た。
「何でこんなところに赤ん坊が……ん？　まぁ大変、装置が止まってる！！」

魔法生物はゆりかごを抱えてシモンの隠れ里へと走り出していった――。

旅の幕開け

巨大国家ランバード落城の報知は瞬く間に世界中の人々へと広がって行った。
人々は恐怖した。まさかあのランバードが落城するなど夢にも思わなかった。それも一夜にして落城するなど……。
ランバードから命からがら逃げ出した者たちの情報からランバードを襲ったのが大魔王カオスの仕業だということがわかると人々はより一層の恐怖感に苛まれた。まさかあのカオスが……しかし、ランバードが落城した以上、それを信じるしかなった。
そして、また魔王軍による侵略戦争が再び……。

ランバード落城から16年の月日が流れた――。
シモンの隠れ里。ここは七英雄のひとり傀儡子シモンとシモンによって”命を吹き込まれた”魔法生物たちが静かに暮らす隠れ里だ。
「先生ー!、話って何ですか？」
大きな声を出しながら、エノクが書斎に飛び込んで来た。
「読書中ですよ」
薄いグレーの髪を持つシモンは、その透き通るような白い人差し指を口に当てシーっというポーズを取った。
「ごめんなさい先生」
「まぁ、良いとしましょう、呼びつけたのは私ですし」
シモンは本をパンと両手で閉め微笑んだ。
「で、大事な話ってなんですか？」
「まぁ、そこにお掛けなさい」
シモンは眼鏡を外しながら本を持った手で自分の前に置いてある座椅子を指差した。エノクはシモンに進められるままに席についた。
「エノクも今日でちょうど16歳となりました。外に世界では成人と呼ばれる年です」

「はい、知っています」
「それではエノクにこの里を出る許可を与えます」
「えっ！？」
シモンの言葉があまりにも唐突だったため、エノクは目を見開いて聞き返してしまった。
「でも先生……」
「でも何ですか？　これはあなたとの約束の筈ですよ。私がエノクにランバード落城の話、あなたのお父様、お母様の話をしたときに」
「はい、先生にその話を聞いたときにぼくは誓いました。大魔王はぼくが倒すと」
「それで直ぐに旅立とうとしたあなたに私はこう言いましたよね。時が来るのを待ちなさいと」
エノクは小さく頷いた。
「でも、今がその時なんですか？」
「風がそう伝えてくれました」
シモンは軽く微笑み立ち上がるとエノクの頭にゆっくりと手を下ろした。
「本当に大きくなりましたね。この里にあなたが来た日のことは今でも昨日のことのように思い出せます。あれから１６……不死である七英雄の私にはほんのひと時の時間ですがエノクとの思い出は数え切れないほどあります」
シモンは天井を見上げゆっくり目を閉じ、回想に浸った。
「先生、回想に浸らないで下さいよ」
　シモンが回想に浸っていると、部屋に犬のぬいぐるみに命を吹き込まれた魔法生物が慌てた様子で飛び込んで来た。
「シモン大変だよ！　魔物が現われたよ！」
「なんですって！？」
エノクがシモンのことを不安そうな瞳で見つめている。
「先生……」
シモンはすぐさま、部屋に置いてあった木箱を開けるとその中から

オリハルコンの鞭を取り出した。
「魔物が現われた場所は何処ですか？」
シモンは魔法生物に問い掛けると魔法生物は、
「そ、それが里中に……」
と、不安を募らせながら言った。
　それを聞いたシモンの顔は『しっまた』という表情をした。
「……やはりエノクがいつでも旅立てるようにと結界を解いたのまずかったですね」
シモンはそう言うと早足にこの部屋を出て行こうとした。
「先生、ぼくも戦います！」
「私はひとりで大丈夫ですから、エノクはここに残っていなさい」
シモンはエノクに優しく微笑みかけると急いで部屋を後にした。
「先生……」

　里で暴れていた魔物は下級モンスターのゴブリンの群れであった。
　ゴブリンたちは魔法生物たちを次々と襲い食らっている。
　魔法生物たちもゴブリンに負けじと戦っているがこの里にいる魔法生物たちは今まで本物の魔物など見たことの無い平和の中で育っていたモノたちばかりで魔法生物たちの劣勢は明らかであった。
　それを見たシモンはすぐさまオリハルコンの鞭を華麗に振るい、ゴブリンたちを一掃していった。
「……マナの匂いに誘われていたようですね」
　シモンの言うマナの匂いに誘われたとは、ここにいる魔法生物たちはシモンによってマナ（生命の源）を結晶化して大量に注ぎ込まれて生まれたモノたちで、魔物たちはそのマナを好物としているためこの場に引き寄せられたに違いないとシモンは判断したのだ。
　シモンはゴブリンを順調に倒していったのだが、いつしかゴブリンたちに囲まれてしまっていた。
「ここ数百年は戦闘とは無縁だったので腕が鈍りましたかねぇ？」
シモンの顔からは疲労の色が滲み出している。あたりまえだ、なぜ

ならば彼は今までに魔物によって傷つけられた何十人もの魔法生物たちに自らのマナを分け与えその傷を癒してきたのだ。
しかし、彼はやはり伝説の七英雄と語られるだけの実力の持ち主だった。
シモンは鞭を構えると大声で叫んだ。
「肉弾戦はザッハの十八番でしょ！！」
言葉と同時に鞭を華麗にブン！　と振り回すとシモンを取り囲んでいた魔物たちの身体が横に真っ二つに切断された。
「ふぅ、これで全部ですかね？」
シモンが辺りを見回すと、彼の顔つきが険しい物に変わった。
シモンの目線の先にはゴブリンの生き残りと、そのゴブリンに捕まっているエノクの姿が！
「動クナ！」
発音の悪いゴブリンのこの言葉にシモンは鞭を構えたままの格好で動きを止めた。がその瞳はからは戦意は消えることなく、ゴブリンを睨みつけている。
「先生ごめんなさい、ぼくも戦おうと思って」
「その気持ちはありがたいですけれど」
「黙レ！」
ゴブリンは手に持っている剣をエノクの首元にぐっと近づけた。
「持ッテイル武器ヲ捨テロ！」
シモンは仕方なく持っている武器を思いっきり横に放り投げた。
「これでよろしいですか？」
シモンの浮かべた微笑は何も動じない、普段のやさしい微笑だった。
「ソウダソレデイイ」
そう言ってシモンに武器を捨てさせ用済みと判断したゴブリンがエノクに手をかけようとした刹那、ゴブリンの身体に強烈な痛みが……。
「エノク、早くこっちに来なさい！」
シモンの声にエノクは彼のもとへ走り出した。それを見たゴブリン

はエノクを捕まえようとするが身体が動かない。そしてゴブリンはゆっくりと地面に倒れ込んだ、その身体にはシモンのオリハルコンの鞭が身体を貫いていた！
　傀儡子シモン、彼の特技は物に命を吹き込むこと。そう彼の鞭は生きていたのだ。
「さぁ、こっちにおいで」
シモンが鞭にやさしく声をかけると鞭が空を飛んでシモンの手の中に。
「さぁ、エノク、里のみんなが無事か確かめに行きますよ」
シモンは歩いて行こうとしたが、エノクが後をついてこない。
「どうしたんです？」
シモンは振り返って声をかけたが返事が無い、それどころかエノクはうつむいて顔すらシモンに向けようとしない。
　シモンはエノクに近づきこう言った。
「これから外の世界に旅立とうとする者がなんですか」
「……でも先生」
エノクは顔を上げシモンの瞳をじっと見つめた。
　そんなエノクにやさしく微笑みかけるシモン。
「あなたは七英雄のひとりアベルの末裔です、そしてあなたの両親は大魔王カオスによって殺されました。しかし、だからと言ってあなたが外の世界に旅立って行き大魔王カオスを倒す必要はありません。あなたが嫌ならばずっとここにいればいいのですから、それはあなたの自由ですよ」
エノクの顔つきが一瞬にして変わった。
「先生、ぼく外の世界に行きます。行って必ず大魔王を倒して見せます！」
「エノクならそう言うと思ってました。それでは里のみんなを見に行きましょうか」
「はい！」
　このあと二人は里中を回って魔法生物たちの安否を確認していっ

た――。

里中の一通り見回った二人は家に戻る事にした。

「さて、それでは家に帰りましょうかね。行きますよエノク」

シモンが少し歩き出したところで、彼の前に突如物陰から何者かが現われシモンの身体を刃物で貫いた。その瞬間その場にいた全ての魔法生物、そして、エノクは凍りついたようになってしまった。

「先生！」

エノクの叫び声も虚しくシモンの身体は地面にゆっくりと倒れた、その後ろに血の付いた剣を下卑た顔で立っていたのはゴブリンだった。

エノクは無我夢中でゴブリンに殴りかかろうとしたがシモンにそれを止められた。

「エノク止まりなさい、私なら大丈夫ですから」

「黙ッテロ！」

ゴブリンはシモンを黙らせるために彼の血の滲み出している腹をかかとで蹴りつけた。

シモンの顔が苦痛で歪む。

「仲間達ノ味ワッタ痛ミハコンナモンジャネェ！」

ゴブリンはそう言いながら、シモンの身体を何度も何度も蹴り飛ばした。

「止めろ！　先生を蹴るな！」

「何ダクソガキ俺ニ立テ付ク気カ！」

ゴブリンは顔を上げてエノクを睨みつけてやろうとしたが、その考えは一気に失せゴブリンの顔は見る見るうちに蒼ざめていった。

エノクは身体から黄金のまばゆい光を放ちながらゴブリンにゆっくりと近づいて行く。その瞳は獲物を狙う野獣の目そのものだった。

「近ヅクナ！」

ゴブリンはエノクに恐怖を覚え後づ去って行く。

エノクは獲物をジリジリと追い詰めて行く。

「ク、来ルナ！」
ゴブリンは恐怖のあまり足元が覚束なくなり地面に足を取られて転倒してしまった。
　エノクは転倒したゴブリンに容赦なく何度も何度も殴りかかった。
「エノク止めなさい！（アベルの血が制御出来ていない）」
シモンの声もエノクには届かない。
　エノクに殴られたゴブリンの顔は見る影もない、しかしそれでもエノクは殴り続けた。
「……エノク止めなさい」
エノクの身体をシモンが後ろから強く抱きしめた。
「もう死んでいます」
その言葉にエノクは我に返って辺りを見回すと、魔法生物達がエノクのことを恐怖の眼差しで見ている。
「先生ぼくは……」
エノクの瞳は涙で滲んでいた。
「あなたは私を守ろうとしただけですか…ら……」
エノクは自分を抱きしめていた腕から力が抜けていくのを感じた。
「先生！？」
人が倒れる音を聞いてエノクはすぐに後ろを振り返った。するとそこには顔を真っ青にして倒れているシモンの姿が！
「先生大丈夫ですか！」
　エノクは魔法生物たちに手伝ってもらって急いで自宅のベッドまでシモンを運んだ……。

　シモンはベッドの上に寝かされ、その近くにはエノクが心配そうな眼差しで彼を見ている。
「何ですか、そんな目で見ないで下さい。何だか私が死んでしまうみたいじゃないですか。これでも一様七英雄の片割れなんですから」
「でも先生、七英雄は歳と取らないだけで、死ぬ事だってあるんでしょ」

「こんな傷は今までの戦いで何度も負わされてきましたから」
「でも……」
シモンは当然ベッドから飛び起きてこう言った。
「ほら、もうこんなに元気に！」
「先生顔が苦しそうです」
シモンはエノクの顔をガシッと掴み熱いまなざしでエノクの瞳を見つめた。
「エノク、あなたはこれから大魔王を倒しに行くんでしょう。外の世界には辛いことや苦しいことがいっぱいあるんですよ」
「こんな身体の先生を残していけません」
「だったらここに残りなさい。でもあなたの決意はその程度のものだっだんですか？」
エノクは首を横に振った。
「なら、今すぐにでも旅立ちなさい。外の人々は今もなお大魔王に苦しめられています」
シモンはしゃがみ込みベッドの下に手を伸ばし、ベッドの下から剣と何かの入った布袋を取り出した。
「何ですかそれは？」
エノクは布袋が気になりそっちの方を指差した。
「この中には宝石が入っています。外の世界ではお金というものがあるのを昔話しましたよね」
「はい、物買ったりするときに使うんですよね」
「そうです。エノクが外の世界に行ったときにお金がなければ困るでしょう。だからこの宝石を外の世界に行ったらお金に変えて使ってください、いいですね」
「はい、わかりました」
シモンは剣と布袋をエノクに手渡した。
「ありがとうございます」
エノクは笑顔を浮かべながら深く頭を下げた。
「それでは里のみんなに挨拶をしてきなさい、私は里の出口で待っ

ていますから」
「はい、わかりました」
そう言ってエノクは部屋を飛び出して行った。

エノクは里のみんなに挨拶を済ませ里の出口へと急いだ。
「はぁ…はぁ…」
エノクは肩で息を切らせながらシモンの前に現われた。
「先生……お待たせしました」
「ちゃんとみんなに挨拶をしてきましたか？」
「はい」
「この里に思い残すことはもうありませんか？」
「大丈夫です」
シモンは微笑を浮かべて、小さく頷いた。
「エノクが外に出たらすぐに結界を張ります。それが意味することがわかりますね？」
「外に行ってもみんなのことは忘れません」
そう言うエノクの目は少し潤んでいた。そんなエノクを優しい瞳でシモンは見続けている。
「外の世界に行ったら、七英雄を探しなさい。彼らはきっとエノクの力になってくれます」
「何処にいるんですか？」
「エノクが思うままに行きなさい、そうすればきっと出会えますから。そうだ七英雄のひとり竜王ザッハに会ったら、よろしく言っておいて下さい」
「はい、わかりました。先生、ありがとうございました！」
エノクは満面の笑みを浮かべ、そして外の世界へ走り出した。
「こちらこそありがとうエノク……」
エノクは外の世界へ、冒険の始まりの第一歩を踏み出した。

新緑の森にそよ風が吹き込みエノクの髪をふわっと巻き上げる。

「これが外の世界か……何にも変わらないや」
これが外の世界でのエノクの正直な第一声だった。
エノクは後ろを振り向いたがそこにはもう里の入り口はなかった。
シモンの言ったあの言葉の意味、それは結界を張られた里にはもう二度と入ることができないということ。
「先生、絶対にカオスを倒しますから」
エノクは里があった方向に頭を下げると、向きを１８０度変えて走り出した。
新緑の森に光が差し込み、エノクの身体を優しく照らす、それはまるでエノクの行く末をやさしく見守るようであった――。

旅は道連れ

シモンの隠れ里があった森を抜けると、そこには長くどこまでも続いていそうな街道があった。
この道はこの小島唯一の港町オウミと島の中央に位置するラレイス村を行き来きするメインロードである。そして、島自体が小さいため整備された道はこれだけといってもいい。
エノクは街道に出ると、何となく道に沿って歩き始めた。エノクの行き先は特に決まっていない。
シモンには『外の世界に行ったら、七英雄を探しなさい』と言われただけで他に何をしていいのか、何処に行ったらいいのかまでは聞かされていない。
シモンはこうも言っていた。『エノクが思うままに行きなさい、そうすればきっと出会えますから』。だから、エノクは何となく歩き出した。
「港に行こうと思ったんだけど、こっちでいいのかなぁ？」
エノクはこの島について、この世界についてのことを少しではあるがシモンから聞いている。だが、『百聞は一見しかず』、実際に外の世界に出てみたら右も左もわからない。それに彼は今この世界で頼れる人がひとりも居ない、しかし今の彼には外の世界への不安よりも、期待の方が大きかった。
エノクは空を見上げた。何処までも続く青の世界を鳥達が泳いでいる。
「（これから、ぼくはどうなるんだろう？）」
などと考えていると、エノクの肩を『よっ！』と言いながら誰かが叩いた。
エノクが肩越しに後ろを見るとそこにはひょろっとした感じの男がエノクの肩に手をかけながらにやけた顔をして立っていた。
「どうしたんだ、あんちゃん空なんて見て？」

エノクは少し困惑してしている、なぜならばエノクはシモン以外の人間に会うのはこれが初めで、その初めての出会いがこんな形で訪れるなんて不意打ちだった。
　男はエノクの腰に掛けてある剣を見てこう言った。
「あんた、旅の剣士さんか何かか？　……でもそれにしちゃあ、締りががないなぁ」
「あの、さっき旅に出たばかりで……」
「じゃあ、ラレイスの出身か？」
「あの、それが森の……方から」
隠れ里のことは言ってはいけないとシモンから言われているので変な返事を返してしまった。
「森？　……狩人か何かか？」
「そ、そんなとこです」
エノクは初めてシモン以外の人間と話すとあってだいぶ緊張してしまっているようだ。
「おお、そうだった自己紹介がまだだったな、俺の名前はゴメインって言うんだ、あんちゃんは？」
「エノクっていいます」
「よろしくな」
男は無理やりエノクの手を掴みぎゅっと力を入れて握手をした。
「そう言やぁあ、あんちゃんはこれから何処に行くんだい？」
「港に行こうと思ったんですけど、どこだかわからなくて」
「そいつぁー奇遇だな、俺も今から港に行くとこなんだ。旅は道連れって言葉知ってるか？」
エノクは首を傾げた。
「旅って言うのは一人より二人の方がいいってことよ！」
そう言ってゴメインはエノクの肩にぐるっと手を回すと、エノクを押しながら無理やり歩き始めた。
　こうして二人は港町までの道のりを同行することになった。
　このゴメインという男は世界中をフラフラと旅をしながら、行く

先々で色々な職業に付き路銀を集めて旅を続けてるらしい。この島に来たのは、この島の特産物であるソーマと呼ばれる気力と体力を高める植物を目当てに来たらしいのだが、その植物を無断で取ることは硬く禁じられていた為に仕方なく他の大陸に行こうと港に向かっていた所でエノクを見かけて声を掛けてみたとのことらしい。

1時間も歩くと、二人の目の前に港町オウミの入り口が見えてきた。

町の中に入った途端にエノクは驚きの連続で目が回りそうになった。床に敷き詰められている石畳に感激し、建物の多さにビックリさせられ、初めて嗅ぐ海の潮風の匂い、そして一番エノクを驚かせたのは青く輝く広大な海だった。

エノクは目を輝かせ指を海に向かって指しながら、ゴメインに聞いてみた。

「あれが海ですか？」

「なんだ？　海も見たことねぇのか」

「ずっと、森の中で育ったから」

「ホント田舎もんなんだなぁ、がははは……」

ゴメインは大笑いしてエノクの背中をバシッと叩き、その反動でエノクの身体は前にバランスを崩して倒れそうになった。

「さてなぁー、日も落ち始めたこったし、今日は宿でも取って休むとするか。おい金はどんくらい持ってんだ？」

エノクは腰に下げてある布袋を手に取り中身をゴメインに見せた。

「こりゃーすげーな！」

袋の中にはダイアやルビー、ミスリルやオリハルコンまで、在りとあらゆる宝石や貴金属が入っていた。

「お金は持ってませんが、これでもだいじょぶですか？」

「何言ってんだ、これがどの位価値のあるもんなのか知らねぇのか。まぁいい、宿探して来てやるからそれ渡してここで待ってな」

ゴメインはエノクから半ば強引に布袋を取り上げると、さっさとどこかに行ってしまった。

残されたエノクは海を見つめながらゴメインの帰りを待っていた。しかし、彼は一向に戻っては来なかった。
「遅いなぁ……ゴメインさん」
それから1時間ほど時間が経ったころ、海の上に1艘の船が現われた。
「あっ、あれが船なんだ」
エノクの目がまた輝き始めた。がそれも一瞬、エノクの目線はある一点に集中され、彼の顔は疑問の表情へと変わって行った。
そして、エノクは大声で船に向かって叫んだ。
「ゴメインさん、何やってるんですか！！」
そう、船の上にいたのはあのゴメインだったのだ。しかし、なぜ彼は船の上にいるんだろう、エノクはさっぱりわからなかった。
「すまねぇな、あんちゃん。この宝石は貰っていくぜ！！」
エノクにはまだこの状況がわからないらしい、エノクはきょとんとした表情でただ海に浮かぶ船を見つめている。
「どこ行くんですか！！」
しかし、もうエノクの声は船には届かなかった。
エノクは地面を蹴り、船を追いかけようと海の中に飛び込んだ。しかし、海も見たことのないエノクは『泳ぐ』という動作そのものも知らなかった。
エノクは必死に手足をバタつかせたが、彼の身体は海の中に沈んで行き、息が苦しくなって、そしてエノクは意識を失った――。

海で溺れたはずのエノクは砂浜の上で倒れていた。そんな彼に一匹ののら犬が近づいて来て、彼の顔をぺろりと舐めた。
「う、ううん……」
エノクがゆっくりと目を開けるとそこには犬の顔があり思わず声を上げてしまった。
「わぁっ！！」
犬はその声に驚き、急いで走って行ってしまった。

「（脅かすつもりはなかったんだけど……）」
エノクは身体をゆっくりと持ち上げ立ち上がり空を見上げた。
辺りは暗闇に包まれ、夜空には星がキラキラと瞬いている。
「ちょっと身体がべた付くな……」
エノクの身体全身は塩でべた付き、砂がベットリとこびり付いていた。
「（お風呂に入りたい……）」
そんなことを思ったけれど、外にお風呂なんてないし、宝石も持っていかれてしまった、頼れる人もいない、エノクは困り果てた。
取り合えず、寝るところだけは確保しなくてはいけない。夜の港町には冷たい風が吹き荒れる。
エノクは寝床を探し町並みを歩き回っていると偶然井戸を見つけることができた。エノクは井戸で全身の塩や砂を落とそうと、井戸に駆け寄った。
井戸に近づくと、そこにはすでに井戸を使って体を洗い流している人がいた。そしてその青年と目が会った時、その人物の方からエノクに声を掛けて来た。
「あっ……さっきの少年！？」
エノクの頭は混乱した。『さっきの少年』……？　明らかに自分のことを言っているのはわかるけれど、こんな人会ったことない、エノクはそう思った。
エノクの前に立っている人物は服を摘みながらこう言った。
「君何かを助けたから、ほら見てよ、服はベタベタ、髪はバリバリ、財布は海の中に落とすし、人助けなんてするもんじゃないね」
エノクはこの言葉を聞いてすぐに思った。
「もしかして、ぼくを助けてくれたのはあなたですか！？」
「助けたくて助けた訳じゃないさ、たまたま海岸沿いを歩いてたら君が海で溺れてるのを見てさ、気付いたら自分も海の中に飛び込んでた。それだけのことだよ」
「ありがとうございます！」

偶然の出会いだった。
　エノクはうれしさのあまり彼の手を取りぎゅっと両手で握って、ぶんぶん上下に振った。
　うれしさで顔に笑顔を浮かべるエノクに対して、感謝をされてる当の本人の顔は浮かない顔をしていた。エノクは不思議の思いその人の顔を見つめた。
「感謝してくれるのはいいけど、手洗ったばっかりなんだよね……」
エノクはその時初めて気が付いた、自分の手が砂と塩でものすごく汚れていたことを……。
「ごめんなさい！！」
「まぁいいさ、ほら君も身体の汚れを落とすといいよ」
そう言って青年はバケツの中に入った水をエノクの頭からバシャンとぶっかけた。
「冷たい！」
「少しぐらい我慢したまえ」
　二人は身体の砂と塩を綺麗さっぱり洗い流したものの、服のまま水浴びをしたため全身びしょ濡れで寒さが二人を襲った。
「寒いけど、財布は君を助ける時に落としちゃって宿に泊まるお金もないよ」
と言って彼はエノクの方を見た。
「ぼくは持ってた宝石を全部騙し取られたみたいで……」
青年はエノクの顔を見つめて、
「君ならありえるね」
と言った。
　青年は少し考えて、
「仕様が無いから今日は二人で野宿でもしようかな。私の名前はアイオン、これでも一様吟遊詩人で世界中を旅して回ってるんだよ、そういうことでよろしく」
「ぼくの名前はエノク・ランバード、大魔王を倒す為に旅に出ました」

この言葉を聞いたアイオンは思わず笑ってしまった。
「君が大魔王を……まさか、本気で言ってるのかい？」
「本気です！！」
エノクの顔を見たアイオンは笑うのを止めた。エノクの瞳は真剣そのものだったからだ。
「でもなぁ……君って旅の初心者みたいで頼りがいが無くて、いかにも弱そうだけどな」
これはアイオンの正直な感想だった。
「旅を始めてまだ1日も経ってないけど、ぼくは強くなって絶対大魔王を倒してみせます！！」
「よし、じゃあ私も大魔王を倒すの手伝うよ」
「えっ！？」
「別に冗談じゃないよ、なんだか君のことが気に入っただけさ」
「でも……」
「君よりは断然旅なれていて、お役に立てると思うけどな。おぉそうだ、そんなことより野宿の場所探さなきゃね」
アイオンはさっさと歩き始めて、後ろを振り返り、
「早くしないと置いてくよ」
と言った。
「あ、はい」
エノクは別にここに残ってもいいとも思ったが、なぜだかアイオンに付いて行くべきだとそう直感が告げていた。
二人は程なくして今は使われていない倉庫らしきものを見つけた。
アイオンが倉庫の扉を開け中を見回していると後ろからエノクが声を掛けて来た。
「あの、ここで寝るんですか？」
「使われてないみたいだからいいんじゃないかな」
アイオンの答えは適当だった。
「でも、ここの持ち主とかが怒るんじゃ……？」
「気にしない、気にしない」

そう言ってアイオンは中にさっさと入って行ってしまった。エノクもそれに続いて中に入る。
中は薄暗く床がはっきりと見えないため二人は慎重に歩く。
「こんな所で寝るんですか？」
というエノクの質問からは不安さが伺えたのだが、アイオンは、
「私は真っ暗じゃにと眠れないから、これでいいけど」
と言って、その言葉からは不安の欠片も感じさせなかった。がしかし、次の瞬間アイオンの身体はゾクゾクと震えて顔は真っ青に変わった。
アイオンの様子が少し変だと思ったエノクはどうしたのかと聞こうと思ったが、そんなことをしなくても”理由”は向こうの方からやって来た。
青白く光る炎のようなものがこちらに向かって近づいて来る。
アイオンは思わずエノクに聞いた。
「見えるよねアレ？」
「……うん」
エノクは小さく頷いた。
青白い炎の中に微かだが女性の姿がゆらゆらと揺らめいている。
そして、青白い炎は二人の目の前で止まり、中にいる半透明なで憂鬱そうな顔をした女性がこう言った。
「……こんばんわ」
アイオンはこの時心の中でこう思った。
「（だから、使われてなかったのか）」
アイオンの表情は硬く強張っている、がエノクは平気そうな表情で女性に声を掛けた。
「こんばんわ」
その言葉を聞いた女性はエノクに微笑みかけえた。
「あなた、好い人ね。だったら尚更早くここから出て行って頂戴、そうしないと……」
「「そうしないと？」」

エノクとアイオンが声を揃えたと同時に倉庫の扉が大きな音を立てて閉まり、倉庫の中に気温が一気に下がったような気がする。
女性の顔が見る見るうちに暗く憂鬱な表情を浮かべた。
「あの人が目を覚ましたみたいだわ……」
エノクとアイオンは背中に冷たいものを感じて身震いをした。
「……嫌な予感がする」
とアイオンは呟き直ぐ続けて、
「出口まで走るよ」
とエノクに言って猛ダッシュで出口まで走った。
エノクはアイオンの言われるままに彼に続いて走り出したが、エノクの目の前で信じられない光景が起こった。
アイオンが外に出ようと倉庫の扉に近づいた刹那、静電気のような火柱がたち彼の身体が５ｍ後方に弾き飛ばされたのだ。
「だいじょうぶ！？」
エノクは声を掛けたが何が起こったのかは皆目検討も付かない。
エノクは直ぐにアイオンに駆け寄り声を掛けた。
「だ、だいじょうぶ？　いったい何が起きたの？」
「バリアかなんかじゃないの……でも問題はそのバリアを張った目的と人物だけど……？」
「結界を張ったのはこの私だ！」
どこからともなく聞こえて来た男の声と共に辺りは青白い光に包まれ倉庫中を照らし、暗闇だった所から人間の姿が、いや違う人間では無いらしい。
アイオンは小さく呟いた。
「こちらさんもゴーストかぁ」
その言葉には少しため息が混じっていた……。

アイオンはため息を付きながら、男のゴーストに向かってこう言った。
「私たちはなんでここに閉じ込められたんでしょうか？」
男のゴーストの姿が半透明から不透明に変わった。そして、男のゴーストはアイオンの質問を無視して行き成りアイオンに襲い掛かって来た。高位のゴーストは物体化をして、物に直接触れることができるのだ。
男ゴーストの爪がアイオンを切り裂こうとする。しかし、アイオンはそれを水面を移動する木の葉ように流れる動きで避けた。
男ゴーストはもう片方の腕を振り上げ再びアイオンに攻撃を仕掛けようとした。だが、その時、それを見ていた女性のゴーストが二人の間に入って、男ゴーストの攻撃を静止させた。
「もうやめて！！」
男ゴーストの動きが止まった。そして、女性のゴーストを睨みつけた。
「なぜ止める？」
「生きた者のマナを頂くのはもうたくさんです！」
マナとはこの世界の全てのモノに宿るエネルギー源である。
アイオンとエノクは二人が話している隙に外に出ようとしたが建物全体に結界が張られており外に出ることができない。
アイオンは仕方なく、といった表情を浮かべ軽く屈伸運動をすると二人のゴーストの前に行き、男のゴーストに指をバシッと突き付けこう言った。
「話はだいたいわかったよ、要するに君らは生きた者のマナを食う事によって力を蓄えて何かをしようとしているわけだね。そして、こちらの女性はもうマナ食いをするのはイヤだとそういうわけだね、うん納得だね。しかしだよ、私たちは死ぬ気なんてないし、今日は

疲れたから、さっさと寝て明日に備えたい。という訳でこの倉庫で休ませてもらうよ、邪魔をしたらそのときは容赦しないからね、それだけは覚えておいて、いいね？」
アイオンが言いたいことを言い終わると周りの者たちは呆然としてしまった。
「エノク、明日は早いからもう寝よう」
そう言ったアイオンは壁にもたれながら座り込み、片膝を立て腕組みをすると、すやすやという寝息を立てて眠りに付いてしまった。
男のゴーストこれは絶好のチャンスだとアイオンに凄い勢いで襲い掛かった。それに気付いたアイオンは素早く腰に掛けてあるハープを手に取り、しなやかな指先で弦を軽く弾いた。
その音が辺りに響いた瞬間、男ゴーストの動きが止まった。それも不自然な――少し前までの動きそのままの格好で止まってしまっている。それはまるで金縛りのようなものにでもかかってしまったかのように――。
「邪魔したら容赦しないって言ったじゃない」
いかにもうんざりそうにアイオンはそう言うと、ゆっくりと立ち上がり、ハープの音色に言葉を乗せた。
「真の言霊は悪しき存在を貫かん」
その言葉を聴いた男ゴーストは眩い、そして神々しい光に包まれ、天に向かって一筋に伸びる光の柱に乗って空へと昇って逝った。
アイオンは指を組みお祈りのポーズをして、右手の人差し指にしている指輪に付いている宝石に軽くキスをした。
「天国に逝けるといいね」
エノクは今自分の前で起きた一瞬に通り過ぎた出来事に呆気に取られてしまった。
「何が起きたの？」
口をあんぐりと開けてしまっているエノクのことなどお構いなしで、アイオンはまた眠ろうとしている。
女性のゴーストの姿はいつの間にか消えてしまっていた、男のゴ

ーストと一緒に天に昇ってしまったのだろうか？
謎は幾つか残り、その謎の答えを知るものはもうここにはいない。謎は謎のまま、謎は必ず解けるとは限らない。それが現実というものであった。

夜を司る神は仕事を終え、朝がやって来た。
エノクが目を覚ました時にはすでにアイオンは目覚めており、ハープを磨いている最中だった。
エノクはアイオンに聞きたいことがたくさんある、昨晩はアイオンがさっさと眠ってしまった為に何も聞けなかった。だから今日は色々と聞きたい。しかし、エノクが昨日目撃したアイオンの術？のことなどを聞こうとすると、『これから一緒の旅するんだから、そのうちわかるさ』と言って何も教えてくれなかった。
エノクは吟遊詩人についての話を聞いたり、本を読んだことがある。しかし、あんな事が出来るなんて知らなかった。いや、普通の吟遊詩人のはあんな事出来ないのかもしれない、アイオンが特別なのに違いない。……疑問が多く残る。
アイオンは両手をめいいっぱい上に伸ばし身体を伸ばして大きな欠伸をすると、
「そろそろ、やろうか？」
と言った。
エノクは一瞬考え込んでしまった。
「『やろうか？』って何を？」
「私達はお金を持っていないんだよ、これじゃあ船にも乗れないよ。そういうときはどうするか？」
「どうするの？」
「働いてお金を稼ぐに決まってるじゃない」
エノクはなるほどと思ったが、お金なんて稼いだことなんてないし、お金というもの自体もまだこの目で見たことが無い。そんなエノクに対して、アイオンは彼の背中を軽く叩いて、

「だいじょぶさ、君でもできるから」
と笑いながら言った。

数分後二人は町の中央に位置する、噴水のある広場にいた。そこでエノクは『変な』きぐるみを着せられ、『変な』踊りを踊らされていた。

踊りを踊っているのはエノクの意志ではない、アイオンのハープの音色を聴くと勝手に身体が動いてしまうのだ。

人々が徐々に集まって来て、エノクの『変な』格好と『変な』踊りを見て笑っている。しかもアイオンの奏でる曲もまぬけな『変な』曲だった。

エノクは思った。

「（……先生、ぼくはいったい何をしてるのでしょうか？）」

そんなことを考えていたら、いつの間にか演奏は終わっていて、身体の自由が利くようになっていた。

ショータイムは終わったらしい、しかし、エノクの心には恥ずかしさが残った。

アイオンはエノクの肩を叩き、

「ご苦労さん」

と言ったが、エノクの気持ちは晴れない。そしてエノクはアイオンに聞いた。

「他にお金を稼ぐ方法はなかったの？」

「いつもは、美しいハープ演奏でお金を貰ってるんだけどさ、こういうのやってみたかったんだよねぇ～」

エノクの表情が一瞬にして険しくなった。

エノクはアイオンとの出会いに運命的なものを感じた。しかし、それは間違えだったのではないだろうか？

アイオンは稼いだお金を数えて、

「乗船代と宿代は稼げたかな」

と言って満足げな表情をしている。

エノクは世界のことを知らない、一般的なことも話や本で読んだだけでよくは知らない。今この世界で頼れるのはアイオンだけだった。多少のことは仕方無い、そう思ってエノクはこれからもアイオンと一緒に旅をしようと心に誓った。
アイオンは空を見上げて、風に身を任せた。
「いい天気だねぇ、いい航海になりますように」
そう言ってアイオンは指輪にキスをすると、エノクに声をかけた。
「それじゃあ、行こうか？」
エノクは頷き、二人は港へと向かった。

港に着いたアイオンは船乗りと乗船代の交渉中だった。
「じゃあ半額で」
「バカ言っちゃいけねぇよ兄ちゃん」
「じゃあ1／4で」
「さっきより下がってんじゃねぇか」
「じゃあ1／8で」
アイオンの提示する値段は提示するたびに下がっていた。そして、船乗りはこんなアイオンを見かねてついには笑い出してしまった。
「わかった、じゃあ俺と勝負して勝ったら、一人分タダにしてやろう、ただし俺が勝ったら料金2倍だいいな」
「いいよ」
アイオンは直ぐにその条件を飲んだ。
勝負の方法は至って簡単、コインの裏表を当てた方が勝ちというもの。
「よし、じゃあ兄ちゃんに先に選ばしてやるよ」
「それはどーも。じゃあね、『表』」
「よし、じゃあ俺は裏だな」
エノクは心配そうな顔をしてアイオンを見つめた、するとアイオンは微笑を浮かべて指輪にキスをした。
船乗りの指がコインを空高く弾き上げた。

エノクはごくんと息を飲み込みコインを目で追う。
コインは回転しながら地面に落ちていく、そのコインを船乗りは手の甲に乗せようと腕を伸ばしたのだが、コインは船乗りの手を滑り抜け地面に向かって落ちて行く。そして、驚くべきことが起こった、地面に落ちたコインは小さな溝にはまり倒れていない、つまり表も裏も示してしないということだ。
船乗りは言葉を失い、時間だけが過ぎて行く。しかしコインは一向に倒れる気配は無い。
エノクとアイオンは顔を見合わせたまましゃべろうとしない。
その時、突然海風が吹き荒れた。そしてコインは溝から外れ倒れた。そして、コインは表を向いて倒れた。
それを見たアイオンは笑みを浮かべた。
「ね、私の言った通りでしょ」
「やったー！」
エノクは思わず、アイオンを抱きしめた。
「は、離してくれるかな、私にはそーゆー趣味はないから」
「『そーゆー趣味』？」
「とにかく離してくれるかな」
エノクは不思議そうな顔をしながら、アイオンの身体から離れた。
船乗りの顔は浮かない、だが賭けの話を最初に持ち出したのは彼だ。
「約束は約束だからな」
そして船乗りは、しぶしぶ一人分の料金で船に乗せてくれた。船乗りは約束したことは必ず守る、それがこの世界の船乗りの暗黙のルールだった。
船と言っても観光船では無いので船自体は小さい、そもそもこの船は本来貨物船で船の中には荷物を積んでいて甲板に数人の旅行者などがちらほらというだけだった。
エノクは船に乗っている人たちを物色した。
船に乗っているのは、商人らしい猫人と剣士らしいたぶん人間と

旅行中だと思われる鳥人の夫婦かな？　それと船乗りが数人だけで乗っている、船に乗っている人数は至って少ない。だが、アイオンに言わせると『他の大きな港から出る船には何十人、何百人の人が乗る船だってあるよ』と教えてくれた。

そんなに人を乗せても船は浮くんだろうかとエノクが考えていると、程なくして、辺りに汽笛の音が鳴り響き船がゆっくりと動き出した。

初めての船旅にエノクは胸をときめかせ、手を大きく広げ風を全身でめいいっぱい感じた。

アイオンはそんなエノクを尻目に壁にもたれかかりながら座り寝ようとした。そんなアイオンを見たエノクは、

「寝ちゃうの？」

と聞いたがアイオンは、

「おやすみ」

と言ってエノクのことなど構おうとはしなかった。

「アイオンには聞きたいことがいっぱいあるのに！」

アイオンは大きな欠伸をしてエノクに聞いた。

「どんなことを？」

「え～と、さっきのコインよく当てたなぁ、とか」

「あぁ、あれね、エノクは『真言』って知ってる？」

「なにそれ？」

「真言っていうのはね、簡単に言っちゃうとモノに何かを信じ込ませる術なんだよね」

「それって、すごい術じゃないの！？」

「でも、信じてもらえなきゃ何にもならないけどね、一種の催眠術なのかな？」

「催眠術？　さっきはコインに催眠術をかけたの？」

エノクはアイオンの話に興味津々でどんどん自分の顔をアイオンの顔に近づけて行く。

「ちょっと顔を離してくれないかな、しゃべりづらいよ」

「あ、ごめん」
エノクは慌てて顔を引っ込めた。
「コインだって生きてるんだよ、この世界にあるものにはマナが必ず宿っている、そのマナに語りかけるんだ」
「先生も同じような事を言ってた」
ふとエノクはシモンの事を思い出した。
シモンは物に命を吹き込むことができる、でも彼曰く、『全てのモノには最初から命があるんです。私はただきっかけを与えたにすぎません』と言っていた。
「なんとなくわかった？」
アイオンはエノクの顔を覗き込んだ。
「あ、うん」
エノクは周りのことなどすっかり忘れてシモンのことを思い出していたらしい。
「じゃあ今度は私からの質問」
「あ、うん、いいよ」
「大魔王を倒すって言ってたけど、これからすぐに倒しに行くわけじゃないよね？　君にはまだそんな力があるとは思えないし、まずは経験を積んでチカラを付けるのが順序通りって感じだね、という訳でこれから行くとことか決まってるの？」
「七英雄に会いに行こうと思ってるんだけど」
「ふ～ん、でまだ旅立ったばっかりだって言ってような気がしたけど、七英雄にはもう会えた？　ってまだ会えたわけないか」
「シモン先生にはもう会ったけど……」
実際は会ったというより育てられたのだが。
「シモンって傀儡子シモンのこと？　それはすごい、旅立ってすぐに会えたの？」
「たまたま、偶然というか必然というか……気付いたらいたというか」
「言ってること意味不明だよ？」

エノクはシモンに里のことを言わないようにと口止めされているために言葉がどうもしどろもどろになってしまう。
「あの、それで、シモン先生に七英雄を探しなさいって言われて……」
「君ってもしかして大物？　――英雄シモンにそんなこと言われるなんてふつーの人とは思えないね」
「あの、え～と、それが……」
エノクは言葉を詰らせた。
「別に言わなくてもいいよ、でもそのうち言ってよ。そしたら私の秘密も教えてア・ゲ・ル」
最後の『ア・ゲ・ル』という言葉を妙に色っぽく言ったアイオンを見てエノクは思わず笑ってしまった。
「あはは、面白いよ今の」
「よかった、今の外したらそーとーさぶいからね、あはは。じゃあ私は寝るから」
「えっ！？」
何だかアイオンには何度も驚かされているような気がする。でもエノクはそんなアイオンのことを『結構好きかも』と思った。
「ぼくも少し休もうかな」
そう言ってエノクはアイオンの横に座りゆっくりと目を閉じた。
　しばらして、温かい日の光の差し込む甲板の上から二つの寝息が聞こえてきた――。

ブルーマン

エノクたちを乗せた船は青く澄んだ空の下を港町サルサラに向けて航海を続けていた。
しかし、先ほどまで静かで穏やかだった海は荒れ始め、空もどんよりとした雲が太陽を覆い隠し、辺りが薄暗くなり空気全体が重々しいものへと転じた。
エノクとアイオンはそんなこととも知らずにすやすやと寝息を立てて健やかに眠っている。
甲板の上が急に慌しくなった。大勢の人々が大声で叫んでいる。
エノクはその騒々しさで目を覚ました。そして、何事かと辺りを見回した。
波はうねり、空は暗い、そして海の向こうで蒼白く輝く光。エノクはそれを眼を見開きしっかりと見た。
誰かが叫んだ。
「ブルーマンだ、ブルーマンが出たぞ!!」
「!?」
その言葉を聞いたエノクは急いで甲板の先に走り出した。
甲板の先には剣士らしい男が海の向こうで輝く蒼白い光を眺めていた。金髪を逆立てたツンツンヘアーが印象的な剣士だ。
エノクはその男の横に行き、自分より背丈の高いその人物を見上げるようにして尋ねた。
「あれがブルーマンですか?」
「そうだ、あいつらは確実にこの船を狙っている」
エノクは蒼白く輝く光を見つめながら、昔読んだブルーマンについての書物を思い出した。
ブルーマンとは海に巣食う亡霊で、海賊などが海で死んでブルーマンになるのだという。ブルーマンたちの目的は船を襲い沈めること。それだけのために海の上を永遠に成仏できないまま彷徨い続け

ているのだという。
　大きくゆれ船が止まった。何かの力によって強引に止められた感じだ。
　船乗りたちは慌てふためき、鳥人の夫婦は身を寄せ合いガタガタと振るえ、猫人の商人は船乗りに料金を返せと喚いている。
　剣士は海を眺めながら呟いた。
「もうすぐやつらはここに来る、お前も剣を持つ者なら少しは戦えるのだろ？」
「えっ、あの僕は実戦で剣で戦ったことがなくて……」
　エノクはシモンの里にいた時、サーベル型の魔法生物やシモンによって剣術の特訓をしていた。だが、シモンの里には平和主義者しか居らず、剣術をまともに使える者も居なかった。
　エノクはシモンに剣術なんかより魔法生物を作る方法や錬金術を教えてくれと頼んだことがあったのだが、『エノクには剣術の素質がありますから――』と言われて、結局剣を振り回すだけという酷い剣術の特訓を毎日やっていた。
　船乗りたちは、乗客たちを貨物室の中へと非難させている。
　剣士はここに残るつもりらしい。そして剣士はエノクの顔を見た。
　エノクは頷き、自分もここに残ることを決意した。
　エノクはアイオンも元へ駆け寄った。まだ彼は静かな吐息を立てながら寝ている。
「アイオン起きて！」
アイオンの肩がエノクによって揺さぶられるが、アイオンは起きるようすもない。
「アイオン、大変だよ」
アイオンは目を擦りながら眠たそうな声でぶつぶつと呟いた。
「ううん……あと5分、あと5分だけ眠らせて……」
――エノクは近くにいた船乗りに頼んで、さっさと”これ”を倉庫にブチ込んで置いて下さいと頼んだ。
　エノクが甲板の先に戻った時にはもう、蒼白い光は船の形へと変

わっていた。
ボロボロのマストや船体。乗組員たちもみなボロボロの格好を――格好だけではない身体もボロボロである。
暗くどんよりとした曇り空の下、先ほどまで荒れ果てていた海が全く波を立てなくなり、静けさが辺りを包み込み、気温もぐっと下がったようだ。
ブルーマンを乗せた船は音もなく近づいて来る。
蒼白い光を放つ船の上には海賊たちの亡霊ブルーマンが３０人ほど乗っていた。そいつらは皆生気の無い虚ろな顔をして、武器を手に持ち、口だけが不適な笑みを浮かべている。
ブルーマンの船とエノクたちを乗せる船との距離が５ｍ程になった時、剣士は鞘から剣を抜きエノクにこう言った。
「私の名前はクラウン、覚えておけ！！」
そう言って彼は船から船へと跳躍し、ブルーマンたちに果敢にも向かって行った。
エノクもそれに続こうと剣を鞘から抜こうとするが、抜けない！？
「な、なんで！？」
エノクを乗せた船がガタンと揺れた。ブルーマンの乗せた船がエノクを乗せた船に接触したのだ。そして、エノクが気づいたときにはブルーマンが大剣を振り上げエノクを殺そうとしていた。
「！？」
エノクはもうだめだと思い、目をぎゅっと硬く閉じた。
「戦わないなら邪魔だ退いてろ！！」
エノクに罵声が飛ばされた。
エノクがゆっくりと目を開けるとそこには船乗たちが武器を片手に立っていた。そして、エノクの傍らには切断されたブルーマンの身体がぴくぴくと痙攣しながら床の上を動いている。
ブルーマンというのはゾンビの一種なので物理的な攻撃で倒すことができる。
船乗りたちは自分たちの船を守るために果敢にブルーマンに立ち

向かって行く。エノクはそんな船乗りたちに邪魔だと言わんばかりに突き飛ばされてしまった。
「……僕だって、戦える」
エノクはブルーマンと戦う船乗りたちを見て唇を噛み締めた。
「だったら、早くその剣を抜けば？」
エノクが振り向くとそこにはアイオンが遠く彼方を見つめ立っていた。
「エノクはなぜ戦うんだい？　私は取り合えずこの船に乗ってる人たちを助けブルーマンを成仏させてあげるために戦うけど」
アイオンはこの言葉を言った時もエノクのほうを見てはいなかった。彼は遠く彼方にある何かを見つめていた。
　アイオンはハープの弦をしなやかな指先で軽く弾いた。すると、見えない何かが空気を伝いブルーマンに直撃した。そして、何かの直撃を喰らったブルーマンの身体は後方に吹き飛び、後ろにいたブルーマンたちを倒し、まるでドミノ倒しのように次々とブルーマンの身体を倒していった。
　エノクは剣を鞘から抜いた。
「僕は誰かを守るために戦う」
　鞘から抜かれた剣は眩い光を放ちながら、女の子の声でしゃべった！？
「ふぁ～、よく寝たぁ～」
「！？」
これにエノクは持ってる剣が手から滑り落ち、近くにいたアイオンは大事なハープを自分の足に落とした。
「痛～い！」＆「痛ーっ！！」
前者はエノクの剣で後者はアイオンだ。
　エノクの剣はまだしゃべり続けていた。
「あの～エノク、早く拾ってくれるかなぁ？」
エノクはこの言葉に慌てて剣を拾い上げた。そして、剣に向かって話しかけてみた。

「えっと、何？」
「あたしの名前はティンカーベル、シモン様によって命を吹き込まれた剣だったりします。そーゆーこと」
エノクの身体が剣に引っ張られるようにして動いたかと思うと、そのままブルーマンへと突進して行き串刺しにした。その後もエノクは剣に引っ張られながらブルーマンたちを次々となぎ倒していき、ついにはブルーマンすべてをエノクひとりで倒してしまった。
船乗りたちの口から感嘆の声が漏れる。
アイオンは足を押えながら安堵のため息を漏らした。
「戦いは終わったようだね」
「まだだ！！」
剣士クラウンの声が木霊した。
なんとクラウンは、ブルーマンの乗ってきた船の甲板から飛び出している白い触手に持ち上げられ身体の自由を奪われていた。
「なんだあれは！？」
船乗りたちがざわめき始めた。
ブルーマンを乗せていた船の中から何本もの白くて吸盤の付いた触手が甲板などを突き破り、船を粉々にしていった。そして、船は完全に崩壊され、中から海の魔物クラーケンがその姿現した。
鼻を覆いたくなる異臭がクラーケンの身体から放たれ辺りに充満する。
鼻を押えたアイオンはハープを構えすでに戦闘体制に入っている。
エノクも鼻を押え剣を構えた。
海の魔物クラーケン、その姿は巨大なイカそのものである。全長は身体だけで５ｍ～７ｍ、足の先まで含めると３０ｍは優に越えているだろう。
クラーケンはクラウンの身体を締め上げた。クラウンの口から苦痛の悲鳴が漏れ血が吐き出され、彼はそのまま気を失った。そして、クラウンはクラーケンの口に中へと運ばれ、硬いものを砕く音が辺りに鳴り響いた。

アイオンが顔をしかめる。
「――あれが親玉ってわけだね」
クラーケンはエノクたちの乗っている船を逃がさまいと触手で船を掴んだ。これでクラーケンを倒さない限り逃げることは不可能だろう。
アイオンは突然うずくまり、足の先を押えてエノクの顔を見つめた。
「あいたたた、さっきハープで打った足が急に痛み出した、駄目だ、一歩も動けない……」
「はぁ？」
エノクは思わず、口をあんぐりと空けてしまった。
「だから、足が動かないから、エノク後は任せた！！」
と言ってアイオンはクラーケンをビシッと指さした。
「僕ひとりで倒せっていうの！？」
アイオンは真剣な顔をして頷いた。
「だいじょぶさ、君ならできる」
「そうそう、あたしがついてるんですから」
ティンカーベルは自信満々に言い切った。
エノクは剣を構え直した。
船乗りたちは恐怖で誰も動こうとしない。当たり前だ、クラーケンと言えば海の魔物の中でも3本の指に入るほどの凶悪な魔物だ。クラーケンと出くわしたら最期、生きて帰れるなど稀なことだ。
クラーケンの触手はそれ一本一本が生きているようにうねっている。
エノクは意を決して、地面を蹴り上げクラーケンに向かって斬りかかった。
クラーケンの触手が次々とエノクに襲い掛かる。エノクはそれを軽やかに避けていく、そして、地面を蹴り上げ高くジャンプした。がしかし、エノクの身体の自由が奪われた。
クラーケンの触手がエノクの足を捕らえて甲板へと叩き付けた。

「ぐはっ……」
エノクの口から苦痛が漏れる。だがエノクはすぐさま足の絡みついた触手を断ち切ると再びクラーケンに向かって走り出した。
クラーケンの触手がまるで槍のようにエノクの身体を突き刺そうとする。エノクはそれを剣でなぎ払いながら、前へ進んで行く。
その光景を見ていたアイオンの表情が曇る。
「……おかしい、クラーケンの再生力が異様に早い。それにこの異臭……もしや！？」
エノクは次から次へと襲い掛かって来る触手を相手に悪戦苦闘している。そこへアイオンが現われた。
「エノク、このクラーケンは少し性質［タチ］が悪いようだよ」
アイオンはエノクの横でクラーケンの攻撃を軽やかに交わしながら話している。
「アイオン、足はもう大丈夫なの？　歩いて平気なの？」
「まぁね」
エノクはアイオンの足のことを本気で信じて心配していた。
「それよりもエノク、このクラーケンはすでに死んでいる」
「えっ！？　どういうこと？」
「エノク前を見て！！」
「！？」
エノクがアイオンとの会話に気を取られてしまった瞬間、クラーケンの触手がエノクに襲い掛かった。エノクは間一髪のところでそれを避けることができたが、エノクの頬には紅い筋が一本通ってしまった。
今のエノクは彼自身が戦っているというより、剣であるティンカーベルが戦っているところが大きい、しかし、剣を持っているエノクが少しでも気を抜けば今のように相手の攻撃を受けてしまう。
アイオンはハープを強く奏でた。するとアイオンを中心に見えない力が広がりクラーケンの触手をこっ端微塵にした。このクラーケンでも、この攻撃を受けては再生するまでには時間がかかるだろう。

アイオンはうずくまり足を押えた。
「無理したから足が……」
「だ、大丈夫アイオン！？」
エノクはアイオンの仮病を本気で心配している。
「エノク、もう私は動けない。だから、だから最期に私の言霊をしっかりと焼き付けてくれ」
「アイオン、わかったよ、わかったから」
エノクはしゃがみ込みアイオンを泣きそうな顔で見つめている。
「エノク、あのクラーケンはゾンビだと私は推測した。そして、あの再生力、核がどこかにあるってわけさ（恐らくだけど）。というわけだ、エノクがんばってくれたまえ」
そう言ってアイオンは足を押えてながら甲板の上を転がりどこかに行ってしまった。
　エノクが再び剣を構えるとティンカーベルは少し呆れた様子でエノクに話しかけた。
「よくあんなのと旅してるね～」
「あんなのってアイオンのこと？」
「そうだよ、あいつ意外に誰がいるの？」
「でも、あんなのって」
「強いクセしていざってなると仮病使ってどこかに行っちゃうなんてサイテーじゃない？」
「えっ！？　あれって仮病だったの？」
「……（今まで気づいてなかったのか）まあ、いいか。でエノクはクラーケンの核は《視る》ことできるの？」
「見るってどうやって？」
「そんなのも知らないの（はぁ、先が思いやられるなぁ～）」
ティンカーベルは思わず落胆して、全身の力を抜くと剣の重さが急に重たくなった。
「わぁっ！」
エノクは急に重たくなった剣を支えきれずに床に剣ごと倒れそうに

なってしまった。
「ああ、ごめんごめん」
ティンカーベルは謝ると再び力を込めた。すると、剣の重さは空気のように軽くなった。
「……今の何？」
エノクはきょとんとした表情でティンカーベルを見つめた。
「この剣の重さをあたしが力を入れて軽くしてるんだけど、今ちょっと力が抜けちゃって」
「ふ～ん」
本来剣というものは凄く重たいもので普通の人が振り回せるものではない。だがこの剣はティンカーベルの意志によって空気のような軽さにすることが可能だった。これで力のない人でも軽々と剣を振り回すことができる。
いつの間にかクラーケンの触手は完全に再生した。そして再びエノクに襲い掛かる。
エノクはティンカーベルの力を借りてクラーケンの触手を斬り、本体へと詰め寄って行く。
「ティンカーベル、核を見るってどうやるの？」
「いわゆる、心の目で《視る》ってやつね。やり方は精神を集中させて、ここだってとこを剣でブッ刺してみる。簡単でしょ？」
「簡単じゃないよ」
「取り合えずやってみて」
エノクは言われたままに精神を集中させてクラーケンの核を探した。
「あった、あったよ」
エノクは《視た》。クラーケンの身体の中央に光り輝く何かを心の目で《視た》。そして、エノクはそこに向かって剣を一直線に突き刺した。
「これで終わりだーーーっ！！」
「ギャオーーーッ！！」
クラーケンの最期の咆哮が辺りに鳴り響き、その場にいた人々はそ

の奇怪な声に耳を塞いだ。
　エノクがクラーケンの身体からゆっくり剣を抜くと、それと同時に触手たちが急に海の中へ水しぶきを立てながら沈んで逝った。そして、本体も直ぐにそれを追うように海の底へと深く沈んで逝ってしまった。
　船が大きく揺れ、斜めに傾いた。
「エノクあれ見て」
ティンカーベルの剣先がぐいっとエノクの手を引っ張り向けたその先にはクラーケンの触手が船をがっしりと掴んでいた。
「まずい、早く切り離さないと……」
エノクが行動に移ろうとした時にはもう遅く、船は傾き海の底に沈もうとしていた。
　船乗りたちや乗客たちは既に救命ボートに乗り込んでいる。
　エノクも救命ボートに乗ろうとしたが、船内に水の入ってしまった船は傾くのが早い。エノクは９０。に傾いた船から転げ落ち、海の中へと投げ出されてしまった。それを見ていたアイオンは救命ボートから海の中へと飛び込んだ。
　エノクは泳ぐことができない。
　息が苦しくなって意識は薄れていき、エノクの身体は海の底へと沈んでいった――。

隠された真実

目を開けると木でできている天井が目に入った。
「ここは……？」
目を覚ましたエノクはベッドから起き出して辺りを見回した。
部屋は質素というか、寂しい感じが見受けられた。部屋は小さく、壁には自分の剣が立て掛けてあって、自分が今まで眠っていたベッドとその横に置かれた小さなタンス、それくらいしか家具はない。
「う～ん」
エノクは腕組みをして頭を傾げた。
たしか自分は船の上から落ちて……それから？　それからどうなったんだろう、誰かに助けてもらったっぽいけど？
ここに居ても何もわからないから、家の中を詮索してみよう。そう思ったエノクは部屋のドアノブに手をかけようとしたその時、ドアが勝手に開きエノクの顔面に直撃した。
「痛っ！」
「だ、大丈夫ですかっ！？」
鼻を押えてうずくまるエノクが上を見上げると、シスター服を着た凄く慌てた様子の若い女の子が目に入った。
「誰？」
「あ、あの、その私ですか！？」
「あの、あなたがぼくのことを助けてくれたんですか？」
「え、あの、名前ですか、じゃなくって、助けたかでしたっけ、え～と、な、なんですか？」
「質問したのはぼくなんだけどな」
「ご、ごめんなさい。私ドジでまぬけで、取り得なんて一つも無い人間なんです」
目の前のシスターは何度何度も頭を下げて謝っている。
「あ、あの別にあなたは何も謝らなくても、その、あの、本当に頭

を上げてください」
そう言ってエノクまでも頭を何度も下げた。
二人ともが頭を下げあって、慌てふためいてしまっている光景はとても滑稽だった。
しばらくしてエノクの顔がはっとした表情を浮かべ、目を丸くした。
「あっ、そうだ！！　アイオンは！？」
突然大声を上げたエノクに驚きシスターは目を丸くして頭を下げる動きを止めてしまった。
「あ、あの、どうしたんですか？　アイオンって人の名前ですよね、その人がどうかしたんですか？」
「ぼくはアイオンと一緒に船旅をしていたんだけど、モンスターに襲われてしまって船が沈没してしまったんだ。それでぼくは海に投げ出されて、気付いたらここで目が覚めて……アイオンはどうなったんだろう？」
エノクは何かを思いながらゆっくりと歩き、ベッドに腰を下ろした。
アイオンはどうなったんだろう、アイオンは無事なのか？　ぼくはアイオンと逸れてしまって、どうしたらいいんだろう。そんなことが次から次へとエノクの頭の中を過ぎっては蓄積されていった。
「あの～」
「……！？」
突然の声に驚き前を見るとそこには不安そうな表情をしたシスターの顔がエノクの目に入った。
「大丈夫ですか？　あの、私にできることがあれば」
エノクは笑顔で横に首を振った。
「ごめん心配させちゃって。それよりも、ぼくのことを助けてくれたのはあなたですよね」
「助けただなんて、私はただ海岸に倒れていたあなたをここまで運んで来ただけで……」
シスターはこう言いながら顔を真っ赤にした。きっと、照れている

のに違いない。
「ありがとうございました。ぼくの名前はエノクと言います」
「あ、あの私の名前はイリスと言います。この島に住んでいるのはお爺様と私だけで、お爺様も私も神に仕える身です。と言ってもまだ私は半人前でいつもドジばっかりで……」
「島に住んでいるのが二人だけって言ったけど？」
「この小島は、アトラス大陸の東に位置するパララスという港町から海上１０ｋｍ離れた場所にある地図にも載らないくらいの小さな島です」
アトラス大陸の東に位置するパララスという港町はエノクらが乗っていた船の行き先地であった町の名前だ。
「もう、ひとつ質問していいですか？」
「なんでしょうか？」
「どうしてあなたとお爺様はこの島に？」
この質問にイリスは表情を曇らせうつむいた。
「それが……」
「あ、あの、言いたくないのなら」
イリスは顔を上げた。
「私のお爺様は聖アルティエル様の伝承について研究をしていたんです。そして、今伝承されている歴史とは違う真の歴史を突き止めたんです。それを公けの場で発表したために、お爺様はうそつき呼ばわりされ、教会から弾圧を受けてしまってこの島に逃げてきたんです」
「真の歴史？」
「その話は気にしないでください、きっと言っても信じてもらえないから」
「でも、話だけでも……」
「いいんです。……それよりもお腹空いていませんか？」
どのくらい自分が意識を失っていたかはわからないけど、たしかにお腹は空いていたのでエノクはお腹に手を当てコクリと頷いた。

イリスはニッコリと微笑みエノクを別の部屋へと案内した。
「こちらへどうぞ」
イリスに連れられるまま部屋の外に出たエノクは辺りを見回した。廊下は短く、部屋数も少なく家全体を見通せた。
エノクが食卓に着くと、イリスが料理を運んで来てくれた。
「ごめんなさい、食料が少なくてこんなものしかなくって」
テーブルの上に並べられた料理は具の入っていないスープと一切れのパンだけだった。それを見たエノクの顔は迂闊にも曇りの表情を浮かべてしまった。
表情を曇らせてしまったエノクを見てイリスは、
「ごめんなさい、ごめんなさい」
と何度も頭を下げて謝った。
「あ、あ、謝らなくていいから、助けてもらって食事までご馳走になるんだから、頭をさげなきゃいけないのはぼくのほうだよ」
「本当にごめんなさい」
「だから謝らなくていいから」
そう言ってエノクはパンを口に運びスープを一口スプーンに取って飲んだ。口の中に入れたパンは固く、スープは味など全くと言っていいほどなく、お世辞にもおいしいとは言えなかった。
それでもエノクは嫌な顔を浮かべずに奇麗に料理を平らげた。決して満腹になったわけではないがエノクは満足した。そして、イリスの顔を見た。
「ごちそうさまでした。ところでイリスは食べないの？」
「私は後で食べますから。それよりもお爺様に夕飯を運ばないと」
そう言ってイリスは、エノクが料理を平らげて空になったお皿を台所に運び、新たにパンとスープをトレイに乗せてやって来た。
「私はお爺様に夕食を運んで来ますから、エノクさんは部屋に戻って休んでいてください」
「あの、ぼくも付いて行っていいですか？　イリスのお爺様にもご挨拶したいし」

「そうですか、ここに来てからの初めての客人なのでお爺様も喜ぶと思います。部屋まで案内します、付いてきてください」
イリスの祖父がいる部屋はこの家の一番奥の部屋だった。
イリスによってドアが開かれたドアの先には、白髪の老人がベッドに横たわって静かに目を閉じていた。
「お爺様、夕食をお持ちしました」
声を聞いた老人は目を開け、ゆっくりと身体を起こした。
「すまないなイリス、お前にいつも面倒ばかり診てもらって」
「お爺様、海岸で気を失っていたあの人が目を覚ましたんですよ」
「初めましてエノクといいます」
「おお、良かった目を覚ましになったか。わしの名はモーリシド、以前はパララスという港町の教会で神父をしていたんだがな、今じゃこんなに落ちぶれてしまっ……ゴホッゴホッ」
「お爺様、大丈夫ですか！」
イリスはすぐにモーリシドに駆け寄り、背中を擦ってあげると、モーリシドの顔つきは和らいでいった。
「すなまいな……、もう、わしも長くないのかもしれんな」
老人の身体は枯れてしまったように細く、見た目からも衰弱が伺える。しかし、声からはしっかりと芯の強さが感じられる。
「お爺様、そんなことおっしゃらないでください」
そう言いながらイリスは片手に持っていた食事をトレイごとモーリシドに手渡した。
「ありがとうイリス。もう下がっていいよ」
軽く頭を下げ部屋を出て行こうとしたイリスに続いてエノクも部屋を出て行こうとしたのだが、そんな彼をモーリシド老人は呼び止めた。
「エノク、君はここに残ってくれないか？」
「えっ！？」
モーリシドの言葉にエノクは驚いたのだが、それよりも驚いたのはイリスだった。がイリスは何も言わずにエノクにお辞儀をして何処

かに行ってしまった。
部屋に残されたエノクは、自分がなぜ呼び止められたのか検討もつかずにただ黙り込んでしまった。
沈黙のあとモーリシドのほうが口を開いた。
「まあ、そこに立ってらんでここに置いてある椅子に腰を掛けなさい」
老人のか細くなってしまった指の先には背もたれの無い小さな椅子がある。エノクは言われるままにその椅子に腰を掛けて話しはじめた。
「あの、なんでしょうか？」
「頼みがあるんだが聞いてくれるか？」
老人の真剣な眼差しを目の前にしてエノクの顔つきも変わった。
「話してみてくれますか？」
「わしは今夜死ぬ」
「なんですって！？」
衝撃の言葉を耳したエノクは思わず椅子から立ち上がり声を荒げてしまった。
「本来はもう死んでいてもおかしくないんだがな、死神が君が来るまで待ってくれると約束してくれた」
「死神って？　それよりもあなたはぼくがここに来ることを知っていたんですか？」
驚きの話のあまり、理解に苦しむエノクは頭が熱くなってしまって、なにがなんだかわからなくなってしまった。
「死神が3日前わしの前に姿を現してな、普通の人間には《視る》ことはできないんらしいんだが、わしには《視え》てしまってな。わしはイリスを残して死ねんと言ってやったんだ、そうしたら死神の奴が君がこの島に流れ着くことを教えてくれてな、死神は君にイリスのことを任せてはどうかと言ってな、わしがこの話を君にするまで寿命を延ばしてくれたんだ」
「話がさっぱり見えてきません。それに死神というのは寿命を延ば

してくれるんですか？　ぼくは死神というのは無慈悲な存在だと思っていました」
「死神という存在は慈悲深い存在だ。そして、死神は寿命をまっとうした者の魂を狩るものであり、不慮の事故で死んだ者の魂を狩る事はしない、あくまで自然の摂理に基づき死んだ者の魂を狩る」
「死神についてはわかりましたが、ぼくにイリスを頼むというのはどういうことですか？」
「イリスにはわし以外の身寄りがないんでな、わしが死んだら君にイリスを任せてたいと思ってな」
「こ、困ります。ぼくは大魔王カオスを倒すために旅をしているんです」
この言葉を聞いたモーリシドの目が大きく見開かれた。
「なんと、カオスを倒しに行くと？」
「だから、そんな危険な旅にイリスを連れて行くなんて」
「ならば、イリスの判断に任せるしかないな。わしが死んだあとイリスに事情を話した上で旅に同行するか聞いてみてくれ、それでイリスがついて行くと言ったならば、連れて行ってくれんか？」
「わかりました。お約束します」
「そうか……安心とまではいかんが、少しは気が楽になった」
そう言う老人の顔はほころび笑みを浮かべ、目からは一筋の涙が頬を滑り落ちた。
　しばらくの間沈黙があり、場の空気をコロっと変えるように老人が話を始めた。
「そうだ、七英雄の真の伝説を聞いてみたいと思わんか？」
「ぜひ、聞かせて頂けませんか？」
老人は食事に手をつけ、パンを口に運び飲み込むと、
「食事が終わったら聞かせてあげよう」
と言って食事が終わるまで口を開かなかった。
　エノクは天井を眺めたり、壁を眺めたりしていると食事を終えたモーリシドが声を掛けた。

「それでは、七英雄の真の伝説について完結に言おう」
エノクは息を飲みモーリシドの次の言葉を待っている。
「七英雄の伝説には語られてはいないが、英雄はもう一人いた」
「もうひとり？」
「そうだ、七英雄は名前の通り全部で七人いる。今人々に伝承されている伝説では聖アルティエル様を加えて七人となっているがそれは間違いだ、七英雄はアルティエル様を加えなくとも七人いた」
「まさか、そんな！？」
この話を聞いたエノクは、とてもそんなこと信じられないと思った。七英雄の伝説については本でなんども読んだことがあるし、なによりも七英雄本人で傀儡子シモンからもいろいろと話を聞いている。
驚くエノクの顔を見てモーリシドはうれしいそうに笑った。
「やはり、驚いているようだな」
「当たり前です、だって……」
だってぼくはシモン先生から直接話を聞いたんだとエノクは思ったが、エノクはシモン先生から聞いた話をよく思い出した。そういえば、シモン先生の話はたまになにかちぐはぐになってつじつまが合わなくなることがよくあった。あの時は昔のことなのでよく覚えていないのだろうと思って聞き流していたが、もしかして、何かを隠していたのかもしれない。
「ここからの話は今まで誰にも話したことがなかったんだが、聞きたいか？」
「ぜひ、お願いします」
「わしは七英雄に伝説に以前から疑問を持っていた。七英雄の伝説はところどころ抜けている箇所があって、時には話がちぐはぐになっているところがある。教会や研究者の話では古い話だから、そういうこともあるだろうと簡単に済ませれているが、わしは違った。それでわしは研究を重ねてもうひとり英雄がいたことを突き止めた」
この時のエノクはモーリシドの話に興味を奪われすぎ、身を乗り出しベッドにまで手を付いて聞いているが、モーリシドはそんなこと

には気も止めず、なおも話を淡々と続けた。
「それでそのことを発表した結果、こんなところに追いやられたわけだが、それはいいとして。その話を大勢の前でした次の日にひとりの男が現われたんだ。その男は自分が嘘の伝説を流した張本人で、歴史から名を消した七英雄のひとりだと言った」
「どうして、その英雄はそんなことをしたんですか？」
「詳しくは教えてもらえんかったが、その英雄は大罪を犯してしまったらしい、だから歴史を改ざんしたそうだ」
「その英雄の名は聞きましたか？」
その時突然回りの空気の質が変わった。

孤島の教会

「話は済んだ？」
エノクが声のした方向を振り向くとそこには、小柄な女の子が大鎌を持って立っていた。
「この人が死神？」
「そう、あたしが死神」
死神はエノクの想像していた者とは全くと言っていいほどのギャップがあった。
　エノクは自分の目線の先に立つ死神が女の子であったことにまず驚かされた。それに死神の格好も死神のイメージとはそぐわない派手なもので、髪の毛はピンク色で短めのツインテール、服装は黒を基調にしているもののゴシック様式の服装に白いひらひらのレースがふんだんに使われているもので、靴の底は異様に高かった。
　そんな死神を目の前にしたエノクは思わずこう聞いてしまった。
「本当に死神なの？」
その言葉を聞いてモーリシドは笑い出した。
「ははは、わしも初めて見たときはそう聞いてしまった」
この言葉を聞いた死神は顔を赤らめ膨れっ面をした。
「これでもいちよー死神なんだけどな。まあ、あたしは死神の中でも変わり者って言われてるケド」
「『死神の中』って死神って何にもいるんですか？」
「あったりまえでしょ～、ひとりで何人も相手にしてたら大変でしょ？　それにあたしたちが魂を狩るのは、それを糧として生きてる存在だからで……」
死神は魂を糧として生きているだなんてエノクにとって初耳の話で、この話は聞いた彼は思わず椅子から飛び上がり死神に詰め寄った。
「死神が魂を糧に生きてる？」
「そ、死神は人間が植物や動物を食べて生きているように、魂を身

体に取り込み生きている。死神も他の生物とさほど変わらないってことだね。でも死神は人間なんかと違って無意味な殺しはしない、でも中には欲望に駆られて人間を殺しまくる奴とかもいるんだけど、そーゆー奴は別の死神によって消滅させられるんだよね、まあ、死神の社会にもいろいろあるんだよねぇ～」
死神とは神の眷族だとばかり思っていた。しかし、少し違ったようだ。世の中はまだまだエノクの知らない事が多い。本や文献だけでは世界はわからないものだ。そう実感するエノクであった。
「そうそうあたしの名前まだ言ってなかったよね。私の名前はB・B・シェリル、相性はビビ、よろしくねv」
「あ、ぼくは……」
「エノクって言うんでしょ、知ってる」
「な、なんでぼくの名を？」
ビビはふふんと鼻を鳴らし、口の両端を少し吊り上げた。
「死神はねぇ、少しだけど未来のことが《視える》んだよねぇ～。すごいでしょ、ね、ね？」
頷くことを強要されたようにエノクは、うんうんと無言で頷いた。
「でしょ～、あたしってすごいんだから」
エノクの持っていた死神のイメージがどんどん壊れていった。死神とはもっと陰気で暗いイメージだったのだが……。
「こんなにちょ～可愛くて、ちょ～優秀な死神なんて他を探したってあたし以外はいないんだから。あなたたちはあたしに出会えてラッキーなんだからね」
この死神ときたら、死神の面影ひとつ無い。
「本当に君は死神なの……とても信じられないんだけど？」
「えぇっ！？　うっそ～、まだ疑ってんの！？」
頷くエノクに対して真っ赤な顔をして不満の顔をするビビ。だが直ぐにビビの顔は表情を消し、その口から低い声が発せられた。
「もうすぐわかるよ、あたしが死神だって」
小柄な少女の足が一歩一歩床を踏みしめ老人に近づいていく。その

手にはその少女にはアンバランスな大鎌がしっかりと握られていた。
鎌は良く磨かれランプの光を反射している。この鎌の切れ味は大したものに違いない、なんせ魂まで切り裂いてしまうのだから。
床に響いていた靴の音が鳴り止んだ。
手にした大鎌を強く握りなおす少女の顔は何を思っているのか察することのできない表情をしている。
「お爺さん、もう思い残すことないよね？」
「ああ」
老人の消えそうな低い声が部屋に響いた同時に大鎌が大きく天井へと振り上げられる。その拍子に鎌に当たった光が反射しエノクを思わず目を瞑ってしまった。
大鎌は勢いよく振り下ろされた。がその時、部屋のドアが乱暴に開かれた。
「お爺様っ！！」
――何も起こらなかった。
大鎌を持った少女は忽然と姿を消し、老人は何事も無かったようにイリスを出迎えた。
「なんだイリス。ノックもせずに部屋に入ってくるなんて、どうかしたのか？」
「あ、あの、なんだか嫌な予感がして……それで……」
「嫌な予感？　わしはこの通り元気だぞ」
「……食器を片付けますね」
無言で食器類を片付け部屋を出て行ったイリス。それと入れ替わりにまたあの死神が現れた。
「思い残すことないなんてウソばっかじゃない。今日いっぱい待ってあげるから、ちゃんとあの子と話すのよ、わかった？　あたしがこんなことするなんて滅多にないんだからね。特別だよ、特別」
「ぼ、ぼくイリスさんを呼んできます」
部屋を駆け出ようとしたエノクをモーリシド老人が止めた。
「行かなくていい」

「どうしてですか？」
「いいんだ。イリスには何も言わなくて……」
その言葉聞いたビビは大鎌を床に突き刺し怒りをあらわにした。
「あんたね、あの子に何もいわない気なの！　ふざけんじゃないわよ。あんたがあの子にどんだけ迷惑かけたかあたしは知ってんのよ。あの子の人生はどうなるの？　まだ若いのにあんたと一緒にこんな島に追いやられて、毎日看病に追われて……あの子の人生台無しじゃない。あの子はやさし過ぎるのよ」
小さな死神の手が老人の襟首を掴んだ。
「今日いっぱいまでだからね！　わかった？」
襟首を掴んでいた手を話と同時に老人を突き飛ばすと死神は消えた。
　咳き込む老人を前にして自分は何をしていいのか、エノクにはわからなかった。
「ゴホッ……エノク、君も出て行ってくれ」
老人の声は聞こえているもののその場に立ち尽くしてしまった。
「出て行ってくれ。ひとりにしてくれないか……」
エノクは老人の言葉に下唇を噛み締め部屋を無言であとにした。

　部屋を出ると食器を持ったままのイリスが廊下に立っていた。
「あのお爺様は？」
「ぼくは何も言えない……あなたのお爺様が変わらなきゃいけなんだ……きっと……」
エノクはそれ以上何も言わずに自室へこもってしまった。
　残されたイリスは確実に祖父の死期が近いことがわかっていた。しかし、エノクの言葉の意味まではわからなかった。
　しかたなくお皿を洗うために台所へ向かったイリスであったが、お皿を洗っているときも別のことを考えてしまい、手からお皿が滑り落ち床で四方に弾け飛んだ。
　何も考えずに反射的に破片を拾おうと手を伸ばした。
「痛いっ！」

指を見ると紅い血が滲み出してくるのが良く見えた。
血の出た指をしゃぶり少し動かずに時間が過ぎるのを待った――。
そして無言で割れたお皿を片付け、食器を全部洗い終わると、椅子に倒れるように腰を降ろした。
天井の染みを意味も無く見つめる。
お爺様の死期が近いことはわかっている。でも、もし本当にお爺様が自分の前からいなくなってしまったら自分はどうしたらいいのか？　自分ひとりで生きていけるのだろうか？　そんなことが頭を過ぎる。
不安というより空虚だった。ぽっかりと空いてしまった穴。お爺様が死んでしまったらそうなってしまうに違いない。
だから、だからお爺様が死んでしまう前に何かをしなくてはいけないという衝動に駆られる。でも何をしていいのかわからない。エノクの言っていた言葉が脳裏を過ぎる、『あなたのお爺様が変わらなきゃいけなんだ』。
イリスは立ち上がった。考えての行動ではない。そういう衝動に駆られたのだ。
立ち上がったイリスはそのままモーリシドの部屋の前まで行き足を止め、深呼吸をし、肩をゆっくりと下げるとノックをした。
「お爺様」
返事は無かった。だがイリスは再びノックをした。
「お爺様」
「……今日はもう休ませてくれないか」
ドア越しに小さな声が聞こえた。
「お爺様……あの……」
「何か急用か、しかたない入っておいで」
ドアを開け部屋に入ったイリスはその途端目に涙をため泣きそうになってしまった。ベッドに横たわる老人の姿は数時間の間に何十年もの年月を重ねたように変わり果て、衰弱が著しく身体は枯果ててしまっていた。

でも、ここで泣いてはいけない。イリスは必死で泣くのを堪え、拳を血が出てしまいそうなくらい強く握った。
「イリスこっちへ来なさい。おまえがここに何をしに来たのかはわかっている……今夜わしは死ぬ」
より一層こぶしを強く握った。こんなに人生で泣きたいと思ったことはない。でも、絶対に泣いてはいけない。
表情までは完全に隠すことができず悲痛な表情をするイリスはベッドの横に膝を付き、老人の細い手を取った。
「……お爺様」
名前を呼ぶ以外の言葉を発することのできない少女に老人はやさしい笑みを贈った。
「イリスは何もしゃべらなくていい……しゃべらなくてはいけないのはわしだ」
「……」
静かな老人のささやきに耳を傾ける少女。
「すまなかった……すまなかった、おまえに迷惑ばかりかけて……こんな辺境の土地にお前を……」
「私が自ら望んだ道です。だから、だからお爺様は何も悔やむことはありません。私はお爺様の近くにいつもいることができて幸せでした」
「……」
これ以上の言葉はこの二人には不要だった。一緒にいるだけでいいのだ。それだけで相手に気持ちが全て伝わる。
長い長い沈黙と時間のあと、窓も開けていないのに部屋に静かな風が吹いた。そして……。
「お爺様っ！！」
老人の手から力が抜けた。
別の部屋にいたエノクもこの時、老人の死を身体で感じ取った。でも、その場には駆けつけることはしなかった。ただ無力な自分を悔いてその場にいることしかできなかった。

イリスの目の奥から涙が滲み出す。声を出して泣きたいのに泣けなかった。ただ、涙がいくつもいくつも頬を滑り落ちる。

翌朝、日が東の空に昇ると同時にエノクのいる部屋のドアがノックされた。

ドアを開けるとそこにはイリスが立っていた。その目元には涙のあとが残っていた。

「お爺様が亡くなりました。エノクさんもお爺様を土に還すのを手伝ってもらえませんか？」

無言でエノクが頷いたのを見てイリスは頭を下げた。

モーリシドの亡骸は教会の裏に埋められた。

その土の上には目印となるように木を十字に縛りつけ作った十字架を立て、綺麗な花を植えた。

墓の前に膝を付くイリス。もう涙は枯れてしまったと思ったのに、また涙が止め処なく流れてきた。でも、泣いてはいられない、自分が天に贈ってあげなくてはいけない。

閉ざされていた口が言葉を紡ぎ始めた。

「肉体は土に還り、土は草木を育て、命は風に乗り大地を駆け抜け、巡り巡りて大気を満たし、世界を優しく包むでしょう。優しさは大切な生命の源となり、熱き血潮を吹き上げ、至福の時を肥やすでしょう。旅立つあなたに神の祝福があるように、ここに祈りを捧げましょう」

イリスは小さく十字を切ると自分の人差し指にしていた指輪に軽くキスをした。

ややあって、イリスが突然後ろにいたエノクの方を笑顔で振り向いた。

「エノクさん、私を島の外に連れて行ってくれませんか？」

「えっ！？」

エノクが言うまでもなかった。イリスは自ら自分の進むべき道を見つけた。

「ダメですか？　あのずっと一緒に旅して欲しいって頼んでいるわけじゃなくって、とりあえず島の外まで一緒に……ダメですか？」
エノクは笑顔で答えた。
「一緒に行こう」
こうして二人は直ぐに島の外へ旅立つことになった。
荷持つをまとめ小さな教会をあとにする二人。
教会を出たエノクはふと教会の屋根を見上げた。そこには木の棒で簡単に作られた十字架が掲げられていた。光を浴びるその十字架は神々しいまでの輝き放っている。
「エノクさん、早くしないと夜の海を渡ることになっちゃいますよ」
「あ、うん」
二人は海岸沿いに放置してあった小さなヨット型のボートで海を渡り、近くの港町まで行くことにした。
ボートは長い間使われていなかったためか、だいぶ痛んでいたが海を渡ることは十分可能だ。
ボートに乗り込みこの島をあとにする。イリスに取ってもエノクに取っても、これは新たな旅立ちの瞬間だった。
エノクはここでの出来事を決して忘れない。ここで学んだことを決して忘れない。
自らの進むべき道は自分で切り開いていかなくてはいけない。そうイリスに教わったような気がした。
港はすでに見えている。そう今から自分たちはあそこに行くんだ。
大魔王カオスを倒すまではどこまでも進まなくてはいけないのだ。

ソードダンサー

アトラス大陸の東に位置するパララスという港町は活気に満ち溢れ、船乗りたちが朝から酒を酌み交わし、人々の顔は誰も笑顔に満ち溢れていた。

「こんなに大勢の人間を見たの初めてだよ。それにあれとか、これとか……目が回りそうだ～」

歩きながらきょろきょろと辺りを見回すエノクの目に映る物は何もかも新鮮で真新しい物だった。

人の往来に目を回し、ふらふら歩き出したエノク。今にも人にぶつかりそうで見てられなくなったイリスは、

「あ、あのエノクさん、少し休みませんか？　お昼ですし昼食にしませんか？」

「う、うん……」

かろうじて返事をしたエノクであったが、彼はすでに人酔いをしてしまっていて、石畳の道の上でうずくまってしまった。

「気持ち悪い……」

「だ、だいじょぶですか～っ？」

慌ててエノクの背中を擦るイリス。だがエノクの具合は一向に良くはならなかった。

そこへヴェールを顔に付けた踊り子風の若い黒髪の女性が現れ二人に声を掛けてきた。

「あんたたちだいじょぶか？」

その声は低くハスキー掛かった色っぽい声だった。

エノクは渋い表情でヴェールの女性を見上げた。顔はヴェールで隠れていて見ることはできないが、スタイルもよく、どこか気品さえ漂わせていた。

女性を見上げることまではできたものの、言葉を発することまではエノクにはできなかった。

そんなエノクに変わってイリスが事情を説明する。
「え、えっと、ここにいるエノクさんが少し気分が悪くなってしまって、それで、それで、えっと……」
「見ればわかる。……仕方ない、うちにおいで、少しなら休ませてあげる」
「ほ、ほんとですか！　良かったですねエノクさん」
エノクは無言のままコクコクと頷いて見せた。
「ついといで家はすぐそこだから」
女性はエノクに手を貸そうともせずさっさと前を歩いて行ってしまった。
置いていかれてまずいと、イリスはエノクに肩を貸し、エノクを引っ張るように女性のあとを一生懸命着いて行った。
すぐに石でできた小さな家に着いた。ここが女性の家らしい。
家の中は狭く、ゾウが3匹入れるくらいの大きさだが、ひとりで住んでいるのなら問題ない大きさだ。だが、家具が全くなく、生活感が全く感じられない。本当にここに人が住んでいるのかと思わせる。
イリスはこの家に着いた時にはすでにくたくただった。エノクはほとんど自分で歩くことができず、イリスがここまで背負ってきたのに近い。
そんな二人を見て女性は、エノクを軽々と背負い上げベッドの上まで運んで寝かせた。
「あんたの名前エノクってんだろ、名前はいいのに本人は情けないねぇ。少しベッドでおとなしく休んでな」
エノクを寝かしつけた女性はイリスのほうを振り向き、
「私の名前はアリア。あんたの名前は？」
「わ、私はイリスと申します」
「イリスって慈愛の女神の名前と同じだな……。ところで二人は恋人か何かかい？」
この発言に寝ていたエノクは飛び起き、イリスは顔を真っ赤にして

声を荒げた。
「と、とんでもありません、私が、え、エノクさんの恋人なんて……」
「そ、そうですよ、ぼ、ぼくたちは、その、なんていうか……」
「なんだ恋人じゃないのか、つまらないな」
その言い方は心から本当につまらなそうな言い方だった。
「わ、私はエノクさんに島の外まで一緒に、その、えっと……」
「島？」
――このあと、イリスはアリアにことのあらましを簡単に話して説明した。
アリアはイリスの話を聞き入った。そして、イリスは全てを話し終えると目にいっぱい涙を溜めていた。
「うぐぅ～、それで、それで、ですね……」
「話はわかった。涙を拭け、顔がぐしゃぐしゃで可愛い顔が台無しだぞ」
「うぐぅ～」
「泣くのは一向に構わないけど、あたしはもう出かけなきゃいけないんだよ。あんたたちは好きなだけここにいていいからね」
「そ、それはよくないですよね、エノクさん？」
「そうだね。昼食も摂らなきゃいけないし、ぼくらもここを出よう」
家の外に出てすぐにエノクたちはアリアに別れを告げようとしたが、それよりも先にアリアが口を開いた。
「あんたら昼食を食べに行くんだろ。だったら、いい店を紹介してあげるから着いといで」
何から何まで面倒を看てくれるアリアに恐縮しながらも、エノクとイリスはアリアに連れられるままに一軒の海の見えるレストランまで案内された。
レストランの入り口まで来たところでアリアは立ち止まり後ろを付いて来た二人のほうを振り向いた。
「ここの料理はうまくて安いし、いい酒もあるよ。それにいい踊り

子もいるからきっと満足するよ」
そう言ってアリアは軽く手を振ってどこかに行ってしまった。素っ気無い別れ方であったが、残されたエノクは『いい踊り子』という言葉に引っかかった。けれど、そのことはとりあえず頭の隅へ置いておきレストランの中へと入いることにした。
店内は光をふんだんに取り込み、室内全体が明るいデザインが成されている。人々は日の高いうちから酒を飲み、歌を歌い、幸せそうな顔をしている。
イリスは店内を見回し、空いている席を指差した。
「エノクさん、あそこの席に座りましょう」
「海が見えるいい席だね」
席に着いたエノクは吹き抜けになっている外の景色を眺めた。
波が揺れ青く煌く海の上を飛び交うカモメ、汽笛を揚げる船やビーチで海水浴や日光浴をする人々。
しばらくして、ウェイトレスが床を滑るような軽やかな歩き方で注文を取りに来た。
「ご注文はお決まりでしょうか？」
メニューを見ながら考え込むエノクとイリス。いろいろなメニューが書いてあり、正直どれを頼んでいいのか迷っているのだ。
そんな二人にウェイトレスは笑顔で今日のおすすめメニューを紹介してくれた。
「今日のおすすめは、魚介類をふんだんに使ったヘルシーなシーフードサラダと今朝上がったばかりの普段は決して食べる事のできない珍味クラーケンをふんだんに使ったスペシャルメニューもございますが？」
クラーケンという言葉にエノクはあからさまに嫌な顔をして、メニューから適当に選び指を差して注文をした。
「これと、これと、それからシーフードサラダを」
「私はクラーケンって食べてみたいなぁ」
特に何も考えずに言った一言であったのだろうが、エノクはそれに

猛反対をした。
「駄目、絶対に駄目」
「どうしてですか？　クラーケンなんか滅多に食べれませんから、興味あるんですけど」
「ぼく、クラーケンに襲われた経験があるんだ……それで船が沈没して、ぼくは海に投げ出されて……」
この切実な言葉にイリスは言葉を失い、ウェイトレスは苦笑いを浮かべた。
　やや長い沈黙が騒がしい店内の中ここだけ発生してしまった。その沈黙を破ったのは店内を流れる音楽とそれと一緒に現れた美しいひとりの踊り子だった。
　店内にいた男たちの視線が音楽に合わせて妖艶な踊りを始める美しい女性に一気に集中する。
　その女性を見ていたイリスはエノクよりも先に気付いた。
「あの人アリアさんじゃないですか？」
「えっ、ホントだ」
舞台の上で踊っていたのは紛れも無い、アリアだった。
　肌の露出の多い煌びやかな服で艶かしい踊りをするアリア。だが、その踊りからは気高さと高貴さも感じられる。
　踊りを続けるアリアに誘われるかのように、片手にビールジョッキを持った船乗りの男がふらふら歩きで舞台の上に上がり、アリアの身体に飛びついた。
　アリアは声一つ上げなかった。直ぐに店員が酔った男を取り押さえようとするが、男は店員の顔面を殴り倒し気絶させ、アリアの身体をいやらしい手つきで触り始めた。
　それでも、アリアは声一つ上げる事は無い。その表情はヴェールに隠され見て取ることはできないが彼女は何を思っているのか？
　その時、アリアの腕が動いたかと思うと男は宙を舞い舞台の下へと投げ飛ばされていた。
　男の身体はテーブルの上に落ち、料理をぶちまけた。そのテーブ

ルで料理を食べていた頑丈そうな男は持っていたジョッキを投げ飛ばすとアリアに飛び掛った。
「何すんだテメェ！！」
猪突猛進で襲い掛かる男をアリアは難なく避け、男はそのまま舞台の後ろに頭から突っ込んだ。
歓声を上げる人々に交じり、酒の入った男たちが暴れ出す。やがてどんちゃん騒ぎは飛び火して見せ中で殴り合いが始まった。
もちろんエノクたちもその騒ぎに巻き込まれてしまった。
酔った男がイリスのことを強引に抱き寄せ身体を触ろうとする。エノクはその男に殴りかかるが逆に殴られ床を滑り店内をめちゃくちゃにしてしまった。
イリスは抵抗するが男の熊のような手からは逃げられない。そこへアリアが駆けつけ男を殴り倒してイリスを救出した。
「だいじょぶかい、あんた？」
「あ、ありがとうございます」
暴れ出した男たちは次から次へと床に倒れていく。もう店にいた男の半分が床でうずくまっている。その男たちの大半を叩きのめしたのはアリアだった。
「あんたたち男のクセして弱いんだねぇ」
指で男たちを誘うように挑発するアリア。それに逆上した男たちの目は餓えた獣ようにアリアに狙いを定め一斉に襲い掛かる。
アリアはそんな男たちを踊るようにして簡単にあしらっていく。アリアはここに集まる男たちよりも数段強かった。
立っている男はもうほとんどいない。エノクはすでに頭を押えてギブアップしているが、立っている男たちはまだまだやる気十分だ。誰かひとりを残して皆が床に倒れなければこの騒ぎは終わりそうもなかった。
騒ぎはどんどん大きくなり、ついには男のひとりが腰から短刀を抜き、その切っ先をアリアへと向けた。
短刀を持った男は少し酔っているようだが、そのナイフさばきは

一流だった。
アリアを鋭い刃が襲う。それを華麗に避けつつアリアは床で倒れていた男の腰にあった剣を拾い上げると、今まで以上に華麗に、そして舞うように動き、剣を優雅に振るい相手のナイフを弾き遠くに飛ばした。
武器を失った男の首元にアリアの剣がすぐさま突きつけられる。
「す、すまなかった。謝るからゆる、ゆるしてくれ！」
「あたしは弱い男は嫌いだよ」
その時だった。大勢の足音と共に制服を着た男たちが乗り込んできたのは！
「武器を捨てておとなしくしろ！　全員連行する！」
レストランの中に乗り込んで来たのは街を守る治安官たちだった。
それを見たアリアは武器を投げ捨てエノクとイリスに叫んだ。
「あんたたち逃げるよ、一緒に来な！」
エノクとイリスはなにが起きたのかわからないまま床から立ち上がると、アリアのあとをついて走っていた。
「こらー待て！！」
そんな声が後ろから聞こえるが、待てと言われて待つのだったら最初から逃げたりはしていない。
アリアは店の厨房を抜け裏口から道路に出た。そのあとをエノクとイリスはわけのわからないまま着いていった。
後ろからは治安官たちが大勢追いかけてきている。その治安官たちを巻くためにアリアたちは裏道を縫うように駆け抜け、物陰に隠れた。
「あの、アリアさん……うぐっ」
エノクがしゃべろうとしたのをアリアが口を押えた。
大勢の足音が近くを通り過ぎ、離れて行き聞こえなくなった。それと同時にエノクの口からアリアの手が放された。
「……ぷは～っ、苦しかった。あのアリアさんなんで逃げなくちゃいけなかったんですか？」

「あそこで捕まったら、少なくとも3日くらいは牢屋に拘留されちゃうからね。あんたたちも嫌だろ？」
たしかに牢屋でなんか3日間も拘留されるなんてとんでもない。だが逃げたのはまずかったのではないだろうかという考えがイリスの頭を過ぎる。
「あ、あの、逃げたのはまずかったのでないでしょうか？　アリアさんだって、もうこの街に居られないんじゃ？」
「あたし、あたしなら平気さ。今回は3日間しか街にいられなかったけど、もともと旅暮らしでね。今住んでる家だって店が貸してくれてるもんだし」
だからあの家には生活感が全く感じられなかったのだ。
「それよりも、あんたたちはいいのかい、街を追われる形になちゃたけど？」
「ぼくは旅の途中だからいいけどイリスは？」
「私もこの街を一度追いやられた身ですから、別の街に行こうと思ってましたし」
「二人ともまだ旅の途中なのかい、だったらあたしも途中までだけど旅に同行させてもらってもいいかい？」
二人はこの申し出に少し驚いたが、直ぐにいい返事として二人同時に頷いた。
「よし、だったらこの街とも早くおさらばしなきゃね。って言いたいとこだけど、大事な荷持つをあの家に置いて来ちまったから取りに行っていいかい？」
治安官たちに見つからないように家に戻ったエノクたちは、家の中に入った途端ホッと肩を撫で下ろした。
アリアは家に入った途端直ぐにベッドに向かい、その前でしゃがみ込み、ベッドの下から何かを取り出した。それは2本の剣だった。
剣の形は鞘から察するに三日月形の刃を描いているようだ。しかし、剣を2本も所有しているなんて普通ではない。
2本の剣に目を取られている二人にアリアは自慢げに話した。

「あたし2刀流でね。あたしの父も2刀流で、その形見なのさ。あたしの父上は国で一番の剣の名手だった……けど、今はもう母上と一緒に天国で仲良く暮らしてるよ。さ、そろそろ街の外に出ようか」

家を出て、そのまま3人は街の外に出た。ここまで来ればもう治安官たちも追っては来ない。

街を背にして歩き出す3人――。

エノクの旅は新たな仲間を加え、また進み始めた。

宴の夜

パララスの港を出て直ぐ、アリアは顔に付けていたヴェールを取った。この時初めてエノクとイリスはアリアの素顔を見たのだが、その気品漂う美しさは絶世の物で女性のイリスまでも魅了した。
「アリアさんってすごくお綺麗な方なんですね」
「あたしよりも、あたしの母上の方がもっと美人だったよ。国で一番の美女と言われてたくらいだからね」
母親の話をするアリアの顔は終始にこやかで、少し自慢げそうに話していた。
「アリアさんってご両親のことがお好きなんですね」
「父上と母上はあたしがこの世界で最も尊敬する人物だからな」
「アリアさんのご両親ってすごい人だったんですね」
「当たり前だ、なんたってあたしの……いや、いい。それよりもあたしのことを”さん”付けで呼ぶのは止めてくれないか、もっと話し方も気軽でいいから。なぁ、エノクも聞いてたか？」
アリアは後ろを振り向いた。その遠く視線の先には今にも倒れそうなエノクがふらふら歩きで二人のあとを付いて歩いていた。
「聞いてたよぉ～……」
元気の無い返事を聞いて、初めてイリスはエノクが自分たちの後ろを歩いていることに気付いた。そして慌ててエノクの元へ駆け寄り声を掛けた。
「だいじょうぶですかエノクさん、どうかしましたか？」
イリスの言葉にエノクはお腹を押えて擦った。
「お腹が痛いんですか？」
「お腹が……」
「お腹が？」
「空いた」
「……」

イリスもお腹を押えた。たしかに、昼食は騒動に巻き込まれ取り損ねてしまった。しかし、人が住む町や村はまだまだ見えてこない。
　エノクのお腹がきゅるる～と鳴く。本当に哀しそうに泣いた。そして、地面に吸い込まれるようにバタン！
「え、エノクさんだいじょぶですかっ！！」
これにはアリアも驚きエノクに駆け寄り、身体を揺さぶる。
「腹空いて倒れた奴、あたしは初めて見たよ」
身体を揺さぶるも反応は無い。完全に意識を失ってしなったらしい。
　アリアはエノクの身体を軽々と持ち上げると背中に背負った。
「あたしが”これ”を背負っていくけど、村まではあと３０ｋｍはあるよ」
「アリアさん、あれ見てください！」
イリスはビックリしたような顔付きで左方にあった森の先を指差した。
　夕暮れの空の下で、紅い光を浴びながら森の中にそびえ立つ古城。遠くからでも妖々雰囲気が伝わってくる。
　その城を見たアリアはあからさまに嫌な表情をした。
「あんな城さっきまで無かったような気がするけどねぇ」
「そうですか？　もうすぐ日も暮れそうですし、あそこに止めてもらえないでしょうか？」
「でも、この辺りのモンスターは夜に活動するって言うから、外よりはマシかもね」
　――森の中を切り開いて作られた街道を通り城へと向かう。森は静けさに満ち満ちていて、生物の気配が全くしない。それがアリアの警戒心を煽る。
　イリスは周りの雰囲気にも気付かず終始笑顔で歩いていた。
「古そうなお城ですね。アルティエル暦以前からここにあったような……そんなお城ですね」
「たしかに城の造りから見て、イリスの言うとおりなのは間違いないと思うんだけど……」

城の外壁にはツルが巻き付き、所々壁が崩れ落ち、”何か”の出そうな古めかしい城だった。
大きく口を開ける入り口を抜け城の中に入ると、暗い城内を幾本もの蝋燭が照らし二人の行く先を案内しているようだった。
「人がいらっしゃるんですね。良い人だといいんですけど……」
「誰がいるのはたしかみたいだね。けど変だと思わないかい？」
「何がですか？」
「地面は埃だらけで私たち以外歩いた形跡がないよ」
「魔法使いがいるんじゃないんですか？」
「あたしが言いたいのはそういうことじゃなくって、なんつーか生活感があるようで無いっていうか、自分でも何言ってるかわからないけど」
「どういうことですか？」
「だからあたしもわからないんだって」
歩くたびに埃の舞う薄暗い廊下を歩いている途中で、二人はカビ臭い匂いとは別に空気に乗っておいしそうな料理の匂いが鼻に届いたのに気が付いた。
料理の匂いは3人目にも届き、ぱっちりと目を覚ましたエノクはアリアの背中から飛び降り匂いのする方向を探し求めた。
「これって、料理の匂いだよね、すごくおいしそうな匂いだよ。どこからしてるのかな？」
料理の匂いで起きたエノクを見てアリアは呆れ笑いを浮かべている。イリスも少し呆れたような顔をしている。
エノクは近くにあるドアの向こう側から料理の匂いが漏れ出していることをつきとめ、ドアを勢いよく両手で開けた。
部屋から流れ出す料理の匂いに引き寄せられまま、何の警戒心も抱かずに部屋の中へ足を踏み込んだエノク。
「うわぁ～、豪華な料理だよ。ね、二人とも見てよおいしそうだよね？」
「本当ですねぇ」

「あたしはこれを見て不信感が増したけどねえ」
アリアの言うことも正しいかもしれない。長方形の大きな食卓には湯気の立つ料理の数々が食卓の端まで並べられている。これだけの料理を食べるにはそれなりの何十もの人数がいるだろう……だが、先ほどからこの城の中には生物の気配がなかった。
おいしそうな見た目と香りが食欲をそそり、誘惑へとエノクを誘
「イザナ」う。
「ちょっとだけなら……」
「駄目ですよエノクさん！」
イリスに止められなければエノクは食べ物に手を付けていたに違いない。それほどまでにエノクは空腹なのだ。
食べ物にはまだ手を付けてはいないものの、その指先は皿に盛られた肉のスライスとほんの数センチしか離れていなかった。
ぎゅるる～とエノクのお腹は哀しそうに泣いた。そしてエノクの顔も泣き顔だった。倒れるほどの空腹時に食べ物を前にして、それに手を付けられないなど、なんと惨い仕打ちだろうか。
だが、アリアときたら、何の気兼ねもなく料理のつまみ食いをエノクの真ん前で始めたではないか！？
「少しなら構いやしなよ。見つかったらそんときはそんときで謝れば済むことさ」
「アリアさん、駄目ですよ！」
「もう、食べちゃったよ」
アリアにつられてエノクも料理に手をそ～っと手をつけようとしたが、
「エノクさんもまねしないでください！」
とイリスに言われて手を引っ込めた。
その時突然、闇の中から人影がすぅーっと現れた。
「少しなら構いませんよ、どうせ食べきれないのですから」
長身でタキシードをきっちりと着こなした金髪のオールバックの男が3人に向かって恭しくお辞儀をした。

「私の名はリィ伯爵。この城の主です」
頭を上げた白く美しいその顔に付いた紅い唇はやさしく微笑んでいた。
突然の城の主の出現に戸惑いを隠せない3人。中でも一番動揺していたのはイリスだった。
「も、申し訳御座いません、勝手に料理を食べてしまって……」
「別に構いませんよ、料理ならいくらでもあります。それに今宵は100年に1度の盛大な宴の夜なのですから」
この言葉とちょうど同時に部屋中が急に騒がしくなった。
エノクは料理に手をつけながら辺りを見回すと、大勢の人々が部屋中にいた。これにはエノクも驚き食事をする手を止めた。
突如現れた人々は料理を食べ、楽しそうなおしゃべりに華を咲かせていた。
ここに集まった人々は、女性は華やかなドレスで盛装し、男性はタキシードや中には軍服らしい服を着ていた。
リィ伯爵は舞台の上に上がり大きな声で話し始めた。
「100年の一度に行われる今宵の宴は、我々にとって、とても大切な宴であると共に、とても意味のある儀式でもある。遠島から遥々お出でになられた紳士淑女は長旅ご苦労であった。そして、今宵の宴にはゲストとして我らの偉大なる王クロノスのご子息で在らせられるヴァラージュ様もお出でになられている」
リィ伯爵のスラリと伸びた手の向こうには、黒衣に身を包んだ白蒼の髪を持つ若い男性が立っていた。
名前を呼ばれたその若者――ヴァラージュが軽く会場全体の人々に会釈をすると、再びリィ伯爵はしゃべり始めた。
「今宵のゲストはヴァラージュ様だけではない。予定にはなかったが3人のおもしろい客人も来られている」
周りの雰囲気に飲まれて寄り添うように並んでいた3人にリィ伯爵の手が向けられた。
紹介された3人は会場の人々に頭を下げた。そして、またリィ伯

爵はしゃべり始める。
「まだ日も落ちたばかりで、時間はたっぷりある。今宵は存分に楽しもうではないか、さぁ我らの宴を始めよう！」
これを合図に厳かで豪華なパーティに相応しいクラシックの曲を楽団が奏で始めた。
人々は一斉に華やかに踊り始め、エノクたちもここに集まった人々に強引に手を引かれ踊りへと借り出された。
踊りなど踊ったことの無かったエノクとイリスは早々に抜け出し、エノクは料理を食べに、イリスは部屋の端から優雅に踊る人々を見ていた。
イリスの目に映る美しく可憐な女性たちは、その容貌にあった煌びやかな衣装を身に纏い、優雅に踊っている。
自分ももっと美しくて、あんな衣装を着ることが出来たらどんなに幸せだろうか？　目の前で繰り広げられる光景はイリスにとって夢のような光景だった。
着飾った女性にも負けず劣らず、アリアの美しさはこの場でも際立って目立っていた。男の人と優雅に踊りを踊るアリア。彼女はべリーダンスだけでなく、こう言った社交界で踊るようなダンスも完璧にこなし、人々の目を惹いていた。
イリスもそんなアリアのことをいつの間にか両手を合わせて熱い眼差しで魅入ってしまっていた。
アリアは次から次へと男性のエスコートを受けてダンスへと誘われる。そして、笑顔でそれを受けて男性と楽しそうに踊っている。アリアはこういうことに慣れているみたいだった。
ダンスは続き、今度はリィ伯爵がアリアの手を取った。
「私としたことがこんなにも美しい女性の名前を聞き忘れてたとはお恥ずかしい」
「私［ワタクシ］の名前はアリアと申します伯爵様」
アリアはこのような場合の礼儀も心得ていた。
「アリアというのですか、貴女に相応しい名ですね。そして、顔も

この身体も美しい」
そう言って伯爵はアリアの身体を自分の身体に密着させ、首筋に鼻を滑らせ匂いを嗅いだ。
「とてもいい香りだ、噛み付きたくなるくらいにね」
「伯爵様こそ、いい体つきをしていらっしゃるわ」
アリアは色気に満ちた大人の女性の笑顔をリィ伯爵に贈った。
曲が一つ終わりアリアとリィ伯爵は惜しむように身体を徐々に離し、そして指の先が離れた。
「アリア、ダンスのお相手有難う」
「私こそ、有意義な時間が過ごせましたわ」
少し疲れたアリアは食卓へと足を運んだ――。
イリスは小皿に料理を盛り、部屋の隅っこで独り優雅なダンスを見ながら食べていた。
そこへひとりの若者が現れた。
「あなたは、たしか～……ヴァラージュ様でしたよね」
イリスの前の現れたのは黒衣を纏った白蒼の髪を持つ青年ヴァラージュだった。
「君まで私のことを様付けで呼ぶのは、止めて欲しい」
「ですけど、お父様は王様なんですよね。そうしますと貴方は王子様なんですよね、な、なら、敬意を称して様とお呼びするのが……」
「私は王の息子などに生まれたことを悔やんでいる。私は私以外の何者でも無い、様と呼ばれるようなことなど私はしていない。私は様と呼ばれる器ではないよ」
ヴァラージュの瞳は優雅に踊る人々に向けられていたが、そこに何か別のモノを物悲しく想い観ているように思える。いったヴァラージュは何を観ているのか？
「あ、あの、ヴァラージュさんは踊らないんですか？」
「その質問をそのまま君にお返しするよ」
「わ、私は踊りなんて踊ったことがなくて……」
「私も踊りは不得意でね。人前で踊ったことなどないよ」

ヴァラージュがいきなりイリスの手を掴んだ。
「な、なにを！？」
「君となら上手く踊れそうな気がする」
イリスはヴァラージュに手を引かれるままにダンスの輪の中心に飛び込んだ。
「いいかい？　君は私に身を委ねればそれでいいから――」
「ちょ、ちょっと待ってください」
出だしは少しふら付いてしまったが、イリスはすぐにうまく踊ることができた。全てはヴァラージュのエスコートの上手さのお陰だった。踊りが不得意など真っ赤な嘘だったのだ。
　人々の視線が中央で華麗の踊る二人に集中する。イリスの今の踊りはここにいるどの女性よりも優っていたし、ヴァラージュの踊りもどの男性よりも優っていた。今や二人の息はぴったりでなに者も敵わなかった。
　優雅な夜のひと時はこうして過ぎ去って行った――。

光求めて

時は流れ、夜はその色をより濃くし、日中に活動はする生物たちはとっくに寝静まっている時間だった。
だが、この城の中ではまだ宴が華やかに行われている。
エノクたち3人は大分前に疲れが来て、城の主であるリィ伯爵に言って各自部屋を貸してもらい深い眠りについていた。
静かな寝息を立てて眠るアリア――。その部屋に静かな風が吹いく。
揺らめく影が部屋を音も立てず移動し、ベッドの前で止まった。
アリアは首筋に熱い吐息を感じ、ベッドから飛び起き剣を取り構えた。
黒い影が大きな翼を広げるようにしてアリアに襲い掛かる。
腰をすえたアリアから一撃が放たれ、切っ先が暗闇の中で何かを突き刺した。
「ぐはっ……」
揺らめく闇は、逃げるようにして部屋を風のように出て行った。
ランプに火を付け、薄暗い部屋を見回す、自分以外の気配もない――敵は完全に姿を消したらしい。
「嫌な予感はしてたんだ」
髪を掻き上げ床の血痕に目をやった。
「追いかけたいところだけど、イリスが先か……」
アリアはもう一本の剣を取り、腰のホルダーに2本の剣を装着するとランプを片手に部屋を駆け出した。

イリスに魔の手が伸びた。だがイリスは深い眠りに落ち、気付く気配も無い。
真夜中の訪問者はイリスの服に手を掛け上着を脱がせた。
訪問者の眼は見開かれ、狂気の形相を浮かべ、突然叫び苦しみ始

めた。
「ぐあぁぁぁ……」
イリスはベッドから飛び跳ね、床でもがく人影を見た。そこへもう一つの影が上空から飛び掛り床でもがく人影の心臓を剣で突き刺した。
声を出す前に訪問者は息絶え、その身体は塵と化して消えた。
「イリスだいじょぶだったかい？」
「その声はアリアさんですか？」
薄くらい闇の中にいたのは確かにアリアだった。
アリアは持ってたランプに再び火を点けるとイリスの身体を照らし言った。
「早く服を着な」
「えっ……なんで私……」
上着を脱がされていたことに始めて気付いたイリスは、顔を赤らめ服を掴み取ると直ぐに着ようとしたがアリアが、
「ちょっと待ちな」
と言ってイリスに近づき、彼女の首に輝くネックレスを手に取った。
「な、なんですか？」
「なるほどね、これかい……敵の正体がわかったよ」
「敵って、何がいったい……？」
「心臓を一突きにしたのは正解だったね。早く服着な、エノクを連れて逃げるよ」
イリスが服を着ると二人は足早に廊下に出た。廊下には蝋燭の火が灯っているのでランプを使う必要はないので再びランプの火を消して歩き始める。
「あのアリアさん、さっき言っていた敵って？」
「恐らくここはヴァンパイアの城。あたしたち以外は全員ヴァンパイアに違いないね」
「ヴァ、ヴァンパイアですか！？」
「心臓を突き刺して塵になったことと言い、イリスのクロスのネッ

クレスを見てもがいたことと、それに恐らくあたしたちの寝込みを襲ったのは血を求めてってところだね」
「……」
その話を聞いたイリスの顔は瞬く間に蒼ざめ、言葉を失ってしまった。
「今はエノクを起こしてさっさと逃げるのが得策だろうねえ」
「そ、そうです。エノクさんを助けないと！」
二人は急いでエノクの眠る部屋へと向かった。エノクの眠る部屋はここからだいぶ離れた場所にある。３人の部屋の配置は遠く離されていたのだ。
「おかしいと思ったんだ。こんなに部屋があるのにわざわざ部屋を離すなんて……」
「罠だったんですか！？」
「そういうことだろうねえ」
「だ、だったら早くエノクさんの部屋に！」
「わかってるよ。あたしはあんたに合わせて走ってんの」
「え、あ、すいません、私はいいですからエノクさんの所に」
「そういうわけにもいかないでしょ？」
イリスの身体が突然持ち上げられた。痺れを切らしたアリアがこちらのほうが早いと持ち上げたのだ。
「あんたが軽くて助かったよ」
お嬢様だっこでイリスを持ち上げたアリアは地面を力いっぱい蹴り上げ、全速力でエノクの部屋へと向かった。
　前方に人影が見えた。それはこの城の主リィ伯爵だった。
「さっきはよくもやってくれましたね、もう数センチずれていたら即死でしたよ」
伯爵がマントの端を持つと、それは鋭い刃と化した。
　アリアはイリスを地面に落すと、２本の剣を抜いて伯爵に向かって走り出した。伯爵も刃と化しているマントの裾を地面に擦り火花を散らしながらアリアに襲い掛かる。

伯爵はマントをきびし返すようにしてアリアに攻撃を仕掛ける。アリアはその攻撃を1本目で喰い止めた。
刃と刃が交じり合い、二人は相手のことを鋭い目つきで凝視している。どちらも一歩も引くことは無い。
二人とも、もう片方の手が空いている。先に仕掛けたのは伯爵だ。
伯爵の残る手が高く掲げられ、鋭い鋼鉄の爪へと変化し、アリアに襲い掛かった。彼女はすぐさま残る剣で伯爵の手首を切断して、後ろに飛び退いた。
「さすがにヴァンパイアは正面斬って戦うと辛いな。こんなのがあと何十匹と残ってるなんて考えると頭が痛くなるねえ」
「期待を裏切って悪いが、この城に残っているヴァンパイアはほんの数人。宴は終わり皆帰路に着いてしまわれた」
「それは、それは、いい情報をもらえたこと。生きる希望が少しは出てきたわ」
「私を相手にして逃げられるとでも思っているのですか？」
「あら、あたしは自信満々だけど」
ワザとらしく笑ったアリアは剣を握り直し、舞を舞うようにして剣［ツルギ］を振るい伯爵にその牙を向けた。
伯爵もダンスを踊るような軽やかなステップでアリアのお相手をする。ここで繰り広げられている戦いは血生臭い物とは全く違う、美しく華麗な戦いだった。
だが、ダンスの上手い者の足を下手な者が引っ張った。
首が飛んだ。――床に膝を付くアリア。彼女の手にはしっかりと剣が握られ、その剣から紅い雫が床に零れた。
床に膝を付き口の端を吊り上げたアリアの後方で何かが倒れる音がした、言うまでもない、リィ伯爵の首から下だ。
立ち上がったアリアは剣の血を払い落とし鞘に納めるた。
「さあ、早くエノクのところに行くよ」
「あ、アリアさん後ろ！！」
「何！？」

後ろを振り向いたときにはすでに、首を”元に”戻した伯爵の鋭い爪が振り下ろされる寸前だった。だが奇跡は起きた。
伯爵の心臓を後ろから何者かの手刀が貫き心臓を握りつぶした。
口から血の玉を零しながら、狂気の形相でゆっくりと後ろを振り向いた伯爵の目に映った姿は、白蒼の髪を持つ黒衣の青年ヴァラージュだった。
「な、なぜ貴方様が私を……？」
「……」
ヴァラージュは何も答えなかった。
やがて、リィ伯爵は息絶え倒れ、今度こそ立ち上がることは無かった。塵と化してしまったのだから――。
「やはり我々は、人間を生かして帰すことはないのか……」
「あんたなんで仲間のヴァンパイアを殺したんだい？」
「君たちを襲ったからだ」
この返答を聞いた二人の人間は顔を見合わせ戸惑った。
「あたしたちはあんたらの食料でしかない、違うのかい？」
「そうかもしれないな……」
ヴァンパイアの青年は哀しそうな瞳をしていた。それを見たイリスは余計に戸惑ってしまった。
「わからないです。ヴァンパイアは人間の敵なんでしょう？」
「人間も他の動物を食べて生きている。ならば、その動物たちの敵は人間だ。ついて来い、城の外まで送ろう」
「エノクさんは？」
「彼ならあそこで眠っている」
ヴァラージュは向こう側で廊下の壁に寄りかかって眠っているエノクを指差した。
「彼には私の足手まといになると困るので眠ってもらっている、あと数十分もすれば目覚めるだろう。さあ、ついて来い」
「待ちな！　あんたのこと信用できると思ってんのかい？」
切っ先がヴァラージュの後ろから首元に突きつけられた。だが、彼

は動揺すること無くそのままの姿勢で言った。
「君たちは招かれざる客だ。それにこの城はもうすぐ別の次元に消える。そうすると君たちは本当に帰れなくなる」
ヴァラージュは歩き出し、エノクを途中で担ぎ上げまた歩き出した。
アリアは剣を鞘に納めてヴァラージュのあとに続いた。しかし、彼女はヴァラージュのことを信用したわけではない。今のエノクは人質に獲られているようなものだ。迂闊には手を出せないのだから彼のあとを着いて行くしかあるまい。
無言で機嫌の悪そうな顔をして歩いて行ってしまったアリアのあとをイリスも続いた。
薄暗い廊下が何処までも続いた。
「あ、あのヴァラージュさん」
「なんだ？」
「どこかの部屋の窓から外には出られないんですか？」
「窓は全て別次元に繋がっている。帰る道は君たちが通ってきた入り口だけだ」
廊下を歩く3人と対を成すように3人のヴァンパイアが姿を現した。女性のヴァンパイアが1人と男性のヴァンパイアが2人だ。
女性のヴァンパイアが先に口を開いた。
「人間を引き連れて、どこに行かれるつもりなのですヴァラージュ様？」
「この者たちは元の世界へ帰す」
「なんと！？」
ヴァンパイアたちは驚愕した。
「そこを退いて道を開けろ」
「人間をそのまま何もせずに帰すなどヴァンパイアに在らず行為、ヴァラージュ様血迷われたか？」
「私は正気だ、そこを退け。退かぬなら私が相手になる」
「クロノス様の息子だと思っていい気になりやがって」
「止めないかクロノス様の逆鱗に触れるぞ」

男の1人のヴァンパイアがヴァラージュに襲いかかろうとして、もうひとりの男のヴァンパイアがそれを止めようとするが、狂気に狂ったヴァンパイアは鋭い爪を光らせヴァラージュに襲い掛かった。
ヴァラージュはエノクを背負ったまま敵を迎えた。エノクの身が自分に背負われているほうが安全だと、絶対の自信を持っているのだ。
彼の絶対は誠のものだった。ヴァラージュの影が揺らめいたかと思うと、襲い掛かって来たヴァンパイアの心臓を抉り取っていた。
心臓を失ったヴァンパイアは塵になり、消滅した。
それを目撃した女ヴァンパイアは言葉を失い、もうひとりの男ヴァンパイアは激怒した。
「な、なんてことを!?　ヴァラージュ様とて仲間を殺すなど許されぬことですぞ!」
「ならば私を殺せばいい」
冷ややかな瞳で見つめられた男ヴァンパイアの身体は小刻みに振るえ、ややあってヴァラージュに襲い掛かった。
「ヴァラージュ様、御免!」
「……」
「……ぐはっ」
このヴァンパイアもまた心臓を一突きにされ、塵となり消滅した。
一部始終を見ていた女ヴァンパイアは、大きく振るえて地面にへたり込んだ。何かを言おうとするが言葉が出ない。ヴァラージュの力は圧倒だったのだ。
冷たい瞳のヴァンパイアは床の上で震える女ヴァンパイアを見つめたこう言った。
「私の父に今あった一部始終を伝え……私は好きなように生きる、私を殺したくばそれでもいいと伝えろ」
痛いくらいに冷たい瞳で見つめられた女ヴァンパイアは、言葉を発することもできず、ただ頷くだけだった。
ヴァラージュはまた何事もなかったように静かな廊下を歩き始め

た。後ろに続くアリアは髪を掻き揚げ軽く舌打ちをした。
「全くあのヴァンパイアは何考えてんだろうねえ？」
「わかりません。けど、私、悪い人だとは思えなくて……」
「どうして？」
「一緒にダンスして、そう思ったんです」
「あたしには、いい人だろうが、悪い人だろうが、どっちでも構いやしないね。敵じゃない限りはね」
あれ以降3人はヴァンパイアと出くわすことはなかった。そして、入り口が見えて来た。
「私はここまでだ。もうすぐ私たちの時間は終わる。宴は終わりだ。この城も消えてしまう……」
ヴァラージュはアリアに近づくと、背中に背負っていたエノクを預けた。
「あとは任せた」
「わかってるよ、そんなこと」
エノクを背中に背負ったアリアはヴァラージュに何も言わずに行こうとした。それを見てイリスは、
「アリアさん！」
「何ぃ？」
アリアは機嫌悪そうに首だけを後ろに向けて聞いた。
「ヴァラージュさんにお礼言ってください」
「何でぇ？」
「私たちを助けてくれたじゃないですか！」
「それはこいつが勝手にしたことだろ、あたしは頼んでないよ」
「そうだ彼女の言うとおりだ、全ては私が勝手にしたことだ」
そう、全てはヴァラージュが勝手にしたこと……だが、なぜ？
「でも、助けて頂いたの事実です。ありがとうございましたヴァラージュさん」
「……」
お礼を言われたヴァラージュは無言だった。

「ほら、アリアさんも早く」
「……ありがと」
「早く行け、本当に日が昇りこの城が消えてしまう」
ヴァラージュの言葉に促され二人は世界を繋ぐゲートを潜ろうとした。だが、アリアは途中で振り返り、
「本当にありがとうございました。さようならヴァラージュさん」
そう言ってヴァラージュの見守る中、二人は外の世界へ帰って行った。
「私もいつか、陽光の下を歩ける日が……」

外に出ると東の空が少しだけ光を発していた。
徐々に登る太陽――そして日の光を浴びた古城は少しずつ空間に溶けるようにして跡形も無く消えた。全ては夢の中の出来事のように……。
「また、会えるといいな」
「あんた、あのヴァンパイアに惚れたの！？」
「そんなんじゃないです！！　ただ、いい人だったから」
「私はヴァンパイアなんてもう御免だね。でもダンスと料理は良かったけどね」
アリアの耳元でエノクの声が、
「う……ううん……あれ？」
「あんたホントによく寝てたよね」
アリアに地面に降ろされたエノクは、眼を大きくして辺りを見回した。
「あれっ？　城は、城はどこにいったの？　ここどこ？」
「城ならとっくに消えちまったよ」
「あのお城ヴァンパイアのお城だったんですよ」
「ヴァ、ヴァンパイアーっ！！」
目と口を大きく開けて叫ぶエノクの肩に腕を回しアリアは歩き始めた。

「詳しい話は歩きながら話してあげるよ」

庭園

3人は次の町に行く道すがら、大きな花畑を見つけ立ち寄っていた。
「綺麗な花がいっぱい咲いてますよ。ああ、いい香りが風に運ばれてきます」
花畑の真ん中で大きく両手を広げ、回転し踊るイリスを遠くで見ながらエノクはアリアに話し掛けた。
「なんでこんなところに花畑があるんだろうね？」
「あれを見てごらん、遠くに屋敷が見えるだろ？　ここは恐らくあの屋敷に庭ってとこだろうね」
「あっホントだ。じゃあ勝手に入っちゃってまずかったかな？」
二人が話していると遠くの方から馬の蹄［ヒヅメ］の音が聴こえて来た。それはやがて大きくなり、話をする二人の前に黒馬に乗ったスラリとした青年が現れた。
「こんにちは、お3人は旅の方ですか？」
後ろめたそうな表情のエノクの視線が黒馬に乗った青年に向けられた。
「あ、はい……あの、ここってあなたの庭ですか？」
「そうですが？」
黒馬が現れたのを見てイリスが飛んで駆け寄って来た。
肩で上下に揺らしながら膝に手を付いたイリスは、ややあって黒馬に乗った青年に何度も頭を下げ始めた。
「ご、ごめんなさい。ここってあなたの庭だったんですか！？　あ、あのそうでしたら、本当に申し訳ありませんでした。勝手に庭に入って、踏み荒らしてしまって……」
「いいんですよ。花に囲まれて踊るあなたは、とても素敵でしたよ」
この言葉を聞いたイリスは、沸騰してしまったように顔を真っ赤にして下を向いてしまった。イリスはすぐに顔に出るタイプなのだ。

そんなイリスを見て青年は微笑むと、
「どうですか？　私の屋敷でおいしいハーブティとブランチをご馳走しますが、お出でになられますか？」
「ぜ、ぜひ！」
真っ先に答えたのはエノクだった。そんなエノクを見てアリアは呆れた顔をして髪の毛を掻き揚げた。
「どうせブランチが食べたくてしようが無かったんだろ。まったくあんたって奴は食欲が大せいだねえ」
「いいじゃないか別に」
エノクは顔を赤くしてほっぺたを膨らませるとそっぽを向いてしまった。核心を突かれての照れ隠しの行為である。
アリアはそれを見て笑い、イリスも笑い、それにつられて青年も笑った。
「ははは、おもしろい人たちだな」
暖かな風がやさしく吹き、ここにいる者たちの心をそっと包み込んだ。
青年は自分の屋敷を見て少し考え込んだ。
「さて、屋敷に向かいましょうか……と言いたい所ですが、屋敷まで距離がだいぶあるので、お二人のどちらか乗馬はできますか？」
これはイリスとアリアに聞いたもので、その返事をしたのはアリアだ。
「あたしは乗馬が得意だよ」
「それはよかった」
と言って青年は馬から降りると、
「では、あなたが馬の手綱を持って、その後ろにあなたが乗ってください。男の僕たち二人は徒歩で行きましょう」
男二人組みは徒歩で、女二人組みは馬に乗り歩き始めた。
イリスは馬に乗ったのはこれが初めてで少しウキウキして、楽しそうな表情をしていた。
「うわ～、すごいですね。なんだか背が高くなった気分です」

「イリスは馬に乗ったのはこれが初めてなのかい？」
「はい！　だからうれしくて」
馬に乗り前を進む二人を羨ましそうに見つめるエノク。
「ぼくも馬に乗ったことないのになぁ」
「では、あとで乗せて差し上げますよ」
「え、本当ですか？」
目を爛々と輝かせ、エノクは本当にうれしそうな顔していた。
「その前に屋敷で少し休憩しましょう」
花々に囲まれた屋敷の中は光が差込み、色取り取りの調度品が飾られ外のように華やかだった。華やかと言っても、うるさくなく、静かな気品を思わせるデザインがされていた。
庭に比べてさして大きな屋敷ではなかったが、1人で住むには少々大き過ぎる。壁には美しい女性の肖像画が飾られ、恐らくこの女性が青年の恋人か妻に違いない。
イリスは美しい女性の肖像画の前に立ち、
「この人と一緒に住まわれているんですか？」
と尋ねると、青年は後ろからゆっくりとイリスの横に来て、愛しいもの見るように肖像画を見つめた。
「この女性は私の妻です。この屋敷のデザインも彼女の趣味だったのですが……今はもう亡くなってずいぶん経ちます」
亡くなっていると聞いてイリスははっとした表情をしてしまった。
「ご、ごめんなさい」
「別に謝らなくてもいいですよ。妻は私と一緒にこの屋敷にまだ住んでいますから……さあ、こちらの部屋でブランチをしましょう」
青年の案内した部屋には、白いテーブルクロスの掛けられたテーブルと椅子が6脚並べられていて、テーブルの真ん中には綺麗な花が花瓶に生けてあった。
エノクたちが椅子に座っていると、青年はハーブティを持って現れた。
「料理はすぐにできますから、それまでこれを飲んでいて待ってい

てください」
そう言って再び青年は姿を消した。
ハーブティはやさしい香りがしている。一口飲むと香りがふぁあっと鼻を抜け気持ちを幸せに満たしてくれるようだった。
ややあって、青年が香り立つ料理を持って現れた。
「お待たせしました。昨日の夕食のパスタをスープに作り直してみたのですが、お口に合うか……？」
テーブルに料理と食器を並べ終わると青年はゆっくり席に腰を降ろした。
「さて、それでは料理を食べながら自己紹介でもしましょうか。私の名前はディートリッヒ、今はこの庭園で花を育てて生計を立てています」
「わ、私の名前はイリスです」
「あたしはアリア、見ての通りの踊り子。ほらっエノクも食ってないで挨拶しな」
アリアは横に座るエノクの背中をバシッと叩いた。
口いっぱいに食べ物をほお張っていたエノクは一気にゴクンと飲み込み咳き込んでしまった。
「ごほっ、ごほっ……」
「まったく誰も取りやしないんだから、ゆっくり食べよ」
「だって、おいしかったから……」
ディートリッヒはそんな光景を見て微笑みを浮かべた。
「ほんとに楽しい人たちだ。数日前に来たアイオンという詩人も楽しい人でしたが、あなたたちも十分負けていませんよ」
「アイオンだって！？」
思わずエノクはテーブルに手を付け身を乗り出してしまった。
「どうかなされましたか？　アイオンと言う方とお知り合いか何かで？」
「知り合いもなにも」
エノクはオイオンとの経緯［イキサツ］を話して聞かせた――。

「なるほど、そのようなことが……たしかあの詩人もクラーケンに襲われて友人と離れ離れになったと、言っていたような……」
「あたしもその話は初耳だったよ」
アイオンと別れてしまって、そのことがずっと気がかりだったエノクであったが、まさかこんなところでアイオンの話が聞けるとは思ってもみなかった。
「僕がアイオンと会ったのは2日前のことです。旅のお話を聞かせていただいたり、美しい琴の演奏を聴かせていただきました」
「アイオンがどこに行くか聞いてませんか？」
「たしか……あなたを探しつつ旅を続けて、この屋敷から南西に位置する龍神湖に行くと言っていましたが……」
「龍神湖ですか？」
龍神湖と言えばこの世界でも有名な湖であるが、エノクに取っては初耳の名前だった。そんな彼に龍神湖に一度だけ行ったことがあるアリアが説明をしてくれた。
「あたしは小さい頃だったけど、一度だけ行ったことがあってさ、大きくて綺麗な湖だったねえ。水が澄んでいるから大きな魚がいっぱい住んでるのが見えるし、湖の底まで見えるんだ。その湖の水源は遠く離れた山の上にあって、そこに七英雄の竜王ザッハと龍族たちが住んでいることから、龍神湖って名前がついたらしいね」
深く頷きながらイリスはアリアの話を関心して聞き入ってしまっていた。
「アリアさんって見た目と違って、いろいろと教養をお持ちですよね」
「見た目と違ってはよけいだよ。こんなに気品に溢れてるじゃないか」
そんなことを言うアリアをエノクは横目でチラッと見ると、本人に聴こえないようにボソッと呟いた。
「……気品より色気に溢れてると思うけど」
「エノクも言うじゃないか、なんならあたしが可愛がってあげよう

か？」
聴こえないように言ったつもりが、ばっちり聴こえていたらしい。
「遠慮します。それよりも、龍神湖の水源に竜王ザッハが住んでるって本当なの？　だったらぼくはその山に行かなきゃいけない。七英雄に会わなきゃいけないんだ」
エノクの表情は何時に無く真剣な表情をしていた。エノクはここで旅の目的を再確認したのだ。
「エノク、あんた男らしい表情してるじゃないか。そーいやー、あんたの旅の目的って聞いたことなかったねえ」
「そうです、私も聞いたことなかったです」
「僕もそのお話には興味がありますね」
3人の視線がエノクに集中した。
「ぼくは大魔王カオスを倒すために旅をしてるんだ」
「！？」
2人はびっくりして言葉も出ないが1人だけは違った。アリアだ。
「見た目と違ってすごいこと言うんだねあんたは。男らしい子は好きだよあたしは……でもね、剣をあんたが抜いたのを見たことはないけど、あたしより弱いのは見た目でわかるよ。あたしに勝てないような男じゃ、大魔王に会う前に死んじまうのがオチさ」
「わかってるよそんなこと！！　だから、ぼくはもっと、もっと強くなって……」
「エノク、剣を持って外に出な」
「えっ！？」
「聴こえなかったのかい？　剣を持って外に出るんだ、現実を教えてあげるよ」
アリアはそう言って飲みかけのスープを置いて外に出て行ってしまった。エノクはその後を追って、壁に立て掛けて置いた剣を取り出て行こうとした。
「エノクさん！？」
イリスが呼び止めたがエノクは振り向きもせず無言のまま外に出て

行ってしまった。
　屋敷の外へエノクが出るとアリアは既に2本の剣を構え待っていた。
「いつでも掛かってきな」
エノクが剣を抜いた。すると、ティンカーベルがしゃべり始めた。
「エノクったら、たまには私を抜いてよねぇ～。ヒマでヒマでしょーがなかった～」
しゃべる剣を初めて見たアリアはビックリして構えていた剣の切っ先をゆっくりと地面に下ろした。
「しゃべる剣なんて初めてみたよ。名前もあるのかい？」
「あたしの名前はティンカーベル、傀儡子シモンによって命を吹き込まれた剣だったりしま～す」
「！？」
アリアが驚き、その次にエノクの後を追って来たイリスは、偶然ティンカーベルが言った発言に居合わせ声を荒げてしまった。
「ほ、本当ですか！？　そ、それって本当の本当でしょうか？」
「本当の本当だよ～、あたしは七英雄の一人、傀儡子シモンの最高傑作なんですからね。あたしが付いてればエノクはどんな敵にも向かうところ敵なし！」
アリアは剣を構え直すと鼻で笑った。
「おもしろいじゃないか、大魔王を倒すってのも、あながち嘘じゃないみたいだねえ。シモンの剣を持ってるってことは、シモンに見込まれでもしたのかい？」
アリアが右手で持つの剣の切っ先がエノクの顔に向けられた。エノクに対する挑発行為だ。だがエノクは挑発には乗らなかった。乗ったのこの娘だ。
「当ったり前じゃない。このエノクは今は弱っちいけど、これでも七英雄の末裔なんだから！」
ガシャン！　アリアは思わず構えていた2本の剣を落とした。イリスは放心状態に陥り、蚊帳の外にいたリードッリッヒまでもが言葉

を失った。
――長かった。チョウチョが花畑の上を飛び交っている……とてつもなく長かった時間が過ぎ去り、イリスが叫んだ！！
「ほ、本当ですかそれは～っ！　え、えっ！　どういうことですか！！　何がどうしたんでしょうか！？」
「落ち着きなよイリス。まったく……本当なのかいエノク、今の話は」
エノクは小さく無言で頷いた。
「ふふん、おもしろいじゃないか。エノクと旅に出て正解だったねえ。さあ、あんたの実力見せてみな！」
エノクは腰をしっかりと据えて剣を構えると、ティンカーベルに言った。
「今回はぼくの力だけで戦うから」
「しっかりやってね。……重いから」
「ぐっ……」
剣の重さが本来の重さに戻ってしまった。ティンカーベルが力を抜いたためだ。だが、エノクは自分の力で戦うと決めた。
一度地面に付いてしまった切っ先をゆっくりと、ふらふらしながら持ち上げるとエノクは相手の目をしっかりと見据えた。
「二人ともう止めてください！！」
この言葉が逆に決闘の合図となってしまった。
剣を両手で天へ掲げ太陽を背に受けて走るエノク。
「うりゃーっ！」
アリアはエノクを挑戦者を持ちうけた。核の違いがそこにはある。
アリアはいとも簡単にエノクの剣を受け止めた。しかも機嫌の悪そうな表情をして……。
「あんた力を抜いてんだろ、そんなんじゃなくて、あたしを殺る気で掛かってきな。どうせあんたの腕じゃ、あたしを切れやしないんだから」
前方に宙を回転しながらエノクの後ろに回ったアリアは、土埃を上

げながら滑るように後ろに後退し間合いを取ると、一本の剣の切っ先をエノクに向けた。もう一度掛かって来いという合図だ。
再びアリアに挑んむエノク。剣ではなく足が見えた。――次の瞬間辺りが真っ暗に意識が途切れてしまった。
宙を飛ばせれ地面に叩きつけられたエノクから砂煙が上がり、その傍らには回し蹴りでエノクダウン気絶させたアリアが凛とした態度で立っていた。
「まったく、これじゃあ大魔王なんて倒せないよ」
髪の毛を掻き上げうんざりしているアリアの背中を誰かが平手打ちでバシッと叩いた。アリアが後ろを振り返るとそこにいたのはほっぺを赤くしてフグのような顔をしたイリスだった。
「なんてことするんですか！！」
「ちょっと力試しただけだったんだけど、この子強くなるよきっと……。さてと、エノクの目が覚めるまでここに留まるしかないねえ。そうだ、スープ食べかけだった」
アリアは剣を鞘に戻すと屋敷の中へ戻ってしまった。
「もう、待ってくださいアリアさん！」
倒れたエノクを強引に引きずりながらイリスはアリアの後を追った。

偽りの亡霊

ふと目が覚めた。ベッドの上で――。
「えーと、たしかアリアにやられて……そうか、屋敷のベッドで休ませてもらったんだきっと」
ベッドから飛び降りたエノクは窓の近くまで行き外の景色を眺めた。
「夜になっちゃたのか」
外は真っ暗で、だいぶ長い時間気を失っていたらしいことがわかる。
まだまだ眠い目をこすりながらエノクはもう片方の手でお腹を擦った。
「少しお腹が空いてるかも」
ぐぅ～とお腹が鳴いた。たしかにお腹が空いてるらしい。そこでエノクは部屋の外に出て食べのもを少しもらうことにした。
ドアを開けろうかに出た。屋敷内は静けさに満ち溢れていた。
「もう、だいぶ遅い時間なのかな？」
気を失ってしたので時間の感覚があやふやになってしまっている。だが、この静けさから考えて、みんなもう寝てしまっているのかもしれない。それとも屋敷が広いのでエノクのところまでしゃべり声などが聞こえてこないのかもしれない。結局のところ時間はさっぱりわからない。
時計をまずは探そうとエノク考えた。もし、深夜だったら食べのもをわざわざ催促するのは少し気が引けるからだ。
「時計、時計、時計……どこかで見た記憶があるんだよね。あ、そうだ！」
食卓にたしか柱時計があったことを思い出した。ここが2階だということは先ほど窓から外を見たのでわかっている。
廊下は一本道なので、このまま行けば階段があるに違いない。だがしかしエノクの足は止まった。
「……人の声？」

右手にある開かれた窓の外から男性の声が聞こえた。エノクは窓の外を覗いて見た。
静かな漆黒の空の下、屋敷の裏庭に咲く夜香草の中で男女が二人見詰め合っている。ひとりはディートリッヒ、もうひとりは……！？
「（あの人は！？）」
女性の顔を見たエノクは息を潜め目を大きく見開いた。そこにいた女性にエノクは見覚えがあった、……だが、実物を見たわけではない、絵の中でその女性を見た。
微笑を浮かべる女性の白い手がディートリッヒの頬にやさしく触れる。
「ディートリッヒ、今宵も会いに来てくれて本当にうれしいわ」
「当たり前さ、貴女がいなければ僕は生きていくことができない」
「ああ、ディートリッヒ」
エノクは思わずその場にしゃがみ込み窓から見えないように自分の姿を隠した。
息を潜めつつ、――けれで本当は声を出したかった。
「（だって、あの人死んだんじゃないの？）」
亡霊か、それとも別のものか？　エノクが目にした女性は絵画に描かれた女性と瓜二つ。だが、その女性はディートリッヒの言葉が正しければ”亡くなって”いる筈である。
恐る恐るながら窓枠に指をかけてゆっくりと頭を出し、窓の外を見る。ちょうど外ではディートリッヒと女性が抱き合うシーンだった。
ディートリッヒは目を瞑り自分の妻であるユリアのことを抱きしめていた。決して放しはしない、力強く、強く抱きしめていた。
月明かりは二人だけのためにある。その光景を外の世界から眺めるエノク。
「（見てちゃまずいかな？）」
そんなことを考えていたエノクは再び自分の目を疑った。
ユリアの身体が突如別のものに変わった。――青白い鱗に覆われ

た身体から伸びる足の代わりにあるとぐろ巻くしっぽ。
「（モンスター！？）」
そうエノクが思った次の瞬間、怪物とエノクの視線が重なった。怪物はすぐさま忽然と消えてしまった。
残されたディートリッヒは異変に気づき辺りを見回した。だが、ユリアの姿は消えてしまっていて、その代わりにふと見上げた窓にエノクが自分のことを見ていることに気づいた。
「あ、あの見る気はなかったんですけど……」
少し気まずそうにエノクがしゃべり始めたが、ディートリッヒは恐い面持ちで視線を逸らし無言でその場から立ち去ってしまった。
「隠れて見てたのは悪かったけど……」
だが、あれは確かにモンスターだった。蛇のような下半身を持ち、上半身は女性の身体だの怪物。きっとラミアやメデゥーサと呼ばれる蛇の化け物たちの仲間かもしれない。
すぐさまエノクは屋敷の裏庭へと急いだ。すでにお腹のことなど頭にはなかった。
白く底の丸い筒型の花を咲かせる夜香草。芳しい匂いが風に乗り大地を駆け巡る。
裏庭には怪物のいた痕跡は全く残っていなかった。それでもエノクは根気強く辺りに何かがないか捜し歩いた。
だが、結局何も見つからなかった。仕方なくエノクは自分の部屋に戻ることにした。
ベッドの中にもぐり、怪物のことを考えてみる。そして、やがて意識が薄れ深い眠りに落ちてしまった。

翌朝、エノクが起きるころにはすでに朝食の準備は終わり、他の者は皆朝食をとっていた。
エノクは椅子に座り少し不機嫌そうな顔をして言った。
「どうして、起しに来てくれなかったのさ？」
この発言は朝食をみんなが先に食べていたことによる不満だ。それ

を聞いたイリスはすごく慌てた。
「あ、あの、それがですね。エノクさんを私が起しに行こうとしたらアリアさんが……」
わなわなしてしまっているイリスはアリアの方を向き、エノクもそれに合わせて振り向いた。アリアはちらっと二人のことを見て食事を続けながらしゃべった。
「どうせ腹が減ったらエノクのことだから降りてくると思ってさ」
「ぼくのこと食い意地が張ってるみたいに言わないでよ！」
「みたいじゃなくて、そうだろ？」
「……うっ」
反論はできなかった。エノクには自覚があった。昨晩だって、お腹が空いて、それで……。
「あ、そうだ！」
エノクはあることを思い出した。そして、ディーットリッヒに視線を向ける。だが、彼は気づかないのか、無視をしているのか無言で食事を続けている。
イリスはある疑問が頭の中に生まれていた。
「（どうしてディートリッヒさん、エノクさんが来たら突然無口になちゃったのかな？）」
そう、ディートリッヒはエノクが食卓に来る前までは昨日と同様にイリスやアリアと会話を楽しんでいた。それがエノクが来た途端にピタリと口を閉ざしてしまった。
そのことについてはアリアも気づいている。だが、気には留めるが、深く詮索しようとは思わない。
エノクは昨日のことを聞こうとしたが、ディートリッヒはナプキンで口元を拭うと、使った食器を持って台所に行ってしまった。
明らかにディートリッヒはエノクのことを避けていた。昨晩のことで怒っているのか、それとも触れられたくないのか？
食事の手を止めイリスがエノクのことを真剣な眼差しで見つめた。
「エノクさん、ディートリッヒさんと何かあったんですか？」

どうしても気になってしまった。こういうことを目の前にするとイリスはいてもたってもいられなくなる。お節介や余計なお世話と言われるかもしれないが、イリスは少しでも自分が人の役にたてればと思ってしまう。

正直エノクは昨晩のことを話すかどうか迷っていた。もし、ディーットリッヒが自分が覗き見たことに怒っているのならば、他言するのは控えたいし、けれど怪物のこともある。そもそもディーットリッヒは妻だと思っている者の正体が怪物だということを知っているのか？　知っていながらも怪物と……それとも騙されているのか？　エノクが見たのは二人が抱き合っているのだけで、怪物がディーットリッヒを襲おうとしている場面ではなかった。

結局エノクは昨晩見たことは語らなかった。

「別に……昨日はずーっと寝ていたから」

少し言葉に詰まった。そのことに気づいたイリスは疑いを抱く。

「本当にですか？　エノクさん嘘ついてますね？」

嘘をついているとイリスは断定した。それほどエノクは気持ちの動揺などが身体に出てしまっているということだ。

少しの間沈黙してしまったエノク。彼は言い訳や嘘が得意ではない。

「……もう少しぼくの中で結論が出たら話すから、今は聞かないでくれるかな？」

それ以上は何も語らない。食事を終えてもなおエノクは何も語らなかった。

空いたお皿を他人の分までイリスは回収して、台所へ運んでいった。エノクとアリアがこの場に残された。

「結論は出たかい？」

テーブルに両ひじを付きながらアリアは聞いた。その態度は興味がないのにわざわざ聞いた感じがする。そうアリアには興味はなかった、けれどいちよう聞いた。エノクが聞いて欲しいような顔をしていたからだ。

「今のままじゃ結論は出ないと思う、頭の中だけじゃ無理なんだと思う」
「なら、行動に出てみな。あたしにあったことをそのまま話してみるとか」
「うん、そうだね」

台所についたイリスは辺りを見回したがディートリッヒの姿はなく、洗い終わった食器が乾かしてあるだけだった。
「ディートリッヒさん……いないのか」
本当はディートリッヒと話したいことがあったのだが、台所には姿が見当たらなかった。
仕方なく洗い物を始める。ディートリッヒには食べ終わったら流し場にそのまま置いておくように言われたが、イリスにはそんなことはできない、お世話になりっぱなしは悪い気がしてしまう。
食器を洗い再び食卓にイリスが戻るとエノクとアリアが何かを話し終えたあとで、席を立ちどこかに行こうとしている最中だった。
「イリスも来るかい？」
「え、どこにですか？」
いきなりアリアに来るかと聞かれて、イリスは戸惑ってしまった。どこに行くかもわからないのに行くとは言えない。
「エノクと一緒に探索に行こうと思ってね、イリスも来るかい？」
「あ、私はいいです。お二人で行って来てください」
とくに断る理由もなかったがイリスはとりあえず断った。
「じゃあぼくたちちょっと出かけてくるから」
「行ってらっしゃい」
エノクとアリアはイリスの前から姿を消した。残されたイリスは何もすることがなく貸してもらっている部屋に戻ることにした。
階段を上りながらふと考えごとをする。
「朝食を食べたら出発するって言ってたのに」
本当は朝食を食べ終えたあとすぐにこの屋敷を出る予定だった。で

も、アリアはそんなことなど忘れてしまったのか、エノクと一緒に出かけてしまった。
「自由気ままな人……」
そう呟き廊下の窓から見える景色をふと眺めた。
そこには屋敷の裏には広がる庭園が広がっていた。でも、屋敷の正面にあった庭園とは違いこじんまりとしていて、花もつぼみで咲いていない。少し寂しげのする庭園だ。
ぼーっとしながらイリスが流れる雲を見ていると、裏庭にエノクとアリアがやって来た。
エノクは地面を指差してアリアに説明している。
「ここら辺にいたんだよ二人が」
「で、エノクに気づいた化け物はどっちに逃げていたんだい？」
「逃げて行ったんじゃなくて、消えちゃったんだよここで」
二人の会話はイリスの元まで届きはするが、イリスには何のことを言っているのかまでは理解できなかった。
「（二人ともそこで何してるんだろ？）」
やがてエノクとアリアはどこかに行ってしまったのでイリスは再び部屋へと歩き始めた。
部屋についたイリスはベッドにどっしりと腰掛けた。
「私も行けばよかったかな？」
二人が裏庭で何をしていたのかとても気になってしまった。でも自分がついていったら足手まといになるだけだと思い、少し気分が沈んだ。
昔からそうだった。人のためなどに何かをしようとすればするほど、回りに迷惑をかけたり、自分が足を引っ張ってしまっていた。愚図でのろまで小さい頃からよく男の子にからかわれいた。自分が何かの役に立つなど到底思えない、今だって本当はエノクの旅に着いてきてしまって、きっとエノクは迷惑しているに違いない。でも自分はひとりじゃなにもできなくって……そんな自分がイリスは嫌いだった。

部屋の中で何かがガタっと動くような音がした。すぐに目をやるが何もない。不信に思いそこに近づいてみるが変な所は何もなかった。

部屋全体を見渡すがやはり何もない。けれどイリスは感じていた。

「誰かいるの？」

思わずそう聞いてしまった。目には見えないけれどイリスは何かの存在を感じていた。

誰かに見られているような気がする。けれど、部屋には自分以外いない。ではこの感覚は？

イリスはこの屋敷の中に初めて入ったときも今と同じ感覚を感じていた。誰かに見られている。その時はすぐに消えてしまったので気のせいだと思い、それ以降は忘れていた。けれど……。

「（今度は気のせいなんかじゃない、ずっと誰かに見られている感覚が続いてる）」

ガタッ！！　何かが動いたような音が再びした。すぐにそこを振り向くがやはり何もない。

風が吹いた。イリスの背中の辺りを通り過ぎるような風が吹いた。不信感が増した。風を感じた。けれど、窓もドアも閉まっていて、風が吹き込む場所など存在しなかった。

今度はガタガタと部屋中の物が目ではっきり確認できるほどに揺れた。それは3秒ほどで治まり止まった。

「誰かいるんでしょ？」

呼びかけには誰も反応しない。そして、イリスの感じていた気配はどこかに消えてしまった。

ことの終えたイリスは急に恐くなり、部屋を飛び出して行った。

貴女に捧げる花束

書斎で本を読むディートリッヒの前にエノクとアリアが現れた。
「何かご用でしょうか？」
本にしおりを挟み膝の上に乗せた。エノクの表情からしてこの二人が自分のところに来た理由は察しが付く。が自分から話すようなことはしない。
「あたしたち本当は今朝旅立とうと思ってたんだけどね、今日一日お世話になっていいかい？」
「そのようなことでしたら、何日でもごゆっくりして行ってください」
笑顔を浮かべるディートリッヒであったが、エノクがしゃべった途端に警戒の色を浮かべた。
「あの、昨晩のことなんですけど？」
「昨晩ですか？」
「屋敷の裏で会っていたのは誰です？」
「屋敷の裏で？　昨晩は屋敷の裏など行ってはいませんが……夢でもご覧になられたのでは？」
正直夢だと言われてしまっては身も蓋もなかった。もしかしたら夢かもしれないとエノク自身も半信半疑だったからだ。
口を摘むんでしまったエノクを押しのけアリアが一歩前へ出た。
「あんたの会ってた奴がヘビ化け物だってことは知ってるのかい？」
「ば、化け物なんてとんでもない！！　あれは僕の妻だ！！　……くっ」
突然ディートリッヒが顔を伏せて口を閉ざした。いつ怒りのあまり口が滑ってしまった。
「やっぱり、会ってたんじゃないか？　でも、あんたの妻は死んだはずだろ？」
「もう、何も聞かないで頂きたい。もし、これ以上何を言われるの

であれば、すぐに屋敷を出て行ってくれ！」
怒鳴り声に押されるようにしてエノクとアリアは部屋をあとにした。
部屋に残ったディートリッヒの心には動揺が残った。
「（あれは僕の妻だ。ユリアがこの世に戻ってきてくれたんだ）」
ディートリッヒはあれが妻だと信じて疑いもしない。彼はユリアがヘビの怪物に変じたことを知らない。

部屋を飛び出したイリスは何かに襲われていた。そして、ついに廊下の隅へと追いやられて身動きが取れなくなってしまっていた。
「何なんですか？」
目にに見えない何かに訴えかけるが答えは返ってこない。代わりに何かがイリスの身体に飛び込んで来た。
薄れてゆく意識の中でイリスはやさしい女性の声を聞いた。
「ごめんなさい、手荒なまねをしてしまって……少しの間、身体を貸してもらいます」
ぷっつりとイリスの意識は途切れた――。

時間が過ぎていき、各自屋敷の中でゆったりとした時間を過ごした。
夕食の時間になり、エノクの部屋のドアを誰かが叩いた。
「エノクさん、夕食の準備ができましたよ」
その声はイリスのものだった。
エノクはすぐさまベッドの上から飛び上がり、ドアを開けた。
「夕食の準備ができましたから、エノクさんも早く下に来てください。アリアさんはもう下で待ってますよ」
「あ、うん、すぐに行こう」
食卓に行くとアリアとディートリッヒが楽しそうに会話をしながら、エノクとイリスを待っていた。
部屋に入ってきた二人を確認したアリアは、
「じゃあ、食べようか」

と言って、二人が席についたのを確認して料理を口に運んだ。エノクも料理を口に運んでうれしそうな顔をした。
「このグラタンおいしいよ」
「あ、それ私が作ったんですよ」
今日の夕飯はイリスも手伝いディートリッヒと一緒に作ったものだった。
「イリスさんは料理がとてもお上手で助かりましたよ」
ディートリッヒに笑顔を贈られたイリスはうれしそうに顔を真っ赤にした。
「そ、そんなほとんどディートリッヒさんが作ったんですよ。でも、アリアさんも一緒にどうですかって誘ってんですけど……」
「あたしは料理は苦手でねえ」
「ふ～ん、やっぱりアリアは料理が下手なんだ」
エノクの腹に横に座っているアリアは肘打ちを喰らわした。
「やっぱりはないだろ？　あたしは苦手なだけで、うまい料理なんていくらでも作ろうと思えば作れるさ」
「本当ぉ～？」
エノクは肘打ちを喰らってもなお、アリアの顔を細い目をして見ていた。
「まだ疑ってるのかい、あんたは？」
「当たり前だよ。じゃあ明日の朝食はアリアが作ってよ」
自慢げにアリアは鼻で笑い、エノクを高い視線から見下ろした。
「ふふ～ん、望むところじゃないか、明日の朝食はあたしが作ってやろうじゃないか！」
「アリアさんが明日の朝食作ってくださるんですか！？　楽しみです！」
両手を合わせているイリスに見られて、アリアはしまったと内心思った。エノクには啖呵を切ったが、本当は料理なんてものは生まれてから一度もしたことがなかった。
「（まずいね、今からなかったことにしてくれなんて、頼めやしな

いよ）」
ふとアリアが横を見るとエノクが子憎たらしい顔で自分のことを見ていた。
「楽しみにしてるよ」
その言い方もどこか悪意の感じられる憎ったらしい言い方だった。
「うまいもんで腹いっぱいにしてやるよ」
「僕も楽しみにしてますよ」
ディートリッヒは笑顔を浮かべながらアリアのことを見ていた。アリアはもう後戻りはできなかった。
　このあとも明るく和やかな会話は続き、エノクとディートリッヒのわだかまりもいつの間にかどこかに行ってしまっていた。
　食事のあとも4人は会話を楽しみ、やがて夜も更けて来て各自は部屋に戻って休むことになった。
「皆さんとお話できてとても楽しかったですよ。では、おやすみなさい」
3人はディートリッヒにお休みの挨拶をして、2階の部屋に戻ることにした。
　部屋に戻ったエノクがベッドの上に寝っ転がり、ぼーっとしていると、コンコンと誰かが部屋をノックする音が聞こえた。
　誰が尋ねて来たんだろうと思ったエノクはベッドから飛び起きて部屋のドアを開けた。すると、そこにいたのはアリアだった。彼女の腰には剣が掛けられていた。
「どこか行くの？」
「どこか行くのじゃないよ、見張りに決まってんだろ？」
「はぁ？」
「ディートリッヒが深夜どこかに出かけないか見張るんだよ」
「ああ、って見張り！？」
エノクは思わず大きな声を上げたが、すぐにアリアが口を手で塞いだ。
「しーっ、大きな声上げるんじゃないよ」

ゆっくりとアリアの手がエノクの口から離された。
「だってさぁ」
「見たんだろヘビの化け物？　だったら、行くよ！」
腕を掴まれエノクは強引にアリアに引きずられるようにして連れて行かれてしまった。

薄暗い家の中で身を潜めてディートリッヒが現れるのを待つ二人。
「ねえ、もう眠いから止めようよ」
「しーっ、黙ってな」
大きな玄関ホールの物陰でアリアは目を凝らしてディートリッヒが現れるの待った。すると、足音が聞こえ人影が現れた。
人影は案の定ディートリッヒで、彼は辺りを用心深く見回しながら屋敷の外へ出て行った。どうやら警戒されてしまっているらしい。
屋敷を出て行ったディートリッヒのあとをすぐさま二人は追った。
月明かりの下を静かに身を潜め歩くディートリッヒは、辺りに注意を払いながら時折後ろを振り返ったりして、屋敷の裏へ足を運んだ。
エノクとアリアはディートリッヒに気づかれぬように慎重にあとを追う。そして、ディートリッヒが目的地に着き足を止めたのと同時に物陰に隠れて様子を伺った。
ディートリッヒは小さな声で何か叫んでいた。
「ユリア、今宵も貴女に会に来てしまった」
すると、ユリアがすぅっと姿を現した。
「ああ、ディートリッヒ今宵も貴方に会えて私はどんなに胸が弾むことか」
「僕もユリアに会えてうれしい、けれど昨晩僕らのことをエノクという青年に見られてしまったんだ」
「知っております。けれども案ずることはありませんわ」
「けれど……」
ディートリッヒは口を噤んだ。

「どうしたのです？」
心配そうな表情を浮かべるユリアにディートリッヒはあのことを話した。
「貴女のことをヘビの化け物だと言われた」
「そんな私がヘビの化け物だなどと！？」
「わかっているよ、ユリアが化け物であるはずがない」
「だったら、すぐにでも追い出してください」
物陰から誰かが飛び出して来て、ディートリッヒとユリアは驚いてしまった。
「その人はユリアではありません」
物陰から出てきた人物はユリアに指を差し断言した。この人物はイリスだった。
　これに驚いたのはエノクとアリアもだ。まさかイリスが現れるとは思ってもみなかった。そこで仕方なくエノクとアリアは物陰から出て行った。
「まったく、なんでイリスがいるんだい？」
アリアは髪の毛を掻き上げながら、そうイリスに聞いた。
「私はディートリッヒに目を覚まして欲しいのです」
この口調はいつものイリスとは少し違っていた。声は同じでも違う人がしゃべっているようだ。
「僕に目を覚まして欲しい？　何を言うんだ、ここにいるのはユリアだ。そうだろユリア？」
不安そうな顔をしたディートリッヒに顔を向けられユリアは深く頷いた。
「私はユリアです。私はディートリッヒの最愛の妻です」
「嘘です、あなたはユリアではありません」
イリスは断固とした口調でそう言うと、ぶつぶつと何かを唱え、ユリアを凛とした眼差しで睨んだ。すると、ユリアの身体に変化が起きた。
　そこにいるのはすでにユリアではなくヘビの怪物であった。それ

を見たディートリッヒは恐れおののき腰を抜かしながら後退った。
悲しそうな目をするヘビの怪物。
「ディートリッヒ様……貴方には知らないままでいてもらいたかった」
怪物の顔が一転して狂気の相を浮かべてイリスに襲い掛かった。が、突如イリスの前に現れた光の壁にぶつかり遠くに吹き飛ばされてしまった。
息を荒げながら地面に倒れこむ怪物の顔には依然狂気が浮かび、半狂乱になり近くにいたアリアにその牙を向けた。
怪物は鋭い爪を振りかざしアリアに襲い掛かる。
土の上を滑るように移動しながら剣を抜き、襲い掛かってきたヘビの怪物に一刀を喰らわした。
斜めに裂かれた胸から血が噴出し、ヘビの化け物は地面にひれ伏した。
「私はディートリッヒ様に憧れていた。……だからユリアの死んだあと、私が彼女の代わりになれればと……」
そう言ってヘビの化け物は息を引き取った。
地面に膝を付き魂が抜けてしまったようになってしまったディートリッヒにイリスがやさしく手を差し伸べた。
ディートリッヒの目が見開かれ、涙が頬を伝って地面に零れ落ちた。
「……ユリア？」
そこにいたはずのイリスはいつの間にかその姿をユリアに変えて、ディートリッヒに手を差し伸べていた。
「ディートリッヒ、貴方はここにいるべきではないわ。さあ私の手を取って……」
差し伸べられた細い手をディートリッヒはやさしく掴んだ。二人の男女が天へ昇ってゆく――。
イリスの身体から白い翼を生やしたユリアが離脱し、両手を背中に回しディートリッヒの身体をやさしく包み込み、光柱の中を昇天

して夜空の闇に消えて逝った。
風になびく夜香草が淡い光を放ち、二人の男女を見送った。そして、屋敷は見る見るうちに風化していき廃墟と化した。
何が起きたのかとエノクとアリアは顔を見合わせ、地面に倒れ気を失っているイリスに気づきすぐにアリアが駆け寄る。
「イリスしっかりしな！」
「……う、ううん……アリアさん！？　え、あの、どうして私はここにいるんですか！？」
イリスも自分の置かれている状況についてわかっていないようだ。自分が今なにをしたのかもわかっていない。
「あたしもよくわかんないんだけどねえ、イリスが突然ディートリッヒの奥さんに変わって一緒に空に昇っちまったんだよ」
「……何かに襲われて……それで、『身体を貸してもらいます』って聞こえたと思ったら……それから記憶がなくて？」
「さっぱりだね、今回の事件は？」
二人の会話を聞いていたエノクも首を傾げ、あることに気づいた。
「あの、どこで野宿しようか？」
屋敷はすでに廃墟と化して、壁が少し残っているだけだった。その周りには広大な庭園が前と変わらぬまま残っていた。
辺りを見回したアリアが髪の毛をかき上げ、ため息を付きつつ言葉を漏らした。
「……今晩は花畑の真ん中で野宿だね」

翌朝3人は旅の商人と出会い奇妙な話を耳にした。
「あの屋敷の旦那はな、病気で死んだ妻の後追い自殺をして数年前に死んだんだが……」
「え、今なんて言いました？　死んだって言いましたよね？」
エノクは目を丸くして、後ろにいた二人の顔を見た。屋敷の旦那、つまりディートリッヒは数年前に死んでいるとこの商人は言っているのだ。

「言った、言った、あそこの旦那は数年前に亡くなってるよ。でな、この辺りじゃ有名な噂話なんだがな、その旦那の幽霊が出るっていうんだよ、これが」
この話を聞いた3人は蒼い顔をしてしまったが、そんなことにはお構いなく商人は話を続けた。
「俺は直接見たってわけじゃねえが、旅人がよくその旦那に会って食事に招待されて廃墟のはずの屋敷で……どうしたんだ？　3人とも顔が蒼いぞ？」
3人は顔を見合わせて黙ってしまった。
「おまえら、もしかして！？」
「あ、あのスープおいしかったですよね？」
イリスが二人に言葉を投げかけた。二人はひとつ頷くだけで口は開かなかった。
今度は商人が蒼い顔をしてしまった。
「食事に招待されたのか？　ま、まあ、そこに棲んでる幽霊は旅人を歓迎してくれるだけのいい幽霊だからな……おまえらだって、現にぴんぴんしてんじゃねぇか、な？」
すでに3人には商人の言葉など耳に入っていなかった。まさかディートリッヒまでもが幽霊だったとは思いもしなかった。これが3人の今の気持ちだ。
エノクたちの巻き込まれた幽霊騒動以来、あの場所で旅人がディートリッヒの幽霊に出会い食事に招待されることもなくなった。ディートリッヒは今は天に昇りユリアと幸せに暮らしているに違いない。イリスはそう心に願った。

龍神湖

龍神湖に向かう途中でエノクは生まれて二度目の実践を体験していた。
「大バッタの群れに出くわすなんてついてないよね～」
ティンカーベルは呑気な口調でエノクに話し掛けた。
「呑気に言ってる場合じゃないでしょ！？」
剣を握り締めるその手はすでに大量の汗をかき、エノクは自分の身を守るのに必死だった。
大バッタはさほど凶暴なモンスターではない。1対1であれば大人だったら誰でも軽々倒せるモンスターだ。だが、今は1対1ではなかった。
30匹ほどの体長1mの大バッタがエノクたちを取り囲み襲い掛かってきていたのだ。
アリアはイリスを守りながら自分の方に襲い掛かってくる大バッタだけを倒している。あとの大バッタはエノクに任せているのだ。
「ほら、エノクいい修行になるからがんばんな！」
軽々と大バッタをなぎ払うアリアと両手を振るイリス。
「エノクさんがんばってくださ～い！」
二人に応援されながら、エノクは剣を振るう。剣の重さはティンカーベルによって水鳥の羽のように軽くなっている。だが、剣はエノクの意思で振るわれている。
数十分後全ての大バッタを倒したエノクは草むらに背中から倒れ込んだ。
「あ～疲れた」
「まだまだだねぇ～、大バッタなんてモンスターのうちにも入らないザコだよぉ」
そんなことわざわざティンカーベルに言われなくてもエノクは十分わかっている。しかし、エノクの成長振りは目覚ましいものだった

エノクの横に近づいてきたアリアも満足そうな笑みを浮かべている。
「まあ、エノクにしては上出来だね」
庭園を出発してから3日が過ぎたが、その3日の間、エノクは暇さえあればアリアに剣の稽古をつけてもらっていた。今回の戦闘ではその成果が出たと言える。
だが、エノクはまだまだ満足はできない。もっと、もっと強くなって大魔王カオスを倒さなくてはいけないのだ。
満足はできない。しかし、今の戦闘でだいぶ体力を使ってしまった。そんなエノクにアリアはうれしそうな顔をして空を指差して言った。
「ほら見なよ、キラービーが2匹飛んでるよ」
キラービーとは大きな蜂のようなモンスターだ。大抵の野生のモンスターはむやみに人間を襲うことはないが、このキラービーは人間を見つけると襲ってくる習性があった。
2匹のキラービーはエノクとアリアを発見し襲い掛かってきた。
「ほらエノク、相手してやんな」
「あのアリアは？」
「あたしはイリスと遠くで見てるから」
と言ってアリアは一目散に逃げてしまった。その逃げる途中でアリアは振り向き、
「あの針に刺されないように気を付けな、刺されたら1時間以内に抗生剤打たないと死ぬからね」
「えっ！？　死ぬの？」
「エノク前見て！」
ティンカーベルが叫ぶ！　すでにキラービーはエノクの目の前まで来ていた。しかも2匹同時にだ。
キラービーは集団で個体を襲う習性があり、2匹のキラービーはエノクにまず狙いを定めたのだ。
猛毒を持つ鋭い20cmほどの針が2本同時にエノクに襲い掛か

る。それを剣でなぎ払うが、防御するだけで攻撃には出られない。
そんなエノクを見かねしまうティンカーベル。
「あのさぁ、手伝ってあげようか？」
「ちょっと黙ってて！！」
別に余計なお世話だったから怒鳴ったわけではなく、ただ、エノクに余裕がなかっただけだが、ティンカーベルにしてみれば少しムッとしてしまった。
いきなり剣が重くなって、エノクの方がぐっと地面に引き寄せられた。
「……うっ」
急に重くなった剣を振り上げ偶然にも1匹のキラービーを真っ二つにすることができた。だが、キラービーはもう1匹残っている。
猛毒の針がまるでフェイシングの切っ先のようにエノクに襲い掛かる。風を切る音が耳元でシュッシュッ鳴り響く。紙一重で避けているのだ。
紙一重で避けるのは匠の技か、それとも本当にギリギリなのか――エノクは後者だった。
わずかな段差につまずきエノクがバランスを崩したのをキラービーは見逃さない！
猛毒の針がエノクの肩をかすり服を破いた。敵の攻撃を受けながらも、攻撃でできた一瞬の隙をまさに捨て身でエノクは一刀をキラービーに喰らわされた。
地面に真っ二つにされたキラービーが息絶え絶えにピクピクと動いて、息絶えた。エノクもそれに合わせて草むらに膝を付き、アリアとイリスがすぐに駆け寄ってきた。
「ど、どうしましょうアリアさん！？」
「だいじょぶだって、そんなに慌てなくても」
「だ、だって1時間で死んじゃうんじゃないんですか！？」
肩で息を大きくするエノクはすでに顔を真っ赤にして、肌からは汗が大量に噴出していた。

キラービーの毒は高熱と身体に麻痺症状を引き起こす、早く手を打たなくてはエノクが危ない。
慌てふためくイリスに対して、アリアは至って冷静で、腰に装着してある万能ベルトから針の付いた注射器らしき物と液体の入った３ｃｍほどのカプセルを取り、カプセルを注射器に装着した。
「アリアさん何をするんですか？」
「打つよ」
そう言ってアリアはエノクの首の付け根辺りに注射器の針を突き刺した。
「絶対安静、３０分はここから動かさない方がいいね」
「だから、エノクさんになにしたんですか？」
「龍神湖の梅の老木から取れる伝説の実から作った梅酒を打った」
「梅酒ですか？」
酒と聞いてエノクになんで酒なんて打ったんだとイリス思ったが、アリアはその理由を簡単に説明した。
「その酒は魔力を秘めていて、大抵の病気なら簡単に治っちまうだよ」
「あーなるほど……なんでアリアさんがそんな物持っているんですか？」
「こないだ会った商人から貰った」
「そんな、すごいアイテムただで貰ったんですか？」
「ちょっと、色仕掛けしたら簡単にくれたよ」
色仕掛け――イリスには到底できない芸当で、彼女は顔を真っ赤にした。
イリスが顔を真っ赤にしてうつむいてしまっていると、アリアが何かを見つけて大声でそれを呼んだ。
「おーい、病人がいるんだ、ちょっと乗せて行ってもらえないかい？」
イリスが顔を上げると、遠くから馬車がこちらに向かってきていた。
馬車はイリスたちの前で止まり、中年の馬借が声を掛けてきた。

「病人がいるってほんとか？」
「キラービーに刺されて、薬は打ったが運ぶのに困ってねえ」
そう言いながらアリアは髪の毛を掻き上げながら馬借を色っぽい目つきで見つめた。
「おらぁ、竜神湖まで荷物を運びに行くんだども、荷物と一緒でいいなら後ろに乗ってけ」
「私たちも龍神湖に行こうと思ってたんですよ。よかったですねアリアさん」
「馬車だったら昼前に着くかもしれないねえ」
アリアはエノクを担ぎ上げると馬車の中に乗り込んだ。それに続いてイリスも乗り込む。
馬車の中には荷物がたくさん積んであったが、エノクを寝かせて、アリアとイリスが乗るには申し分のないスペースが空いていた。
エノクたちを乗せた馬車は龍神湖へと出発し、草原を越えて、森を切り開いて作られた街道を通り、日の光で輝く龍神湖へと出た。
周囲を森に囲まれた竜神湖。周囲２４ｋｍ、面積８平方ｋｍ、水深は不明。冬でも水温は３０度近くまであり、その理由は地熱によりものだとか、いろいろと説があるが一番有力なのは湖の底に竜宮があるからだと言われている。
竜神湖は観光名所となっており、多くの観光客が訪れ、土産屋も多く点在している。
馬車の中で元気を取り戻したエノクは馬借にお礼を行って馬車を降りた。
「どうもありがとうございました」
「元気になって良かったな。おらぁ仕事があるから、んじゃな」
馬借は手綱を握り締め、馬車は遠くに走り去ってしまった。
湖に向かって歩き出すエノクたち。湖の周りには観光客や釣り人が数多くいて、湖の上にはボートが何艘も浮かんでいた。
「湖って大きな水溜りみたいなんだね」
とエノクに言われたイリスは返答に困りかねた。

「水溜りですか？　魚とかも棲んでいますから、水溜りというのは……水溜りにも微生物が棲んでいて……えっと、えっと。アリアさ～ん」
「大きな水溜りだと思うんだったら、水溜りでいいと思うけどねえ」あっさり適当に答えられてしまったイリスは余計に困ってしまったが、エノクの中では湖は大きな湖だということで認識された。
　お腹をさすりながらエノクはイリスを見つめた。財布を握っているのがイリスだからだ。エノクに財布を預けると、無くしてしまったり騙し取られたりする可能性が高く、アリアは戦闘の時邪魔だからという理由で、消去法でイリスが財布の管理をすることとなった。
　イリスに財布を預けたのは正解だったかもしれない。貧乏暮らしが長かったためか彼女の財布の紐は硬い。
「まだ昼食には早いですから、もう少し我慢してください」
「え～でもぉ～」
だだをこねるがイリスは絶対財布の紐を緩めようとはしなかった。
「昼食の時間まで待ってください。その間にアイオンさんの情報を集めましょう？」
海の上で離れ離れになってしまったアイオンを探す。それがここに来た一番の理由だった。
　湖の周辺で釣り人に聞き込みをしたり、お店で聞き込みをしたが、アイオンを見た人や話した人はいたものの、その後のアイオンの足取りはわからなかった。
「その詩人なら私も見たけど、どこに言ったかまではわからないなあ」
若い男性はそう言いながら首を傾げた。今回も有力な情報が掴めなかったかとエノクたちが思った時、突然若者が何かを思い出したように手を叩いた。
「そうだ、あの爺さんなら知ってるかも」
「お爺さんですか？」
イリスがそう聞き返すと、若者は湖を指差した。

「湖の真ん中でいつも釣りをしてる有名な爺さんがいて、その爺さんこの湖のことならんでも知ってるんだよ。だから、もしかしたら、詩人のことも知ってるかもな」
実はエノクたちはそのお爺さんのことを別の人からも聞いていた。みんな口々にそのお爺さんなら知っているかもしれないと言っていたのだ
「やっぱり、その爺さんに会いに行こうかねえ？」
アリアは髪の毛を掻き上げながら、親指で自分の後ろにあるボートを指差した。それにエノクとイリスは頷くと若者に軽く頭を下げて、ボートに乗り込んだ。
ボートを漕ぐのはエノクの役目だった。
水面上をゆらゆらと進み、先ほどの若者が指差した老人の乗るボートの近くまで来ると、老人の方から声を掛けてきた。
「わしに何か用かな？」
エノクをボートを漕ぐのを止めてボートから身を乗り出した。
「あの、数日前にここに来た詩人を探しているんですけど、何か知りませんか？」
「お前さんたちが探しているのは、アイオンと言う詩人のことじゃろ？」
「はい、そうです、でもなんで……？」
でも、なぜ、すぐにアイオンを探していることを言い当てたのか？
「不思議な顔をせんでもいい。アイオンと言う詩人からやがてエノクという青年がここに来るかもしれないと聞いておった」
「アイオンは今どこにいるんですか？」
周りの見えなくなってしまったエノクはボートから落ちそうになるくらいに身を乗り出していた。
「エノクさん、落ちますよ！」
イリスに服を引っ張られながらエノクは身を引っ込めた。
「あ、ごめん、つい夢中になって、でもアイオンは今どこに？」
「その詩人は3日前にこの湖に来て、今は七英雄のひとり竜王ザッ

ハの住む天昇山［テンショウザン］に向かっているところじゃろう」
その話を聞いてエノクはすぐさまオールを取ってボートを漕ぎ出そうとしたしかし、老人がそれを止めた。
「まあ、急ぐ気持ちはわかるが、お前さんたちには来てもらいところがある」
「どこにで……」
エノクの言葉は途中で止まってしまった。老人に変化が起きたのだ。
老人の身体は光に包まれ、その光が治まるとそこにいた筈の老人は大きな年老いた亀になっていた。
亀は杖をつきながら二本足で立っていて、人間の言葉までしゃべったのだ。
「竜宮まで案内する」
大亀が杖を天高くかざすと、エノクたちの身体はシャボン玉のような膜に包まれ水の中に没してしまった。
水の中を泳ぐ亀の後ろを泡に包まれて導かれるようにして付いていくエノクたち――。
湖の底は深く、けれどもすごく水が澄んでいるのでどこまでも見渡せて、魚たちがたくさん泳いでいるのが見える。
エノクたちを引きつれ亀は湖の底へ、深く深くまで潜ってゆく。やがて、エノクたちの目に信じられない光景が飛び込んで来た。
湖の底に存在する宮殿。――竜宮。
アリアは記憶の糸を辿った。
「（まさか、本当に湖の底に宮殿があるなんてねえ）」
アリアは竜宮の伝説を父と母から以前ここに来たときに聞いたことがあった。だが、まさか本当に湖の底に宮殿があるなど信じてもいなかった。
竜宮は確かにアリアの目前に存在していた。そして、徐々に建物は大きくなりやがて竜宮に吸い込まれるようにして中へと入って行った。

龍神湖（後書き）

まことに勝手ながら、この作品はここで一時休止となります。
ここまで読んでいただいた方には申し訳ない気持ちでいっぱいです。
しかしながら、作品のおもしろさなどを追求する結果、ここで執筆を断念することになりました。
いつか続きを書ける日が来ると自分自身でも信じております。

作品中、改行や1マス空けなど、みなさんの中には不思議な文法だと思われた方もいるかと思います。
「なろう」という媒体では、横読み、縦読み、ＰＣ・ケータイなどの、レイアウトの違うもので読めてしまうという問題点と、自分が本来表現したい文章の書き方との間で妥協した結果、あのような書き方になりました。ご了承ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0964e/

アルティエル戦記

2010年10月9日03時41分発行